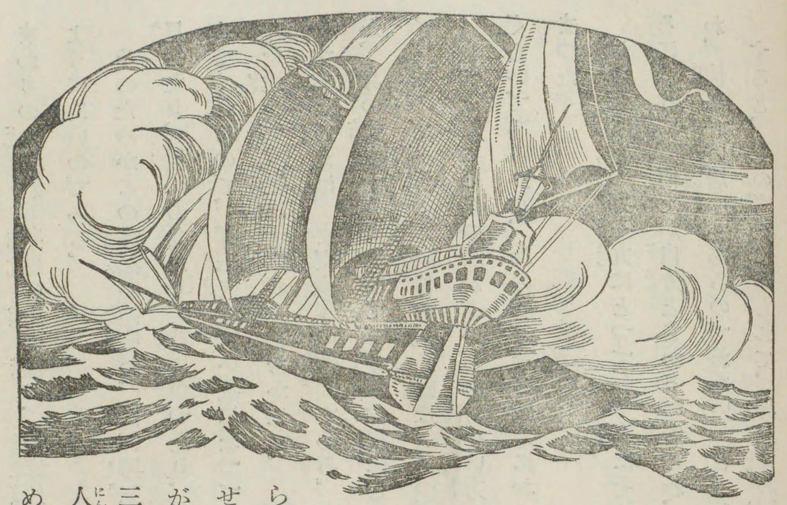
怪船卯三丸

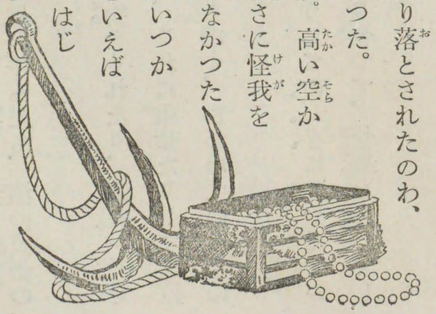
一　鷲に運ばれて十三年



鷲に運ばれて十三年

鷲にさらわれた卯三丸が、この絶海のはなれ島にふしぎにも無事にふり落とされたのわ、今から十三年前のことであつた。

その時卯三丸わようやく三歳。高い空からふり落とされても、身體の輕さに怪我をせず、したがつて氣絶もしていなかつたが、それでも一切夢中の間に、いつか三年を過ごしてしまい、六歳といえば人間並に、大方物心のついた頃、はじめて氣がついて見ると、自分の



まわりの人間わ、其邊の土の様に、皆赤黒い顔をしているのに、自分だけわ手も足も、濱の貝殻のように白いのである。

そのためかこの赤黒い連中わ、白い卯三丸をめづらしがつて、甘い食物をくれたり、面白い踊を見せたり、肩にのせたり、背に負つたり、時にわ二三人で手車をくんで、それに乘せたりして遊ばせてくれるので、卯三丸も好い氣になつて、泣いたり怒つたりしたこともなく、きわめてのんきに年を送つて、遂に十六の春をむかえた。

十六といえば、まだ少年の仲間である。ところがこの卯三丸わ、こうしてのんきに育つたせいか、身の丈も十分に伸びて、今わ七尺にとゞくばかり。肉付もそれにつり合つて、骨組もたくましく、まるで西洋の軍神像を見る様な、あつぱれ美丈夫になつてしまつた。

もつともこの島の者わ、いづれも小い方でわないが、それでも卯三丸の前え出ると、象の前の牛ぐらいであるから、おのづとその威力におされて、いつかこの卯三丸を、島の王のように立てゝしまつた。

けれども當の卯三丸にとつてわ、別にそれが嬉しくもない。それというのもこうして段々成人するにつれて、何だか自分とまわりの者とわ、初から同じ仲間とわ思われず、したがつてこの自分に、他に好い居處があるのでわないかと、おぼろげながらも考えるようになつた。

すると、その考えにかられて、卯三丸わ間さえあれば、海岸の岩の上にのぼつて、海の上を見渡して、何所かに自分の落付くところわないかと、目を見張らさずにわいられなかつた。

ある日、また例のとうり、岩の上で目を凝らしていると、はるか彼方の雲の峰と、波の原との間から、ポツリと小い黒い物が見える。

はじめわ別に氣にもとめなかつたが、それがだん〳〵大きくなつて、形がわかるようになつてくると、卯三丸わ思わず聲をたてた。

『ヤ、、鯨が、羽根をはやして來た。』

鯨が羽根を生やして來た？　そんな物があれば魔物だ。もつとも卯三丸わ島にばかりそだつて、まだ船というものを見たことがない。——實わこの島があまりに離れているので、まだ船というものが、ほとんど近づいたことがなかつたのである。さればいま帆を張つた船を、鯨の羽根の生えたのと見たのも、別に無理でわないのである。

卯三丸が驚きの瞳をこらしている間に、船わいよ〳〵近よつてきた。それわ千トンくらいの帆前船であつたが、その甲板にわ大勢の者が出て、しきりに此方をながめている。

これを見ると、卯三丸わまた驚いた。

『ヤ、〳〵鯨の背に人間がいるナ。』

若し側に誰かいたら、きつとふき出さずにわいられまい。けれども卯三丸わ眞面目である。

『さてわこの大鯨め、おれ達までさらいにきたか。』

こう思うと用捨わない。側にあつた岩の角の、一ト抱えほど出ばつたところを、一トゆり揺つて揺り取ると、力をこめて投げつけた。

と、その岩わ空をきつて、およそ二十メートルばかりにある、船の舳にあたつたからたまらない。船わ忽ち大穴をあけられ、それから流れこむ汐水に、忽ち半身を海え沈めた。

甲板に出ていた人たちわ、あわて騒いで海え飛びこむ。つゞいて船も沈んでしまつた。

卯三丸わ見事退治た氣で、得意になつて海をみていると、やがて其所此所の波の間から、五人斗りの姿が見えて、だん〳〵此方え近づいくる。

『ヤ、、此方え向つてくるナ。』

と、卯三丸わ再び岩をつかんだが、考えて見るとその者わ、皆只の人間らしい。それなら別に恐れることもないと、しばらく様子を眺めていた。

もつともその心の中にわ、いわゆる羽根のある異形の鯨を、只の一撃で仕留めたので、初めて自分の力を知つて、自分を恃む氣も強かつたのである。

その間に、泳ぎついた者を見ると、皆人間でわあるが、髪の色も顔の色も、この島の者とわちがつている。その上この島の者わ、卯三丸までこのとうり、腰のまわりに藻草をまとい、首から貝殻をさげているばかりなのに、今海から上つて來る人達わ、いづれも手足を巾につゝんで、只首ばかりを出している。それが又異様に感じたので、卯三丸わまだ油斷をせず、手の岩片わはなさない。

ところが泳ぎついた連中わ、まづ岸に立つて、たがいに何やらいゝながら、身體をつゝんだ巾をぬいで、その汐水をしぼつているが、その時はじめて現わした膚わ、手も足も、胴も背も、みな自分と同じ色をしている。

これをみると卯三丸わ、急になつかしさを感じて、いそいで岩からそこえと下りた。

先方の者どもわ、このとき此方を見かえつたが、これわさも驚いたように、いづれもきつと身構えをした。

『お前方わ何所からきた？』

卯三丸わまづ聲をかけると、

『そういう貴樣わ何者だ？　よくもおれ達の船をしづめたな。』

と、聲をそろえてつめよろうとする。

『ナニ、船？』

『折角こゝまで乘りつけた船を、よくも沈めてしまつたな。』

『船なんぞわ知らないが、お前方が鯨につかまつてたから、鯨を退治て助けてやつたんだ。』

『ナニ、鯨……？　そんな物がどこに居る？』

『今までお前達がつかまつて、背にのせられていたぢやないか。』

こう云うと先方の者わ、思わず顏を見合わせたが、

『なんだ、おれ達の船を鯨だと?』

『羽根の生えた鯨ぢやないか……一たい、どこからあんな奴に、お前達わさらわれてきたんだ。』

卯三丸のこの言葉に、皆思わずふきだした。

『さてわ此奴船を知らんな。』

『船ツていう鯨なのか。』

『馬鹿をいえ! 船といえばおれ達の、海を乗りまわす大切な物だ。』

『それぢやアあれわお前達が、乗るのに飼つてた鯨なのか。』

『エイ、まだ鯨だと思つてる。よく〳〵こりやアわからずやだ。』

と、一人が吐き出すようにいうと、

『それも無理わない。どうせこんな島の外に、世間を見たことがないのだから。』

と、又一人が口を出す。

『それにしても丸木舟ぐらいわ、持つていそうなものだがなア。』

と、三人目がいつてみたが、四人目わ頭をふつて、

『島中見ても船になりそうな木わ、一本だつてありやしない。』

『そんならどうして海をわたる。』

『わたる先の陸を知らなけりやア、舟もいらない筈だなア。考えて見りやア不憫な者だ。』

と、あざける。

卯三丸わぢつと聞いていたが、こういわれても腹も立てない。かえつてその話の中の、わたる先の陸という、言葉が耳に留まつたので、さてこそ常から考えている、外の土地わどこかにある。そしてこれ等の人達わ、そう云うところから來たのだろうと、思うといよ〳〵なつかしくなつた。

『お前達のいうとうり、おれわこの島の外に知らない。けれどもこの島の外に、きつと別のところがあつて、おれももとわ其邊から、ひとり渡つて來たのだと思う。お前たちのきたのをさいわい、どうかもつとその話が聞きたいなア。』

と、卯三丸の云いだすのを、聞いていた中の一人が、なにか思い出したと見えて、他の一人にさやくと、たがいにうなづいていたが、

『それぢやアやつぱりこの男かナ。』

『きつと、そうだ〳〵。』

と、果わまた今更のように、ぢつと卯三丸を見るのであつた。

二 寶玉の光

此の時、一人わまた考えていたが、しきりに首を傾けながら、

『だがまてよ、それならまだ子供のはずだが……此奴わ立派な大人ぢやないか。』

『そういえばそれもそうだが……まてよこの島にわ此奴のほかに、一たいどんな奴がいるのだろうな?』

と、一人が伸びあがつてあたりを見まわした。

ちようどその時、いつも卯三丸の側えきて、なにかの用事を足している、いわば従者のような若い男が、二人ほど走りよつて來たが、見馴れない異色の人間が、五人も濱に立つているので、さも膽を打たれたように、立ちどまつて目を見はつた。

無論この二人わ、卯三丸とわ類のちがつた、赤黒色のはだか男である。

船からの者どもゝ、これにわギヨツとしたらしく、いづれも警戒の身構をしたが、生憎なんの武器もないので、これにわ不安を感じもした。

ところで、來合わせた土人達わ、必ずしもこれに危害わ加えない。かえつて自分達も不安を感じるように、卯三丸の側え來て囁いた。

『一たい、彼等わ何者だろう?』

と、聞くと、

『鯨に乘つてきた連中だ。』

と、これわ一向落付いている。

それというのも卯三丸にわ、そのいわゆる鯨さえ、一と撃に石で撃ち沈めたくらいだから、どんな奴が來たつて恐くないという、自信が十分あるからである。

その中に卯三丸わ改めて問いかけた。

『お前達わこんなところえ、一たい何しにきたんだネ?』

『なにしにということわない。船がこわれてしまつちやア、こゝえ上るより他無いぢやないか。』

と、不平そうにいう者がある。

これを聞くと卯三丸わ、さすがに少し解つてきたと見えて、

『ウン、そうか。そりやア氣の毒だつたなア。だが折角來たもんだ。コレ、みんなでよくお世話してやれ!』

と、今來た土人等をかえり見た。

人々わまた手をふつて、

『そんなことより、船をどうかしてくれ。みんなで手を貸してくれりやア、まだ上らないこともあるまい。』

と、未練そうに海の方を見る。そこにわ先刻沈められた船が、まだ三分ばかり頭を出している。

『ぢやア船をあげてくれというのか。』

と、卯三丸がきくと、

『船がなけりやア歸れないぢやないか。』

と、それに答える。

卯三丸わちよつと考えたが、

『よし、そんなら大勢の手を貸すまでもない。あげるならおれが上げてやる。だが、元のとうり浮きあがつたら、今度わおれも乗せてくれよ。』

と、云い出した。

相手わ顔を見合わせたが、やがてまた一人が、

『乗りたきやア乗せてやるが、その代り、こつちのいうことを聞かなけりやいけないぞ。』

『云うこと、わどんなことだ?』

『此方等にやアみんな仕事があるんだ。お前ばかりたゞ乗せて、遊ばしとくわけにやいかない。』

『仕事たアどんなことだ。』

『眞珠を取つたり、珊瑚を取つたり、時々魚をとつたりもする。』

『面白そうだな。そんな仕事ならおれもするよ。』

『そんならはやく船をあげてくれ。』

『よし。』

つよくうなづくと卯三丸わ、そのまゝ海の中えと入つて行く。

なにをするかと人々わ、卯三丸の樣子を見ていると、卯三丸わ海え入るがはやいか、すぐ波の下えもぐりこんだ。空を運ばれてきた卯三丸わ、海の中をも自在に歩くのである。

その海の波の陰に、しばらく姿をかくした卯三丸わ、やがて沈んだ船の下え行くと、その底に手をかけて、ウンとばかりにさしあげた。

するとその恐ろしい力に、一旦沈んだ船わ、また波の上え現われてきた。

陸から見ていた人々わ、手を拍つてはやすもあれば、目を張つて見つめるもある。

中にも土人等わ、又しても鯨と思つたか、そこらの石を拾いとつて、しきりに船えと投げつけた。

けれどもそれわ小石だから、當つても孔わあかず、皆カン〳〵とはね飛ばされてしまう。

そのうちに、船が全體を現わしたと思うと、卯三丸の姿も波の上に現われた。そしてその手を船の一端にかけて、別にエイ〳〵とも聲をかけず、陸の方えと押あげて來る。それがまた土人にわ、怪獸の向つてくるように見えたので、驚いて皆逃げだしたが、船からあがつた人々わ、卯三丸の怪力に舌をまいて、我知らず手をあげ、足を踏み、狂氣のようにはやしたてた。

卯三丸わこうして船を押しあげると、今度わ前の方えまわつて、舳のところに兩手をかけ、船を左右にグイ〳〵搖つて、中にたまつた水を流し、はてわまた高くさしあげて、先刻あけた大穴を、下の方にむけながら、それからまた殘つた水を、ザア〳〵とこぼすのが、まるで張子の物でも扱うようである。

するとまたその大穴から、逃げおくれた船員の死骸が、三つ四つころげだしてきた。

これを見ると他の者わ、驚いてそれえ走りよつたが、もうことが切れたと見ると、皆悲嘆の顔をしかめた。

けれども卯三丸わさわがない。まづその死骸を抱きあげて、その口に自分の口をあて、フウツと一つ息を入れると、その腹が高く波打つて、ふしぎにも生きかえり、またその次ぎにも同じように すると、同じく息を吹きかえし、ついに出てきた三つの死骸わ、一人残らず生きかえるのであつた。人々わ喜ぶまいことか。これこそ全く神業だと、中にわ卯三丸に手をあわす者さえある。

卯三丸わまた船の中を見て、

『もう残つていないか。』

と、又一つつよく揺振ると、今度わ人間でわなかつたが、そのかわり二尺四方ばかりの、箱が一つ轉げだした。

箱わ皮ではつた上に、厳重に金具のついた、いかにも大切らしいものであつた。

すると人々わ一度に躍りあがつて、

『オ、あれが出たか、ありがたい。』

と、走りよつて、箱にとりつくのが、まるで可愛い子供が歸つてきたという風だ。卯三丸わ不審がつて、

『なんだネ、それわ？』

『これわわし達の命よりも大切な物だ。』

『イヤ、幾つもの命をかけて、やつと採りあつめた大切な寳だ。ドレ一つあらためて見よう。』

と、その錠前に手をかけたが、鍵がないのであけることができない。それでまた困つていると、卯三丸わ進みよつて、

『あけたけりやア、こうすればいゝだろう。』

と、その錠前の側を、指の先でちよつと押したら、パチンと音がしてあいてしまつた。

船の者わよろこんで、急いで蓋をあけると、中がまた二重蓋になつていて、その中からまた小さい木箱がでた。

これまでわ汐もとうつていないので、木箱わ無事に濕れてもいなかつた。そこでその蓋を更にあけると、中にわ眞珠や、珊瑚珠や、その他目もくらむような寳玉が、キラ〳〵五色の光を放つている。

これを見ると卯三丸わ、さすがに子供らしく聲をあげた。

『やア、きれいだなア〳〵！』

その聲がまた柄になく、いかにも可愛くひゞいたので、人々わ思わず笑いだした。

『ハヽヽア。お前さんにもそんなにきれいかい。』

『こんなきれいな物はじめて見た。』

『欲しいかネ？』
『欲しいなア。』
『欲しけりやなおのことだ。わしらの云うことを聞いてはたらきなさい。』
『ウン、はたらく〳〵。連れてつとくれ！』
『それにしても船がこれぢやア……』
『それぢやアはやく直すがいゝ。』
『そうだ。はやく直さなけりやア……』
こういうと一人二人、船の中え入つていつたが、中からやがて道具箱を持ちだしてきた。
そこでその係りの者が、三四人道具をもつて、船の修繕にとりかゝつた。これわ卯三丸が石で打ちあけた、例の大穴を塞ぐのである。
こういう仕事を見るのわ、卯三丸生れて初めてだから、腕をくんでぢつと見ていたが、その中になにか思ひつくと、急いで彼方の小高い岩え登つて、手をあげてなにか叫ぶと、さつき一度逃げた二人を眞先に、一團の土人が先を争つて、この海岸えかけ寄つてきた。
これを見ると船人わ、スワ一大事と顔色をかえて、槌や、のみをもつたまゝ、皆きつと身構えるのであつた。

三　大章魚の出現

なにしろ、見るから恐ろしい人相の奴が、大勢かたまつて、眼を光らせながら、わからない言葉で話しあうのだから、普通の人間にとつてわ、こんな無氣味なことわない。
ところが、案外にもこの異形の男どもわ、別に船人に危害を加えようともしない。かえつて卯三丸のいうことを、素直に聞いているようであつたが、その中に卯三丸が、なにか最後の合圖をしたと思うと、又一せいに元の方角えと、足を急がせて走りこんだ。
なんの事だか一向解らないが、兎に角これで安堵した船人共わ、再び以前の作業にかゝつたが、大きな岩であけた穴だから、急にわ塞がりそうにない。
すると卯三丸わ、その側えきて手をふりながら、
『待ちなさい〳〵。そんなことするよりも、今にいゝことをしてあげる。』
『でも、こゝを直さなけりやア、又海え沈んぢまうぢやないか。……お前が餘計なことをしてくれたからだ。』
『その心配わいらないよ。今に見なさい！』
と、いつている間に、さつき奥え駈けこんだ連中が、再びこゝえ引返してきた。
見るとその大勢わ、一つの大きな物をかついできた。物というのわ、ちよつと見ても解らないが、

やがて皆で引張つたとおもつたら、これわ大きな薄い、平たい、黒いところや、薄色のところのある、獣の皮のようなものであつた。

卯三丸わそれをうけとると、やがて船の側えいつて、働いている船人をおしのけ、その獣の皮のようなもので、開いた穴をふさいだと思うと、フウツと息をふつかけた。

と、ふしぎにもその孔わ、まるで痕跡もなくふさがつたばかりか、ほとんど初めの通りの船になつてしまつた。

『や、こりやアふしぎだ。一たい今のわなんだネ?』

と、船長らしいのが聞くと、

『ありやア、いつか取つておいた、大鯨の皮なのだ。今度私の家を造つたら、屋根にするつもりでとつといたが、ちようどいゝからこゝに使つた。こうしとけば丈夫だよ。』

『なるほど鯨と間ちがつたくらいだから、鯨の皮で間にあうんだな。』

『それにしてもこの男の息わ、いろんなことに間にあうのだな。』

と、皆感心している。

卯三丸わニヤ〳〵笑いながら、

『さアもうこれで出來上つた。みんな乗つた〳〵。』

と、うながす。

待ちかねていた船人等わ、それでみんな乗りこんだ。

土人等もそれにつれて、皆ドヤ〳〵と乗りこんでしまう。

それにまだ卯三丸わ、一人陸に残つているから、皆ふしぎがつて、

『オイ、かんじんのお前わ乗らないのか?』

と、いうと、

『まア、心配しなさんな。今行くから待つといで。』

と、まだ陸に残つて居る。

『もう、みんな乗込んだ。お前ばかりだから、早くおいでよ。』

『よしツ。』

と、一つうなづくと、以前の岩の上えのぼつたが、また腹に手をあてゝ、フウーツと一つながい息をふいた。すると半分陸にあつた船わ、その息をうけるがはやいか、さも樂々とすべりだして、間もなく、海の上え出たと思ふと、その勢いで半哩ばかり、はやくも沖え出てしまつた。

船の者わ呆氣にとられて、

『ア、〳〵、こんなにきてしまつたが、卯三丸わどうするつもりだろう?』

と、伸びあがつて陸の方を見ていると、

『その卯三丸わこゝにいるよ。』

と、いう聲にふりむいて見たら、何時の間にか卯三丸わ、舳のところに突つたつている。

『ヤ、何時の間に？』

『ハヽヽ、自分の息に乘つてきたのさ。』

『ナニ、自分の息に？』

『そうさ。私がどこえでも行こうとすれば、自分で息を吹いておいて、その息に乘るのだ。まづざつとこんな塩梅に。』

と、いゝながら、一つフツとふいて、その息にフワリと乘つたら。たちまち宙に飛びあがり、船の上を一トまわりまわつて、間もなく元のところえもどつた。それがまるで鳥のようである。

船人どもわたゞ感心するばかり。なるほどこういう男が來てくれゝば、もうこの上わ萬人力。我々の幸先も大丈夫だ。でわこれからわこの船を、この不思議な男にちなんで、その名を船の名にしようでわないか。と、たちまちこの船を卯三丸と名づけることにした。

『なるほど、卯三丸わ好い名だ。でわその命名式に、こゝで盛んに祝盃をあげよう。』

と、一人がいゝ出したが、かんじんのその酒が、先刻の海に沈んだ時、すつかり汐がはいつてしまつたから、かんじんの役にたゝない。

と、見ると卯三丸わ、

『よし、そんならその酒にわ及ばない。私が好い物持つてきてあげる。』

と、一つまた宙を飛んだと思うと、間もなく兩手に何かかゝえて歸つて來た。

『さ、これが、みさご鮓、これが猿酒だよ。』

と、皆の前に出してやつた。

『これわありがたい珍物だ。』

と、皆わ少しづゝ許りでわあるが、兎も角一口なめて、さて皆が目配をすると、

『ソレ胴揚げだ〳〵。』

と、大勢卯三丸に取りついて、胴揚をしようとすると、卯三丸わニツコリ笑つて、

『そんなら一つやつて見るか。』

と云つたが、どうしたのか、いくら力を入れても、物の一寸とあがらない。ウヽンヽと力むので、顏が眞赤になるばかりだ。卯三丸わ笑いながら、

『そんならこうすりやアあがるだろう。』

と、いつて、自體の力を拔くと、まるで張子細工のように、あまり輕くあがつたものだから、力が餘つて一同わ、ドツと尻餅をついてしまつた。

こうして船の命名式わすんだ。

さてこれからわいよ〳〵出帆。

『ところで、どつちえ行こうというのだ。早く寶のあるところえ行こうよ。』

と、今度わ卯三丸が急ぎだした。

『その寶わ、こゝから西南の極樂島にある筈だが、なにしろ三千哩もあるのだから。』

と、船長わちよつと考えて、

『その間に食料を、どこかで十分仕込んで行かなけりやアならない。』

と、眞顏になると、無造作に、

『そりやア心配におよばない。私たちの仲間に委かしときなさい。』

『でも、なにも持つてないぢやないか。』

『持つてなくともどこだつてある。』

と、卯三丸わ安請合だ。

そのうちに、船わだん〳〵進んで、その日も夕方近くなつた。

『こうなると、さしづめ夕食だネ。よし、それぢやア一つ取つてくる。』

と、卯三丸わ土人に指圖すると、その中の五六人が、心得たりと裸のまゝ、船の上からザンブザンブと、海のなかえととびこんだが、しばらく海を潜つたとおもうと、各自が一尾二尾、それも二尺三尺ぐらいの魚を、脇にかゝえて浮きあがつてきた。

ところえ繩をなげてやると、その繩に足をかける。繩わ船の上からまきあげられる。それにつれて土人どもわ、みな獲物をもつたまゝのぼつてきた。

これを二三度する間に、夕食の料わ十分できたが、まだこの上に明日の分もと、土人どもわよくを張るばかりか、一つわ自分たちの腕をみせるつもりで、またザンブ〳〵とばかり、五六人飛びこんでいつた。

ところが、どうしたものであつたか、それが一人も浮きあがらない。

これわ變だとおもつていると、その中一人が半身をみせたが、見れば手を高くあげて、なにやら叫んだとおもうと、また波の中えすいこまれる。

それがいかにも變なので、卯三丸わ舷から、キツと海の中をみこんでいたが、やがて叫んだ。

『や、こりやいかん。入道が出よつた。』

と見ると、波の間にわ、四斗樽ほどの頭をもつた、大きな章魚がヌツとでた。しかもその脚にわ、先刻の土人五六人を、いづれもからんで放さない。これわさつきからの獲物の仇を、自分が返しにきたといわぬばかりだ。

これを見ると船人どもわ、みな顏色を青くしけれども卯三丸わ驚かない。

『おのれ小癪な！』

と、いうかとおもうと、いきなり自分も飛びこんでいつた。

船人わ手に汗にぎつて、言葉もなく見つめている。

それに章魚の頭も消えてしまえば、卯三丸の姿も見つからなくなつてしまつた。
その中に、日わだん〳〵暮れて、海の色もわからないくらいになる……。

四　怪入道の魚捕り

大海の怪入道として、船乗どもの常から恐れている、大章魚の思いがけない出現に、たゞさえ肝を冷やしているところえ、今しもそれを退治にむかつた、卯三丸さえ波にとられて、姿を見失つてしまつたので、一同わ皆青くなつて、ものもいえずに立ちすくんだまゝ、ぢつと海面をみつめている。

その船の上の不安をよそに、今しも海にとびこんだ卯三丸わ、波をすかして前を見ると、例の怪入道の大章魚わ、さつきから躍りこんで、魚をあさつていた土人たちを、二人三人づゝ脚にからんで、底深く沈んで行こうとしている。

卯三丸わなんで逡巡ふことをしよう。いきなりそれえ泳ぎよつて、

『入道待て！』

と、さけびながら、手をのばして捉えようとするが、なにしろ先方わ毛も鱗もない、總身ぬる〳〵の大坊主だから、手がかりにするところがない。

そればかりか、うつかりすると、先方のあまつている脚でもつて、あべこべに吸いつかれる。吸

いつかれてわ面倒だから、卯三丸わいそいで泳ぎよつて、左右の手に力をこめると、いきなり章魚の喉首をしめた。

章魚入道わおどろいて、大きな頭をふりながら、その手をすべりぬけようとするが、なにしろ大力卯三丸の、大手でグツとしめられたのだから、大きな目玉をパチクリさせるばかりで、どうすることもできないでいる。

『こりやどうだ。これでも放さぬか。』

卯三丸わしめた手に、いよ〳〵力をこめて責めたてる。

『ウヽン〳〵。』

と、大章魚わ苦しがつて呻りだしたが、人間ならば苦しまぎれに、自分も手をにぎりしめるのだが、章魚わ喉をしめられると、脚え血がかよわなくなつて、自然と力がぬけてきた。

その隙に吸付かれた土人たちわ、いづれも脚をふりほどいて、ようやく自由の體になると、持つていたかぎやもりで、

『おのれ入道思いしれ！』

と、寄つてたかつてしとめようとする。

これをまた卯三丸わ制して、

『待て〳〵、殺すんぢやない、殺しちやいかん！』

『でも、折角見つけたんですから、こゝで退治てやらなけりやア……』
と、なおもいきまく土人たちを、
『いや〳〵、もうこうなつたらこちらのもの、退治るならいつでもできる。それよりわざと生かしておいて、こつちの用をさせてやるんだ。お前たちわ先づ歸つてくれ！』
と、いつて側を退かせておき、あらためて大章魚にむかい、
『こりや、入道！　命が惜しいか？』
と、少し手をゆるめながらきくと、大章魚わ泣き聲になつて、
『命ばかりわ……お助け〳〵！』
と、八本の脚を四本づゝすつて、まるで人間のように拜む。
『よし、それなら命わ助けてやるから、これからわおれの家來になつて、なんでも云うことを聞くのだぞ。』
『ヘイ〳〵、御家來にでも、子分にでもして、どうか命だけわお助けください！』
『よし、そんならおれと一しよにこい。』
と、いゝながら、大章魚の頭を、小腕にグツとひつかゝえると、そのまゝ波に浮びあがり、手をふりあげて船に合圖した。
船でわその合圖を見ると、

『オヽ、卯三丸だ〳〵。あの怪物を生捕つた。』
と、初めて生きかえつた心地で、一同が一度におどりあがつた。
その間に卯三丸わ、ほかの土人たちと一しよに、船え泳ぎかえつたが、その甲板の板の間え、例の大章魚を投げつけると、そのまゝ章魚わヘタばつて、しばしわ頭もあげられないでいる。
船人どもわ、そのまわりによつて、氣味惡そうに覗きながら、
『ヤ、死んだのか、死んだのか。』
と、恐々手でさわり、突いてみたり、足でさわつてみたりしている。
卯三丸わ身體の潮をふきながら、
『ナニ大丈夫生きてるんだ、生きてなけりやア面白くない。』
それを聞くとまた驚いて、
『ヤ、動く〳〵。うつかりして吸いつかれるな。』
と、一同わまた飛びのいた。
『ハヽヽ、そう恐がることわないんだ。』
『でもこんな奴を船においちやア……』
『船において使つてやるんだよ。』
『使つてやる……？』

卯三丸わニツコリ笑いながら、

『ぼくわ、うまいことを考えたんだ。まア今日わ日が暮れたから、明日からのことにしよう。』

『そうして、今夜わどうするんだ?』

『今夜わ今夜で、する法があるんだ。誰か丈夫な繩をもつてきてくれ。』

『よし來た。』

一人の船人が心得て、帆繩の太いのを一本もつてきて、

『これでいゝかネ?』

卯三丸わうけとつて、

『そうだなア。これでもよかろう。』

いうとその繩で、章魚の頭から、脚の間え、たすきがけにひつからげ、その殘りを帆柱に結びつけると、やがて章魚をひつたてゝ艫のところまでゆき、そこから船べりへ章魚をつりさげて、その脚のさきが、やつと水にとゞくくらいにしておいた。

船の者わそれをみて、

『一たいそれわどうしようというんだ?』

『まア見たまえ、明日になりやアわかる?』

と、卯三丸わ獨りうなづいている。

ほかの者わまだ不審がつていたが、明日になれば解るときいて、無理に譯をきこうともせず、その明日になるのを樂しみに、當番の者だけ殘して、皆眠についてしまつた。

當番の船人わ、磁石と星とをみくらべて、しきりに船をあやつつている。艫からぶらさげられた大章魚わ、時々脚で舷をたゝいて、

『ア、苦しい〳〵。おれをこんな目にあわせて、一たい何うしようというんだ?』

と、不平そうに呶鳴つていたが、答えるものわ波の音ばかり、誰も相手にわならずにいた。

そのうちに夜があけると、船人どもわ艫えきて、章魚の樣子を覗いてみると、章魚も今わ呶鳴りくたびれたか、聲もたてずにブラリとさがつて、脚一本動かさずにいる。

そのかわり海の面にわ、鮫や鱶や、鮪や鰹が、重り合うようにきて、

『ヤアイ、章魚入道のあの態をみろ。ヤアい〳〵。』

とはやしている。

ところえ出てきた卯三丸わ、この樣子をみてとると、

『うまいぞ〳〵。すつかり此方の思う坪だ。』

と、小おどりしながら、

『それ繩をゆるめた〳〵。』

と、指圖をする。

船人どもわ、それを聞いて、章魚をつないでおいた繩を次第々々にゆるめると、それにつれて章魚の體わ、水の中えとつかつていつた。

すると章魚わ、繩のゆるんだのと、水の中につかつたのとで、急に元氣づいてきて、八本の脚を一時にはたらかせて、今まで自分を馬鹿にして、側によつてはやしていた、魚どもを片端から、手あたりでわない足當り次第に、吸いよせ、吸いつけ、吸いからめて、見る〳〵中に數十尾の魚を、脚一ぱいに引捉まえてしまつた。

そこをまた卯三丸わ、繩をつかんで引きあげたから、その數十尾の魚わ、章魚の脚につかまつたまゝ、甲板えと運ばれてしまつた。

『イヤ大漁々々！』

『なるほどこれわ名案だ。』

と、船人どもわ大喜び、寄つてたかつてその魚を、皆それ〳〵に仕末をした。

その後でまた卯三丸わ、章魚を海えと投げこんだが、しばらくしてまた引き上げたら、今度も同じような魚の他に、大きな龜や、蟹の類まで、生捕りに成つてあがつてきた。

こんなことを二三度して、魚を澤山取つた揚句、最後にその中の二三尾を、褒美に章魚に食べさせて、

『御苦勞々々々！今日わこれで休ませてやるぞ。』

というと、章魚わさも嬉しそうに、その魚に舌鼓をうつて、そのまゝグツスリ寢てしまつた。

けれどもこれで味を覺えたか、それからわ章魚の入道も、得意になつてこの仕事をする。おかげでもう船の者わ、少しも食物に困らないばかりか、しまいにわ魚が餘るので、鹽漬にしたり、干物にしたり、土產が澤山できるようになつた。

ところが、それから五六日經つて、海も大分變つてきたと思うと、ある日變つたことができた。

それわ海え投げこまれた章魚が、繩をゆるめればゆるめるほど、だん〳〵遠くえ行つたようだつたが、もうよいだろうと引きあげようとするのに、どうしても上つてこない。かえつて繩が一ぱいに張つて、無理に引いたら切れそうになつた。卯三丸わそれと見ると、また何からなづいて、

『誰か行つて見てこい。』

というと、島からついてきた土人の中で、一ばん泳ぎの達者なのが、

『でわおれが見てくる。』

と、いきなり海えとび込もうとする。と、卯三丸わ呼びとめて、

『待て〳〵。行くなら用意に、もう一本持つて行け！』

と、太い繩の長いのを、その土人に持たせてやつた。

五　海底の大變

さてわ大章魚の入道め、また横着をきめをるなと、船人共わ一せいに、海をにらんでつぶやいた。

その間も人々わ、いつもの鎖をまき立てゝ、しきりに大章魚をあげようとするが、ものゝ一寸も引かれゝばこそ。はてわあまり引いたので、さしも嚴重な鐵の鎖も、プツリ途中からひツ切れて、力があまると十五六人、バタ〳〵〳〵と將棋倒しに、デツキの上え尻餅をついた。

頼みの綱が切れたので、さてわいよ〳〵大章魚を逃がしてしまつたか殘念なと、皆顔色を變えてさわぐ。

その中に卯三丸ばかりわ、先刻から腕をくんで、ぢつと水面をにらんでいたが、此時しづかに口を開いて、

『まて〳〵。これにわ何か理由があるぞ。何しろあんまり深いので、おれの目でもよく見えない。誰か御苦勞だがいつて見てくれんか。』

と、いう下から土人の中でも、卯三丸についでの泳ぎの名人、殊に水中にもぐる事でわ、常から自慢の一人の若者、

『よろしい。でわ私がいつて見る。』

と、舷から身を躍らして、ザンブとばかり飛び込んだ。

卯三丸わニツコリ笑いながら、その水煙の消えたあとを、ぢつと目を放さず見ている。他の者もそれにつられて、海を見つめながら固唾を呑む。

その中にポツカリと、波間に浮き上つた物がある、それわ大きな貝だ。

貝わ蛤に似て色が紫に、底光りのある立派な貝だ。

『ソレ、あれを取つて來い！』

卯三丸が聲をかけると、見ていた土人の二三人わ、先を爭つて飛び込んで、間もなくその貝を拾い取つたが、さてそれを持つてあがるにわ、いかにも重そうに持てあましている。

そこで今度わ船の方から、綱を一本投げてやると、それに貝をくゝりつけたから、此方から引き上げるのに、なるほど大分手ごたえがあり、二三人でも引きかねている。

それと見て卯三丸わ、

『ヨシ、おれにかせ！』

いゝながら、その綱を手ぐつたと思うと、譯無く上え引きあげてしまつた。

それにつゞいて以前の二三人も、船えかえろうとするところえ、又一つ浮き上つたものがある。

それわ長さ五六尺もあろうという、大きな珊瑚の枝であつた。

土人共わ爭つて、我先にとそれを取ろうとする。はづみにビシリと枝を折つて、折角大きい一本を、小さな三本にして三人が、各自抱えながら戻つて來た。

卯三丸わその間に、以前の貝の口を開けると、中にわ身がまだ入つているが、その間から

〳〵と、轉げ出した白い玉わ、バツと四邊に光を放つた。

『アツ、こりや眞珠だ！』

船長わ走りよつて拾いあげた。

卯三丸わ笑いながら、

『それが眞珠というのかネ？』

『そうとも。しかもこんな大きいのわ、滅多に手に入るものぢやアない。』

と、掌にさゝげて見せたのわ。たしかに一寸あまりある。

所え珊瑚の枝も運ばれると、船長わまた飛び上つて、

『ヨウ、ゝ、こりやア大變な物を拾つて來たな。』

と、夢中になつて喜んでいる。

卯三丸わまた笑いながら、

『そんな物がいゝんなら、おれの島にもあつたのに。……時々濱で拾つたり、海で取つたりしたものを、何所かえ投り出しといた筈だ。』

『エツ……そんなら何故早くいつてくれないんだ。先刻來る時取つて來たものを……』

『ハ、ゝ、。そんなに欲しけりや歸りによるがいゝ。誰も取つてゆきやアしないから、何時までおいてもなくなりやしないよ。』

『でも若しかおれ達の様なものが、又後から來るといけない。あの島にあるのが解つたら、何もこれから苦んで、遠い所までゆく事わないんだ。』

と、船長わ未練そうに、後の方をふりむくのである。

此時丁度海の中から、高く呼び立てる聲がした。

『オ、イ〳〵。大變だ〳〵！』

大變と聞くとまた驚いて、船人わ皆欄干に取りつき、海の方を見おろすと、初めに飛び込んでいつた若者が、波の間から手をあげている。

『何うした？　どうした？』

『大變なとこを見つけたんだ。』

『大變なところつてどんなとこだ？』

『みんな見に來いといゝ度いが、……誰も來られるところぢやない。卯三丸兄イでなけりやア駄目だ。』

こう聞くと卯三丸わ、元より期していたように、

『よし、そんなら待つてろ！』

いうがはやいか、自分も海え飛び込んだが、波の間からふりかえつて、

『みんなわ其處を動かずに待つてろよ。』

と、いうと以前の若者と一緒に、おなじく海の底えと沈み込んだ。

その後を一同わ、瞳をこらして見ていたが、それきり二人の姿わ、時が經つても現われず、見えるものわ紺碧の浪と、白い泡との外にわなく。その下に何様なものがあり、何様な事があろうとわ、誰の眼にもうつらぬのである。

けれども先刻の若者の言葉に、大變なところを見つけたといつた、その聲わまだ耳に殘つている。そればかりか大きな眞珠貝や、珊瑚の枝わすでに拾われた。

さてわこの浪の下に、兼てから捜している。海底の寶庫があるのでわないかと、こうまづ想像する者もあつたが、

『イヤ〳〵、そうぢやない。あの大章魚が入つたきり、出で來られない所を見ると、こりやア大章魚よりもつと強い奴がいて、今海底でたゝかつてるんぢやないか。』

と、こんな説も大分高まつて來た。

『なるほど、それで敵わないから、卯三丸さんを加勢に呼んだか、何にしても大變に相違ない。』

『誰かいつて樣子を見て來ないか。』

と、船長わ左右をかえりみた。

『よし、ぢやアもう一度いつて來よう。』

と、珊瑚を拾つた土人の連中が、再び海の中えと躍り込んだ。

と、思うと直ぐ頭をもちあげて、

『駄目だ〳〵。底の方わ眞闇で、何も見えやしない。』

『そればかりか、潮が變にはやくツて、うつかりすると卷き込まれる。』

『さつきわこんな事わ無かつたのになア。こりやアよつぽど變だぞ。』

と、いかにも不安らしくいつて、そのまゝ船え歸つて來る。

するとまた他の土人が、

『なんだ。意氣地の無い奴等だなア。そんならおれが行つてやる。』

『まて、おれが見てやるぞ。』

と、他の二人も入れ代つて飛び込んだ。

と、この二人も入ると間もなく、あわてゝ船の方えよつて來て。

『なるほどこりやアうつかり出來ない。』

『まるで海の中わ地震のようだ。』

と、いゝながら逃げて來る。

その中に船の方も、先刻からいすわりながら、浪にゆられているものゝ、その搖られ工合が大分變つて、今でわまるで何者にか、船底をつきあげられるように、うつかりすると覆りそうだ。

船長わ眉をひそめて、

『なるほど海底の地震の時にわ、こんなに感じる事もあるが、事によるとその拍子に、海底の噴火という事もある。そんな奴に出くわしちやたまらんから、兎に角こゝわ少し除けよう。』

と、急いで船を動かしはじめた。

『でも卯三丸さんが待つてろと云つたが。』

『そりやア海の無事の時だ。こう潮流が怪しくなつて來ちやア、第一あの卯三丸だつて、どこへ流されたか知れたもんぢやない。』

と、いう中にも海の中にわ、大きな強い渦がまき出して、船わ忽ちクル〳〵と、それに巻き込まれそうになつたから、

『ソレ、とり舵だ〳〵。』

と、聲をからして號令する。水夫どもわ一所懸命、右往左往に立ちはたらいて、漸く其所をはなれてしまつた。

しかもそれが空わ晴れて、風もない好い天氣の事だから、全く夢のようである。

で、海上半マイルほど逃げて、さて今までのところを見ると、海の面わ相變らず、紺碧の浪と、白い泡計りだが、その間から時々わ、赤い樣なものがすけて見える。

船長わ望遠鏡を取り直して、ぢつと其所を見つめた。しばらくすると高聲に、

『ヤ、ヤ……なるほど〳〵、こりやア大變な所に相違ない。』

と、我を忘れて口走つた。

が、まだ他の者にわ何の事やら、その大變の理由が解らぬのである。

六　大寶庫の發見

船長の望遠鏡のレンズにわ、果して何が映つたのだろう。

他の者もはやく見たくてたまらない。

『ドレ私達にも見せて下さい。』

と、二三人側えよつたが、船長わなか〳〵望遠鏡をはなさないで、

『はやく船を彼所えやれ！』

と、ばかりいう。

船人共わ心得て、再び其處え船を進めようとするが、帆をまいても、舵を引いても、船わあべこべに後え〳〵と、波に押されてゆくばかりだ。

船長わまだ望遠鏡をのぞきながら、

『エイ、何をするんだ。退くのぢやない、進むのだ。大變といつたつて恐いものぢやないぞ。ソレ、前え〳〵！』

と、急き立てるが、船體わ後え〳〵と、命令に反して退いてゆく。

船長わいきり立つて、

『エイ。此奴等、おれのいう事がわからんか。』

と、叱鳴るはづみに手にあつた望遠鏡わ、カラリと甲板に投げ出された。

所をすかさず一人の水夫が、走りよつてそれをとりあげ、急いで前を眺めると、見えた〳〵その

レンズに、うつゝたものがよく見えた。

それわ遙かの海の上に、例の卯三丸が立ちあがつているものわ、正しく船の

形をしている。

かと思うとその側にわ、大きな岩の様なものが見えるが、その岩も船のように、波にゆられて動

いている。

そればかりかその岩にわ、大きな珊瑚樹が何本となく、そこゝゝに生えており、その間にわ先刻

のような、大きな貝もついているらしい。

まだその上に、その岩の後の方にわ、出たり入つたり、例の大章魚の頭が見えている。

何にしても變つた現象に、船人わ目を見張つてのみいる。船長わそれと氣づくと、

『コリヤ貴様なんぞ見んでもいゝ、彼所え行けばわかるのだ。』

と、望遠鏡をうばい取つたが、船わ相變らず、進まぬばかりか、後え〳〵と退がつてゆく。

『エイ、なんの事だこのざまわ！』

と、果てわ自分で舵柄をとつたが、それでも船わ思う様にならない。

その中にも氣になるので、又望遠鏡を取つてのぞくと、こわいかに、先刻わあり〳〵と見えてい

た、卯三丸の姿も船も岩も、何所え行つたか見えなくなつて、たゞ例の大章魚ばかりが、波の間に

頭を出している。

『ヤツ、これわどうしたんだ？』

と、呆れて見つめている。

その中に生憎にも、また風が強くなつて來た。しかもそれが逆風だから、船わ遠ざかるばかりで

ある。

すると先方の大章魚わ、一度波の中え入つたが、再び現われた時に見ると、はやくも船の間近に

來ている。

『オヽ、貴様わ！』

と、船長わ口走つたが、なにしろ相手が相手だから、様子を聞こうにも聞く事が出來ない。

それに大章魚わ尚も進みよつて、その長い二本の足を、すばやくこちらの舷にかけた。

『ヤ、おのれ……何をする？』

と、船長わ驚いて、手ばやく、腰の劍をぬくと、その足を切ろうとした。

これわこうした航海中に、よくこんな怪物が來て、船をかえそうとする事があるから、その場合にする兼ての用意だ。

ところが大章魚わそれを見ると、急いで足を引いたと思うと、今度わ他の方の二本の足を、また他の側の舷えとかけた。

それをも切ろうと走りよると、又すばやくそれを引いて、又しても他の足を、今度わ劍の屆かない、船の腹えピタリとつけた。

船長わうろたえて、

『ソレ、彼奴に引かれるぞ、油斷するな〳〵！』

とさわぎ立てる。

ところが大章魚わ、その大きな頭を左右に振つて、

『そんなに騒ぐ事わない、だまつておれにまかせろ！』

と、いわぬばかりの心持を、その大きな目玉にも見せている。

船長も今わ觀念した。

『この上わ運だめしだ。かまわず章魚にまかせておけ！』

と、改めて號令して、水夫共をもなだめてしまつた。

すると大章魚わそのまゝ、グン〳〵船を引く。見るとその足わ三本づゝで、船の左右の腹をおさえ、あと二本で水を掻いて、頭で調子を取りながら、グン〳〵と海を走るが、そのまた泳ぎの速い事。折からの逆風に、まき上る浪を事ともせず、船を見事引きよせたのわ、先刻の望遠鏡にうつゝた、あの岩のあつた邊と思われた。

船長わ伸びあがつて、海の面をキツと見ると、それと知つたか海の中からも、卯三丸わ泳ぎあがつて、

『オゝ、船長、待つてましたよ。』

という。

『私もはやく來ようと思つたが、なにしろ潮が悪いのと、風が變つて船が動かないんだ。』

『そう思つたから大章魚を、わざ〳〵むかいにあげたのだ。』

『それでようやく來られたが、それにしても、先刻見た時わ、君わ船に乘つてたようだが……』

『ウン、その船も今御覽に入れる。それにもつといゝ物も……』

『兎に角この船え歸らんか。』

と、さしまねいたが卯三丸わ、

『イヤ、まだ少し用がある。』

と、頭を振つて、更に大章魚に、

『御苦勞だつたな。でわ又先刻の仕事を賴むぞ。』

と、いうと、大章魚わこちらの船をはなして、そのまゝ海えもぐり込んだ。

その間に卯三丸わまた船長に、

『はやく錨をおろして……それから綱の用意をしなさい。綱わなるたけ丈夫なのを。』

『よし〳〵。』

船長わうなづいて、まづそこに錨をおろさせ、またまわり五寸もあろうと思われる、太い繩を持ち出して、

『これでいゝか。』

と、卯三丸に見せると、

『よかろう。こちらえ投げてくれ！』

『ソウレー！。』

ザブンと音を立てゝ水に落ちた。その綱わはやくも卯三丸に拾われたが、卯三丸わそれを手繰ると、やがて自分も波え潜り込んだ。

船の者わ一せいに、舷側によつて見入つている。

その中に海の水わ、又一しきり渦をまいたり、泡を立てたりし初める。その勢で此方の船も、ひどく動揺をはじめたが、今度わ錨がおろしてあるから、そこから流される事わない。

その中に海の水が、また赤くなり、黒くなりする。これわふしぎと見ていると、その赤くなつたのわ、下から珊瑚樹がすけて見えるので、黒く見えるのわさつきの船と、岩とである事がよく解つて來た。

しかもその船にわ、以前の通り卯三丸をはじめ、前から海え飛び込んでいた、土人の面々も乗つている。なんの事わない、丁度芝居のせり出しのように、卯三丸、土人、船、岩、珊瑚樹、それ等が次第に水面に現われて來た。

船の者わいゝ合わせたように、我を忘れて手を拍つた。

海中の者もそれに應じて、同じく手を鳴らしたが、それにしても大章魚わと見ると、一番後から頭を出したが、その足わ八本とも、岩と船とにからんで、それを捧げているのであつた。この時卯三丸わ聲をあげて、

『ソレ、綱をまいた〳〵！』

と、呼ぶ。

船の者わ心得て、先刻の綱をまきはじめた。見るとその綱わ、海中の岩と船とを、ちやんとからげ止めてあつたから、こうして船の方でまけば、それにつれて近よつてゆく。

間もなく相接した時、卯三丸わヒラリ飛び上つたと思うと、はやくもこちらの船え歸つた。

船長わ走りよつてその手を握りながら、

『えらい獲物をして來たな。』

と、いうと、

『イヤ、この手柄わ私より、あの大章魚を褒めてやつて下さい。』

と、海の方を指している。

『ナニ、あの大章魚が？』

『實わこうだ、聞いておくれ。先刻大章魚の見えなかつたのわ、この海底の大寶庫を見つけて、それを引きあげようとしてたんだよ。けれどもいくら力わあつても、重い物を持つていてわ、そう自由に泳げない。それで困つているところを、うまくこちらで見付けたから、そこで皆で手傳つて、やつと此方のものにしたんだ。』

『それにしてもその船わなんだろう？』

『なんでもこの岩に乘りあげて、沈んだ船に相違ない。序だから揚げて來た。まだ中わ檢めないが大分人もいたようだ……』

『兎に角早く水を干して、中を檢めて見ようぢやないか。』

『そうだ〳〵。』

と、うなづき合つて、それからこの船を檢める事になつた。

見ると大章魚わ、流石にひどくくたびれたと見えて、一ト足を船にかけた儘、ダラリと水に浮いている。

七 大砲一發

海底からやつと引き揚げた古船、それを檢めるという事になると、海の中でわなか〳〵むづかしい。まづ第一にその中の水を、皆掻い出さなくてわならない。

て、それに掛かるべく、今しも船長わ命令をして、船人共を働かせようとすると、卯三丸わ手を振つて、

『いや、それに及ばない。こんな物わ私一人で澤山だ。』

と、いう。

『一人ぢやア何うする事もできまいが。』

『それを何うかして見せるから、見ていなさい。……だが、章魚にわ少し手傳つてもらわなければ……』

と、云つたが、かんじんのその章魚わ、丁度風の無い時の、凧屋の看板見るように、ダラリと舷にぶら下つたまゝ、大きな目玉も半分ふさいでいる。しかしその足にわ、まだ岩を抱えたまゝ。

卯三丸わそれを威かすように、

『コリヤ、大章魚！　もう少しだ、しつかりしろ！』

と、人間のように言葉をかけると、それが通じたか大章魚わ、ムクリと頭を持ちあげた。

『あとでゆつくり休ませてやるから、もう一度手を貸してくれ……でわない足を貸してもらうぞ。』

こういうと、またうなづいて、その足ならこの通り、まだ力がありますぞと、いわないばかりに動かして見せた。

『よし、そんならその岩わ受取つてやるから、かわりにこの船をうまく持つて、波の上までさし上げろ！』

いゝながら卯三丸わ、章魚の足から例の岩を取つてやると、大章魚わから身になつて、大きな頭を海の中え入れたが、しばらくすると例の沈んだ船わ、段々下からさし上げられて、しまいに水をはなれる位になつた。

すると卯三丸わうけ取つて、その艫に手をかけると、

『ウーン！』

と、一つ力を入れたら、見る〳〵うちにその船わ、段々上えと持ち上げられた。なんの事わない、まるで張子でこしらえられたと思われる位だ。

で、船わ卯三丸の手で、見事高くさし上げられると、そのお蔭で中に入つていた水わ、其所此所からザア〳〵こぼれる。

卯三丸わまたその船を、右えかしげ、左えかえし、果わ逆さに振つたりして、底に残つている水までも、皆外えと流し出してしまつた。

何しろこんな離れ業わ、何所の力持の蓑當にだつて無いから、船長をはじめ船人まで、思わず手を拍つてはやし立てた。

また浮き上つた大章魚も、八つの足を振りまわして、一緒になつて喝采していた。

その中に船の水わ、一滴も殘らず出たと見ると、卯三丸わ船長を見かえり、

『何所が破れているかよく見て下さい！』

という。

『よし來た。』

と、船長わ念を入れて、卯三丸のさしあげている船を、しきりに檢分していたが、

『どうも破れた所わ見つからない。たゞ汐が入つて沈んだばかりらしい。』

『よし、そんなら一度浮かして見よう。』

と、卯三丸わ持つていた船を、またそつと海の上においたが、今度わ水が皆出てしまつたので、無事に水に浮くのであつた。

そこでまた綱をもつて、しつかり此方の船に結いつけ、舷から舷えと、造作無く渡つて行けるようにして、

『さアよし、みんな行つてあらためて見ろ！』

と、あたりを見かえると、待ちかねていた船人共わ、それとばかりに欄干をのり越え、先を爭つ

てその船えと移り、それから船室船倉と、手分をして檢めに行つたが、やがて出て來た所を見ると、各自に人の死骸をかゝえて來て、

『こんなに中で死んでました。』

と、その仕末に困つているようだ。

船長わ眉をひそめて、

『そんな物わ仕方がない、その章魚にくれてやれ！』

と、いつたが、卯三丸わさえぎつて

『まア待て！　それぢやアあんまり可哀そうだ。後に一緒にして葬つてやるがいゝ。』

と、柄に似合わぬやさしい事をいう。

船長も感心して、

『それぢやア何所か島え持つてつて、一緒に埋めてやるとしよう。それまでその邊に積んでおけ！』

と、いう中に、次から次と運び出された死骸わ、恰度十三デッキに積まれた。

『もう死骸わそれだけか？』

『もう見當らないようです。』

『でわ、今度わ他の物を見ろ！　第一寶物がある筈だ。』

と、船長わすぐ慾にかゝつた。

それで又船人共も、再び船體の内部え入つて、取り溜めた海底の寶物をあらためる中に、金庫が一つ見付かつたといつて、二三人でかゝえ出して來た。

『オヽ、それだ〳〵。』

と、船長わ手許に取りよせて、早速それをしらべると、中にわいくらかの貨幣わ入つていたが、眞球も寶石も見當らない。

こんな筈わないがというと、卯三丸もそれを見ていたが、

『それぢやアまだ取らない中に、この岩に乘りあげてしまうにも及ぶまい。でわおれが一つ見て來てやる。』

『そんなら船にもう用わないな。』

『だが、折角拾つたんだから、うつちやつてしまうにも及ぶまい。でわおれが一つ見て來てやる。』

と、卯三丸わ自分でその船えと乘り移つた。尤も先刻受取つた岩わ、こちらの船の甲板においたまゝだ。

丁度その時、今まで疲れてグツタリなつていた大章魚わ、何思つたか急に頭をあげた。そして卯三丸の、今しも船室の方え入つたのを見ると、いきなり例の八本の足を伸ばして、其船體を抱えるが早いか、其まゝグン〳〵海の底えと入つた。

折角上え浮き出させて、浸込んだ水まで振り出した船わ、こうなるとまた水につかつて、初の通りになつてしまう。そればかりか、船室に入つた卯三丸わ、海の中え沈み込まなければならない。

と、見ると船人共わ、皆大いに驚いて、あれよ〳〵と叫んだが、さてどうする事も出來ないでいる。

船長も心配そうに、ぢつとその方を見つめたが、一體これわ大章魚が、自分から惡戯したのだろうか、それともまた卯三丸の命令で、わざとこんな事をするのだか、それさえ解りかねている。けれどもまた一方に、あの珊瑚や眞珠のついた岩わ、こちらの甲板に殘つている。これを見ると船長わ、ひとりニヤリと笑つたが、

『そうだ。これさえありやア安心だ。なまじあんなぼろ船なんぞ、拾わない方が面倒がなくてよい。』

と、腹の中にうなづくと、急に船人共に號令して、はやく船を出せと命じる。船人共わふしんがつて、

『でも、あの卯三丸が歸つて來ませんが。』

と、いうと、

『歸つて來ない中に出してしまうんだ。』

『そんな事していゝんですか。』

『かまうもんか……出せ〳〵！』

と、急き立てる。

これわそのまゝこゝを出れば、この岩わ皆こちらのものになる。もし卯三丸が歸えつてくれば、半分わそれにやらなければならない。否、事によつたら皆取られても、何しろあの強さでわ、どうする事もできまいと、案じているからでもあつた。

こうした卑劣な考わ、また船人共にもあつたろう。そこで船長の命令があると、急の間にもう用意ができて、船わ忽ち動き出した。つまり卯三丸と大章魚を、古船と一緒におき去りにして。

すると幸にもこの時分から、風の向きも順になり、浪も都合よく動いてくれたので、船わ思うように進んで行く、船長わ大得意だが、船人どもわ氣をもんで、しきりに後をふりむいている。

すると、一度船と共に沈んだ大章魚わ、また其場に頭をもちあげたが、今度わその足に何も持たず、こちらえ向つて泳いで來る。さてわ、この船を追うのであろうと、

『アレ、章魚が來ます〳〵。』

船人どもわ、さわいだが、

『あんな奴にわもう用わ無い。うつちやつとけ、うつちやつとけ！』

と、船長わ、手を振つている。

『でも……この船を追かけてるんですよ。』

『だから逃げればいゝぢやないか。』

『でも段々近くなつて來ますよ。』

『大章魚ばかりか、卯三丸わいないか。』

『卯三丸わ見えません。』

『ほんとにいないか？』

と、さすがに心配になつたと見えて、望遠鏡を出してその方を見たが、

『よし、章魚ばかりだ。かまわんから撃つてやれ！』

と、兼て艫の方に据えてあつた、大砲の側えと走りよつた。

その時わもう大章魚わ、恐ろしい勢いで、船の間ぢかくよつて來た。

と、それこそ却つて幸いと、船長わ自から火蓋を切つた。

『ズドーン！』

と、轟く一發！　煙わ忽ち海面を覆つた。けれどもかんじんの大章魚にあたつたのか中らないのか、濛々として何も見えない。

八　怪星十三

しばらく海をたちこめた砲煙わ、風のまに〳〵次第にはれた。

と、そのほころびの間から、また現われた大章魚の頭。それわ怒氣にみちたしるしを、その眞赤な色に見せて、見はつた眼わ鏡の如く、恐ろしさわ一通でない。

船人どもわキヤツといつて、皆甲板を逃げまわつた。

けれどもさすがに船長わ、驚きながらもまた砲に取りついて、第二の彈を打ち出した。

又しても閉じる煙の幕。しばらく怪物を隱したのを 幸い、船長わ聲をはげまして、

『フル、スピード！』

と、叫んだ。これわその間に全速力を出して、章魚の足をのがれようとしたのだ。

ところが、その號令の屆いたか屆かないのに、船わ忽ち傾きはじめた。

さてわ今の煙のために、航路をあやまつて岩に乘りあげたか、それとも急に舵を轉じたので、それで船體が傾くのかと、不審がつてよく見ると、こわ如何に大章魚の足わ、はやくも一方の舷側にかゝつている。

『さてわこの爲めの傾斜か。ソレ、はやくそれを切れ！』

と、船長わ又呶鳴つたが、誰一人手を出す者もない。

『エイ……意氣地無しめが。』

と、あせり立つた船長わ、急いで斧を持ち出して、その足を切りにかゝつた時わ、足わ四本までそこにかゝつて、船わ半ば以上傾いてしまつた。

船長わ一所懸命斧をふるつてその足を切ろうとしたが、大章魚わはやくも足を放して、高くふりあげたと思うと、再び伸ばして來た時わ、はやくも船長の腕をからんでしまつた。

『ヤツ、誰か來てくれ、〳〵！』

と、助けを呼んだが追付かない。

見る〳〵中に船長わ、章魚の足にからみあげられたまゝ、宙に躍つているばかり。その間に船わ他の足で、すつかり横に引き倒され、その勢いで先刻の岩、――先刻横取をして逃げようとした、あの珊瑚のついた大岩わ、ふたゝび海中え轉げ込んでしまつた。

船人共わそれを見ながら、又何うする事も出來ない。今わこれまでと覺悟をして、波の上えと飛び込むもあれば、船の欄干にしがみついて、共に流れようとする者もある。

その間に例の大章魚わ、一旦つかみあげた船長を、また元の船にかえしたが、わざと甲板の上におかず、高い帆桁の上に引かけて、さもあざわらうようにギロツとにらんで、そのまゝ波の中え入つてしまつたが、その時見ると大きな頭の上に、少しくすぶつた所が出來ていた。それわ先刻の砲彈があたつたあとが、何しろ大きなはげ頭なので、ツルリとすべつてしまつたのだつた。

船長わまた、帆桁に宙吊にさせられて、下手な輕業師のように、只手足をビク〳〵させているばかり。下りるにも下りられず、船の沈んでゆくにつれて、次第に波の中え吸ひ込まれてゆく。

すると丁度此時だ。今まで行方の知れなかつた卯三丸が、ヒヨツコリまた海面え出て來た。而もその體わ、ちやんと先刻の船に乘つたまゝ、まるで芝居のせり出しの様に、波から浮き上つて來るのである。

卯三丸わニツコリ笑いながら、

『どうだネ、船長！』

と、聲をかけた。

船長わ驚きながらも、此上わ仕様がない、

『助けてくれ〳〵！』

と、只泣聲を出すばかりだ。

卯三丸わ頭をふりながら、

『イヤ、他の者わ皆助けてやつたが、お前ばかりわ助けるわけにわ行かんぞ。』

と、いうと、船長わまた聲をはりあげて、

『他の者わみんな沈んでしまつた。今ぢやア私ばかりだから助けてくれ、』

と、また虫の好い事をいつている。

『ところがその沈んだ者わ、みんな此方え來てるんだ。』

と、いゝながら指した方を見ると、今浮き上つた船の上に、先刻海え飛び込んだ連中わ、皆助かつて乘り込んでいる。

『ヤ、ヤ、お前方わ何うしたんだ？』

船長わ驚いて聞くと、

『これわ皆おれが拾つてやつたんだ。その代りお前にわ、いゝ道連をあげよう。』

と、いうかと思うと、船長の掛つている帆桁にわ、何所から何物に投げられたか、先刻の死骸が一つづゝ飛んで來てわ、おなじように引かゝるのである。

『ヤア、これわたまらん。』

と、船長わも思いきつて、帆桁をはなれて飛び下りようとしたが、どうしたのかその體わ、まるで釘付にされたように、帆桁をはなれる事が出來ない。

その中に以前の大章魚わ、また海から浮き上つたが、その時見ると、先刻海えころげ落ちた岩わ、またその足に抱えられていた。

こうなると船長にも漸く解つた。これわ全く先刻から、卯三丸が大章魚を使つて、船長の氣を試したので、それとも氣付かず船長が、あさはかなその慾心と、不人情とを見すかされたのだつた。

と、はじめて解つて見ると、今わあやまるより外わない。

『どうも私がわるかつた。あやまるからかんべんしてくれ！』

と、今更意氣地の無い事をいゝ出した。

卯三丸わ他の者を見かえつて、

『お前達わどう思う。此奴を助けてやろうか？。それともこのまゝうつちやつて行こうか？』

こう聞くと、一同わ皆顏を見合せたが、やがて又口々に、

『イヤ、この船長にわ今までに、どれだけひどい目にあつたか知れない。』

『自分ばかりうまい物食つて、私等にやアろくな物もくれない。』

『今度の寶取りだつて、うまくそれが手に入つたら、私等わみんな打殺されて、自分ばかり持つて歸る氣なんだから、こんな奴わこのまゝうつちやつとくがいゝ。』

と、いうばかりで、誰一人同情をよせる者わない。

すると卯三丸もうなづいて、

『おれも初からそう思つてた。だが、これでも今までわ兎も角も、船長とか親方とかいわれた奴だ。なんぼなんでも見殺しわ可哀そうだなア。』

『といつてこんな奴と、これから一緒に行くのわ眞平だ。それより改めて卯三丸さんを、私等の船長に願おうぢやないか。』

『ウン、それがいゝ。』

『賛成々々。』

と、皆手をあげて同意した。

卯三丸わまたうなづいて、

『よし、でわこれからわおれが船長になつてやる。その代り船も此方のをつかうぞ。そうして、この船を今日からわ、おれの名をそつくり卯三丸としよう。』

『それがいゝ、卯三丸萬歳々々！』

と、果わ皆が一齊に叫んだ。

こうして海底から引あげた船わ、此所でいよ〳〵卯三丸と名乘つて、怪童卯三丸の指揮の下に、改めて進航する事になつたが、その時例の大章魚も、さながら一個の船員の如く、之に伴われて行く事になつた。

これ等のすべてを見せつけられた、帆桁の上の船長わ、只身を徒らに悶くばかり。はてわ大聲に泣き出した。

それを見て此方の船人わ、また手をうつて笑いはやしたが、卯三丸わそれを制して、

『まて〳〵。おれがいゝ事をしてやろう。』

と、いゝながら、大章魚の持つていた岩を、自分の手にうけ取ると、その一角を拳で打ちとつて、それを礫手にエイと投げた。岩の片わ宙を飛んで、彼方の船の帆柱にあたると、其所からヘツシと二つに折れたが、その勢いで船長わ、他の死骸と諸共に、帆げたについたまゝ海中に落ち込んだ。

卯三丸わまたそれに向い、

『船長、さよなら！　若し又私に會いたけりやア、その十三の死んだ人を、元の通り生かして來るがいゝ。そうすればその十三人が、きつとお前の味方になつて、この仇を討つだろう。まづそれまでわお先え行つて、寶物わ此方にもらうよ。』

と、いつたが船長わ返事も無く、只帆桁に取りついたまゝ、波に浮いたり、沈んだり、果わその

まゝ見えなくなつてしまつた。

そんな事をしている間に、日わ何時か暮れてしまつた。そして月もない空にわ、只キラ〳〵と星ばかりが光つている。

しかもその星が、こうした夜の航海にわ、大切な磁石の代りになつて、方角を知らせてくれるのである。

で、その舵を取る者わ、一番に空に目をつけた。所がいかにも不思議そうに、ぢつと一方を見つめたまゝ、しきりに頭を傾けている。

卯三丸わ側えよつて、

『オイ、何うしたんだ？』

と、聞いて見ると、舵手わ空をさしていう、

『あれ〳〵、あすこに變な星が出ている。しかも一つや二つぢやない。……十三もそろつて見なれない星が……』

九　新しい珍客

空にわ星が算えきれない程あるけれども、この一つ〳〵が、それ〳〵ちやんと位置をきめていて、たま〳〵新らしい星が見つからぬでもないが、それも三年か五年かに、一つか二つ

あらわれるばかりだ。

また別に彗星という奴があつて、これが長く尻尾を引きながら、きまぐれに顔を出すこともあるが、それとても、たまに一つづゝ出るだけだ。

所が今わその見なれない新星が、しかも十三までそろつて現われた。舵手の驚くのも無理わない。けれども、卯三丸わ落ついたもので、

『ハヽア、もう出て來おつたなア。』

と、片頬笑んでいる。

『船長！　ありやアなんでしよう？』

舵手がきくと、卯三丸わうなづいて、

『ありやア、先刻の船で死んでいた、十三人の奴の人魂だよ。その證據にやアあの通り、光が他のとちがつてる。ソレみんな青いだろう。』

『なるほど、そういやア人魂です。それにしちやアちつと小さすぎますネ。それに天え上つて星になるなんて、生意氣な事をしたもんですネ。』

『イヤ。生意氣ぢやアない、感心な事だ。今おれ達が船底から抱え出して、あらためて葬式をしてやつたので、そのお禮に星になつて、おれ達の案内をしてくれるんだ。』

『すると、先刻の船長も、あの側に出て來てますか。』

『イヤ、彼奴わ業が深いから、あのまゝ海の底え落ちて、とても浮んぢやこられまいよ。』

『いゝ氣味ですネ。』

こんな事をいつているうちに、その十三の星の光わ、だん〳〵大きく、明るくなつて來た

『ヤ……、大分近くよつて來たようですネ。』

舵手がいうと、卯三丸わ頭をふつて、

『イヤ、近くなつたんぢやアない。此方で見つけた事を喜んで、先方でも元氣が出て來たんだ。ソレ、あの星を目的に急げ！』

『オーライツ。』

船人共わうなづくと、そのまゝ帆を一杯にはつた。この時わもう夜更であつたが、空わ晴れ、浪わしづまり、その上風が順に吹いたから、船の脚わ矢のように走つた。

それにしても、船長わどうしたろうと、水夫共わまた思い出して、噂をすると影の譬の通り、今しも浪の上をすべるように行く船わ、何物も前にないのに、急にコトンと立止まつた。途端にその舳の所え、ヌウツと頭をあらわしたのわ、先刻の船長その人であつた。

見るとその體わ、まだ帆桁に取りついているが、それにしてわ高く浮いていると思つたら、その下にわ何者とも知れない、大きな怪物が背をあらわして、その背え船長をのせているのだつた。

『ヤツヽ、船長だ……船長の幽靈だ。』

と、船人共わ立ちさわいで、中にわ又兇器を持ち出して。退治しようといきまくのもある。

卯三丸わそれを制して、

『まて〳〵……。おれにまかせろ。』

と、舳え進み出て、

『オ、、船長か、よく來たな。だがこの船を止めるとわ、一體何の用があるのだ？、それとも先刻の仇討か。それにしてわ十三の死骸を、何で生かして連れて來ない！』

と、問いかけると、

『オ、、卯三丸さん！　先刻わいろ〳〵お世話になつた。仇討どころかあのお禮に、わざ〳〵お土産を持つて來ました。』

『ナニお土産！』

と、船人共わ思わず首をのばした。

それと同時に、水の中からも、大きな首をもちあげるものがある。それわ大きな海龜で、見ればその背の甲の上に、船長を乘せているのであつた。

卯三丸わうなづいて、

『其方が心を入れかえて、土産までもつて來るからにわ、此方もこの上咎めわしないが、それにしても其方から、禮をいわれる事わない。』

『イヤ、それわこうなのです。先刻あのまゝ帆桁のさきに、引かけばなしで置いて行かれたら、それこそ鷲にさらわれて、どんな目にあつたか知れません。それを海え落としてもらつたので、水の中なら此方のもの、この帆桁を板子の代りに、うまく浪の間をぬつて、命も落さずにいられたばかりか、こうしたお土産まで見付けられたのです。』

と、自分の乘つている大龜をさした。

『それぢやア土産とわその海龜の事か。』

『いかにも……此奴わこの邊の海の主で、あの大章魚とわ友達同士。うまく使えば役に立つから、それで連れて來ましたのさ。』

『よろしい。そう話が解つたら、此方の船え歸んなさい！』

『でわ何卒綱を投げて下さい。』

と、船長わうれしそうに手をあげた。

所え此方の船から、太い綱が一條、船長めがけて投げられたと思うと、これわ例の章魚の脚であつた。

章魚わ先刻からの應對で、よく譯がわかつたと見えて、船人が綱をなげるのもまたず、自分の脚の一本をのばして、はやくも船長の體をからむと、譯なく此方の船えとうつした。

つゞいて龜わどうするかと思うと、もうその前脚を船にかけて、自分で這い上がろうとする。

所が何分大きな海龜、その力で舷をつかむので、船わ忽ち傾きはじめた。

『まて〳〵。そんなまづい事をしないでも、おれがうまく揚げてやるぞ。』

と、卯三丸わ、海龜を浪の上えもどらせ、此方からヒラリ身をおどらすと、その甲の上に飛び乗つたが、なにしろ背ばかりで十坪もあろうという、大きな龜の事だから、どうして船えあげるのかと、人々わたゞ目を見はるばかりだ。

その中に卯三丸わ、龜の甲の端の所から、水の中え飛び込んだと思うと、やがて大龜わ水をはなれて、宙に四足を動かしはじめた。

變だと思つてよく見ると、これわその眞下に、卯三丸が立泳ぎをしながら、龜の體を兩の手で、グツとさしあげているのであつた。

なんの事わない、まるで力持の曲藝である。

船の者わ思わず手を鳴らした。

その間に卯三丸わ、さも輕々と大龜を、手の上でトンと投りあげて、宙でかえしてうけた時にわ、龜の體わ眞仰向になつてしまつた。

そこをまたさしあげながら、

『ソレ、船だぞ。』

と、甲板におろしたが、龜わまだ仰向になつたまゝ、ゴロ〳〵そこにもがいていた。

そこえ卯三丸も飛びのつて來て、今仰向になつている、龜の腹の端をトンと打つと、その勢でクルリかえつて、はじめて龜わ俯向になおつた。

けれどもまるで玩具のように、自由にされた卯三丸の力に、たゞもう恐れ入つたと見えて、しばらくわ首をちゞめたきり、容易に顔も見せないでいる。

卯三丸わ笑いながら、

『ハヽヽ。思いのほか神妙だな。だがこうしてはじめにおどかしておかないと、後にいう事を聞かんからなア。』

船長もうなづいて、

『イヤ、全くです。此奴もかなり惡戲者だから、なまじ自分で船に上らせ、その時船でも傾かせようものなら、なお自分の力をたのんで、仕末にふえなくなるのです。だが今の卯三丸さんの力にやア、すつかり氣を呑まれたと見えて、この意氣地のない事わどうです。』

『イヤ、氣を呑まれた代りに、今度わ酒でものませてやれ。』

卯三丸が指圖すると、船人わ三四人下え走つて行つて、やがて酒樽を一つかつぎ出した。

卯三丸わ指てはぢいて、その樽の鏡をぬくと、パツと香氣があたりに立つた。

それを嗅いだらたまらない。龜わヌウツと頭を出しかけた。

その樣子のおかしさに、一同わまた笑い出したが、

『イヤ、折角の珍客だ。さアこれをやるがいゝ。』

と、卯三丸が樽をさしつけたので、海龜わさも甘そうに、それに口をつけたと思うと、グウツ、グウツと喉を鳴らして、見る〳〵うちにその樽に、滴も殘らぬ程にしてしまつた。

さて、舊船長の歸參とともに、船にわまた新しい、怪物の供が出來たので、一同わ更に元氣づき、尚も前えと進むうちに、先刻からの十三の星わ、いつか影を消してしまつたが、それと同時に夜も明けて、漫々たる青疊の一方にわ、紅を染めたような空が見えた。

と、同時に、その紅の空と、青い海との間に、何やらポツリと黒いものが見えた。

一〇 鬼が島の襲來

水平線上の黒一點！　航海者にわ、これほど胸をおどらせる物わない。しかもそれが恰度夜明の、天地が再び明るくなろうという、たゞさえ氣の引立たされる時だからたまらない。

船中の者わ總立になつて、

『陸だ〳〵！』

『船だ〳〵！』

『いや、何だか雲のようでもあるぞ。』

と、双眼鏡をのぞいて見たが、まだよくわわかりかねている。

その中に卯三丸わ、高い船橋の上に立つて、キツとその方を見つめていたが、

『フン……面白くなつて來たぞ、』

と、ひとり何やら微笑んでいる。

『船長、なんでございましよう。』

と、下から聲をかけたのわ、今わ平の水夫となつた、舊船長その人であつた。

と、卯三丸わさしまねいて、

『オ、、君ならわからん事わあるまい。こゝえ來て見るがいゝ。』

『ハツ！』

舊船長わ梯子をかけあがると、つゞいて二三の者も後を追おうとしたが、

『まて〳〵、他の者わ來るに及ばん。』

と、卯三丸に制せられて、彼等わ下に立ちすくんだ。

卯三丸の側に來た舊船長わ、

『一體なんでしようなア？』

と、その手をかざして見やつたが、まだ、判じかねている。

卯三丸わその肩を叩いて、

『君も永年この船に乗つて、ずいぶん方々まわつたろうが、あれがまだわからんかネ。』

『どうもよくわかりません。』

『して見ると、やつぱりたゞの人間だネ。』

と、笑うばかりで、まだいつてくれない。

舊船長わ頭を掻きながら、

『しかし私の見た眼にわ、やつぱり島かと思われますが……』

『その島が此方の望む、寶の島なら申分わないが、生憎ありやア鬼が島だよ。』

『ナニ、鬼が島？　でわやつぱり島なのですね。』

『島わ島だが、たゞの島ぢやアない。大きい時にわ大陸にも見えるし、動き出すと霞のようにも見える。そこが鬼が島の鬼が島たる所さ。』

『でも鬼が島なら、桃太郎が渡つて征伐した所ですぜ。』

『ハヽア、そりやアお噺の鬼が島で、寶があるから頼もしいが、この鬼が島わ寶もなし、また鬼もいないかわりに、この島中が鬼のようになつて、他の島を荒したり、往來の船を呑んでしまつたりする。實に厄介な島なのだよ。』

『ヘエ、そんな島がありますか？』

『現在あるから見えるのだ。ソレ〳〵、段々大きくなつたろう。』

と、いうのでまた見直すと、なるほど先刻の黒い物わ、今わ初の十層倍ほどになつて、その形も漸く明かになつた。

見ると、その島わ樹木のためか、それとも山か、まるで羽根でもひろげるように、上の方で開いている。なんの事わない、大きな〳〵盃を、上むきに浮かした形で、そのまた盃の中にわ、まるで火焔でも盛つたように、圓錐形の光る物が、いくつとなく立ちのぼつている。

『なるほどこれわ不思議な島です。それで今この船わ、あの島の方え向つてるんでしようか。』

『船わ向う氣わないが、島の方で向つて來るんだ。』

『それぢやそんな厄介な島わ、はやく避けたらいゝでしよう。』

『所があの島に見込まれたが最後、まるで磁石に引きつけられるように、どんな物だつて吸いこまれてしまうんだ。』

と、いう中に、また先方の怪物わ、更に十倍の大きさになつて、いよ〳〵此方え近よつて來る。

舊船長わいうまでもなく、船員共わ顏色を變えて何うなる事かと眉をよせている。

ところが例の新珍客、あの大龜わ先刻の酒で、好い心地に醉ぱらつたと見えて、今わ頭も四脚も、ダラリと甲良から出したまゝ、グウ〳〵高鼾で寢こんでいる。また彼の大章魚入道わ、八つの足であぐらをくんで、その上に大きな頭をのせたまゝ、これもコクリ〳〵居眠をしている。

船橋の卯三丸わ、二個の怪物を見やりながら、

『まだ一匹足りないな。鬼が島に來られると、ちよつとこれでわ手が足らん。一つ此方から呼んでやろう。』

と、ひとりうなづくと身を躍らせて、帆柱の上えと走りのぼり、高く小手をかざして、四方を眺めまわしたが、ある一方に目をつけると、オヽイ〳〵と二聲呼んだ。

船人共わ何をするのかと、たゞ呆れて見ているばかりだ。

その中にわ鬼が島が、また更に近よつて來た。

と、思うと海上が、次第にうねりを高くして、船わシイソウのように動きはじめる。

船人わ氣をもんで、舵を取り直したり、帆をまきかえたりしはじめた。

そんな事で只働くにわ、例の大龜と大章魚の、正體もなく寢そべつているのが、大きな邪魔になつてならない。

『ヤイ〳〵入道、起きろ〳〵！』

と、章魚の頭を叩くもあれば、

『コレ、龜公、退かんか〳〵！』

と、甲良の端に手をかけて、大勢で押し轉がそうとするが、一向きゝめがないのである。

その中にサアツと一吹、あやしい風が起つて來た。それが今までの風向とわ、全くかわつた方向なので、忽ち帆わ吹き荒らされて、船わ怪しく一ト所をまわつた。

そのはずみに、章魚も龜も、はじめて眠を破られて、よろめく足を踏みしめながら、甲板の上に立ち直つたと思うと、帆柱の上の卯三丸わ、いつか一羽の大鷲の、背の上に馬乘になつて、船の上え舞い下つて來た。

一同わただ呆氣にとられて、物もいわずに左右え身をよけた。

この時卯三丸わ、鷲の背から元の船橋え飛びうつると、鷲わそのまゝ翼をおさめて、一番下の大い帆桁に、その軀を休めたが、その時見ると大きさわ、正に馬の三匹だけもあつて、その羽根をひろげたら、三十尺にも餘るべく思えた。

卯三丸わ船中の者を、この時はじめて自分の前にあつめ、

『これで大切な供わそろつた。この三つがおるからわ、鬼が島でも恐くないぞ。でわこれからわ三匹を、人間同樣使うからわ、他の者にも都合の好いように、人間の言葉を教えてやろう。ソレ、みんな此方をむけ！』

と、いうと鷲わ帆桁をおりて　章魚と龜との間に入つて、卯三丸わまた船人共に、氣をつけいの號令をかけて、三匹の顏とを等分に見ながら、さながら雷の鳴るように、

『エイツ！』

と、大きく氣合をかけた。

共に頭を卯三丸えと向けた。

同じく自分の方をむかせ、その一同の顏と、

その聲にわ一同が、思わずビクリと身を躍らせたが、それがすむと又卯三丸が　元のやさしい語氣にもどつて、

『さア三匹とも今からわ、人間同様に口が利けるぞ。』

と、いうと、三匹わ頭をたれながら、

『どうも有りがとうございました。』

と、口を揃えて云つた聲わ、正に人間の通りであつた。

船人共われ知らず、手を鳴らして喝采をする。三匹の者も嬉しそうに、

『皆さん、どうぞよろしく！』

と、なか〳〵愛嬌がよい。

こんな事をしている間に、鬼が島わます〳〵近づいて、浪わいよ〳〵荒くなつたけれども、まだその間わ、海上三千メートル位わあるらしい。

と、見た卯三丸わ、

『ソレ、大鷲！　はやく行つて様子を見て來い！』

『畏まりました。』

という中に、大鷲わもう翼をひろげて、鬼が島えと飛んで行く。さながら偵察の飛行機という形だ。

大章魚わまた目玉をむいて、

『一ト休みしたら元氣が出たぞ。鬼でも魔でもやつて來い、この入道の八本の脚の、八萬八千の大いぼ小いぼで、片ツ端から吸い殺してやるぞ。』

といえば、

『この大龜も、萬年の甲良に、千萬人の力をこめて、たゞの一ト押に鬼が島の奴等を、押し潰してごらんに入れるワ。』

と、大きな事をいつている。

ところえ、間もなく鷲わ歸つて、

『船長殿！』

『敵狀わどうだ？』

『たゞ今、二千メートルまで近よつております。しかも敵わ大固形の、伸縮自在な母體の上に、一種の毒ガスをたくわえております。たゞし、指揮官のような者わ見えません。報告おわり。』

と、やつてのけた。

『ウンよし。』

卯三丸わうなづいたが、

『その毒ガスが面倒だな。』

と、さすがに小首を傾けた。

二　海魔征服

鬼が島から吐き出す毒ガス、それわ恰度火山の煙のように、氣味の悪い色をして、はやその島から立ちのぼりはじめた。

と、見ると卯三丸わ、

『コレ、みんな氣をつけろ！　そしてなるたけ呼吸をするな！』

と、命令をした。

一同わ驚いて、手で鼻をつまむやら、ハンケチで口を掩うやらしたが、中にわさも迷惑そうに、

『船長！　呼吸をしなけれや、死んでしまいます。』

と、いうものもある。

『馬鹿！　そんなら貴様等海え入つて、波をもぐる時わどうするんだ。』

『そりやア、少し位わ、我慢出來ます。』

『それでいゝんだ。』

と、いうので、船人共わ、そのつもりでいると、今度わ大章魚が何思つたか、八本の脚を變に振り立てゝ、急に浮かれ出すのである。

卯三丸わ走りよつて、いきなり大きな頭に、平手の一ト打をピシリとくれて、

『馬鹿め貴様たちもうやられたな。』

と、叱りつけた。

けれども大章魚わたあいもなく。

『アハヽヽ、こんな面白いことわない。』

と、いつてわなお踊りまわる。

一同わそのおかしさに、思わず口を開けて笑うと、そのはづみに何ともいわれない、好い香いが鼻から入つた。で、思わずそれを吸うと、自分達もまた好い心地になつて、なおもあとを嗅ぎこみながら、

『こりや妙だ、……面白くなつたぞ。』

と、手を叩いて踊り出した。

卯三丸わ眉をひそめて、

『エイ、あれほどいつとくのに、貴様等わとう〳〵毒ガスにやられてしまつた。情ない奴等だなア。』

と、叱り立てゝも効果わなく、こうして變に浮かれる者が、だん〳〵殖えるばがりである。

一體毒ガスというと、何かいやな香いがして、それをかぐと、すぐ呼吸がつまるとか、胸が悪くなるとでも思うものだ。ところが、これが毒ガスなら、こんな好い心地のものわないと、かえつて

一同わ、自分から呼吸のつゞくだけ、吸おうとするようになつた。

その間に敵の鬼が島わ、はや間近く進みよつて來る。

今わ卯三丸も急きこんで、

『この上わ仕方がない。相手が魔性の者だから、人間共わ力にならん。此方も魔力でたゝかつてやるぞ。それにしてもこの章魚め、いつまで浮かれているのだ。』

と、いきなりその喉首を、兩の手でグツとしめつけ、ウンと力をこめたと思うと、大章魚わ眼を白黒、足をバタ〳〵苦しがつていたが、やがてそのとがつた口から、スーウツと紫色の氣を吐いた。それわ卯三丸にしめつけられて、呑んだ毒ガスを吐いたのであつた。

すつかり毒ガスを吐き出したと見ると、今度わその口に手をかざして。エイツと一つ氣合を入れて、はじめて大章魚をつき放すと、そのはづみに大章魚わ、甲板の上に投げ出されて、しばらく正體もなかつたが、それとみて大龜と大鷲とが、側え行つて抱えあげ、

『コレ兄弟！　しつかりしろよ。』

『これからが大切なところだ。』

と、しきりに力をつけたので、ようやく正氣にかえつて來た。

卯三丸わ改めて、三匹にむかい、

『みるとうり人間仲間わ、とう〳〵鬼が島の毒ガスで、みんな正氣を奪われてしまつた。せめて貴様達わしつかりしてくれ！』

と、いうと、

『ヘイ、おつしやるまでもございません。』

『この通り正氣でございます。』

と、大鷲に大龜、大章魚もまた元氣づいて、

『今わうつかりやられましたが、もう大丈夫でございます。』

と、はじめて、頼もしく答えるのである。

『よし、それで安心した。でわ大鷲わその羽根に、大龜わその甲良に、そして大章魚にわその足に、この卯三丸の魔力をあづける。ソレ、ぬかるな！』

と、號令すると、自分わひとり、船橋に躍り上つて、キツと敵の様子をみた。

ずると、不思議や鬼が島の、今頃わもう此方の船を、ただの一ト呑にと向つて來る筈が、どうしたことか、その影もみえず、しかも今まで荒れ立つていた、海の波もしづまりかえつて、船わさながら疊の上にあるようだ。

『ヨウ、敵わ何處え行つた？』

『さてわ卯三丸様の威勢をおそれて、とう〳〵、引きさがつてしまつたナ。』

『見かけによらない弱虫だな。』

と、三匹の者わ得意になつたが、卯三丸わ頭を振つて、

『イヤ〳〵、これが油斷がならんのだ。今に見ろこの船が、きつと宙えさし上げられるから。』

と、いう中に、もう船體わ、上から綱で吊りあげるか、下から棒でおしあげるように、次第に水際をはなれて來た。

『ヤ、ヤ、なるほどこれわ變だぞ。』

と、三匹わまたウロ〳〵しはじめた。

卯三丸わそれを制して、

『騒ぐな〳〵！　先方がこの手で來るならば、此方にも法がある。ソレ大龜！　こゝわ貴様の甲良の役だぞ。』

『ハツ、かしこまりました。』

大龜わまた甲板の中央に、四つの足をふんばつて、總身に力をこめた。その力わ卯三丸が、先刻與えた魔力である。

と、今までヂリ〳〵おし上げられ、吊り上げられるようであつた此方の船わ、そのまんますこしも動かなくなつたばかりか、かえつてヂリ〳〵元の座にかえつて行く。

『なるほど、龜さんわえらい力だ。』

と、大章魚わ感心している。

ところがこうして此方の船が、だん〳〵上から沈んで行くと、今まで疊のようであつた海わ、また次第に浪を立てゝ、船を左右に搖り立てた。

大龜わまた搖らせまいと、なおも甲良に力をこめて、グツと四足でふんばつているが、何分動きがはげしいので、果わ先刻の毒ガスのために、まだ甲板を浮かれまわつている。船人の一人二人わ、船から海えと搖り落されてしまつた。

と、みると大鷲わ、急いで海上え舞いさがつて、落ちた人間を拾おうとしたが、浪わはやくも、人間を呑んで、底えとまきこんでしまつたから、大鷲の力にわ及ばなくなつた。

そこで今度わ大章魚が、ザブリと海え飛びこんで、浪の底までも拾いに行こうとすると、いそいで卯三丸わそれをとめて、

『よせ〳〵。うつかり入ると歸れないぞ。それよりわ人間にわかまわず、鬼が島の正體をつかまえろ。貴様の足の要るのわ今だぞ。』

と、いう。

『心得ました。』

と、大章魚わ、八本の足を振り立てゝ、逆まく浪えとわつて入つた。

するとたちまち荒浪わ、いやが上にも高く立つて、今わ船さえ木の葉のごとく、上を下えとながされて、すでに顚覆せんばかりになつた。

と、卯三丸わ大鷲に、

『さアこれからわ貴様だぞ。貴様の力でこの船を、しばらく宙に吊つていろ！　そうすればこの浪わ、もと〳〵風で立つのでわないから、決してあぶないことわない。ソレ。』

と、いうと大鷲わ、船の眞上え舞いあがり、二つの足で帆桁をつかみ。その嘴を帆柱にかけると、羽根を一ぱいに打ちひろげて、船をつかんだまゝ空に上つた。

たゞしこの時わ大龜も、もう自分の役わすんだと、甲良の力を皆ぬいて、わざと脫殻のように輕くなつていた。

その間にまた海の中でわ、例の大章魚が大きな頭を、幾度も浮かしつ、沈めつ、しきりに、何者かとたゝかつている。卯三丸わ船橋から、キツと目をはなさずにいたが、

『ウン、しめた〳〵。たしかに敵わ生捕つたぞ。たゞ大章魚も先刻から、大分疲れているようだ。ソレ大龜、加勢に行つた！』

と、いうよりはやく大龜わ、やおらその甲良をおとすと、船の上から浪の中えと、ザブンとばかり飛びこんだが、その時たつた水煙わ、水際から三十メートルも上に、船をつゝている大鷲の羽根まで、サツと掛るくらいであつた。

けれども、大龜が入つた頃から、海わ次第にしづまつて、はてわまた元の通り、疊のようになつてしまつた。

ほどなくその水の上に、再び現われた大龜をみると、その大きな甲良の上に、味方の大章魚をのせていたが、そのまた大章魚の八本の足にわ、たしかに何者か抑さえつけている。

三　寶の眼鏡

『し　めたな。しつかり、放すな放すな！』

卯三丸わ上から叫ぶ。

『大丈夫です。逃がしやアしません。』

大龜わ下からいう。

中央の大章魚わ、よほど力をこめていると見えて、たゞ目玉をバチクリさせ、口を尖らせているばかり。まだ何とも物わいえない。

その中に大鷲わ、しづかに船を吊しおろすようにして、それが水の上に落ちつくと、すぐまた大章魚の方えと飛びかえり、その足に大章魚の頭をつかんで、バタ〳〵と羽根を動かしたから、そのまゝ章魚の體わ、船の甲板えと移されたのであつた。

この時その脚の八本で、ぎツと抑えているものを見ると、それわ何ともわからない、全體が紫色をした、大きな海月のようなものであつた。

『ウン、此奴だな。』

と、卯三丸わ進みよつて、片足でソツとおさえると、

『キユウーツ。』

と、妙な泣聲をした。

『もういゝからお前わ放して、はやく海の連中を拾つて來い。』

と、大章魚にいゝつけた、入道わ心得て、そのまゝまた海え入ると、つゞいて大龜も又海え、もぐつたが、しばらくすると大章魚わ、その八本の足の疣に、何人ともしれない人間の死骸を吸いつけ、また大龜わその甲良に、同じく澤山の死人を乘せて、船の側えよつて來ると、大鷲わまた心得て、嘴と爪とにその死骸をつかんで、甲板の上えと運びこんだ。

これわ皆、先刻毒氣にあたつて浮かれている間に、皆海え搖り落されたのであつた。

卯三丸わずつと見わたして、

『それで數わみんなあるか?』

と、あらためると、

『恰度鱶の奴がやつて來て、もう少して食われるところでしたが……。』

『私がこの目玉でにらんでやつたら、あわてゝ逃げてしまいました。』

と、章魚と龜とわ手柄顏にいう。

『よし。それぢやアこれから生かしてやる。』

と、卯三丸わその死骸を、頭をそろえて甲板にならべさせた。まるで魚河岸にあげられた、大漁の時の鮪という形だ。

それからその頭の上え、高く兩手をかざしながら、

『エイ、やツ!』

と、氣合を入れると、まるで號令をかけられたように、一齊に跳ねおきてしまい、二度の氣合の掛つた時わ、そのまゝ氣を付けいの姿勢になつて、卯三丸の前に整列した。

『番號!』

『一ツ!』

『二イ!』

『三!』

『四ツ!』

『五ツ!』

『……』

卯三丸わ『よし』とうなづいて、

『一人も怪我わなかつたようだな。』

『おかげ樣で皆無事でした。』

と、例の船長わ嬉しそうにいつたが、まだ踏まえている卯三丸の、足の下の物に目をつけると、

『ヤ、これわ何ですか。』

と、眼を圓くした。

『これが鬼が島の正體だ。』

『エツ、こんな奴が、鬼が島の正體？』

『實わ一萬年の劫を經た、世界中の海月の王だ。』

『ヘエ……海月の王ですツて……なるほどそういえば形わ似てますな。』

『今こそこうして正體を現わしたが、何しろ恐ろしい魔力の奴だから、どんな惡戯でも出來ん事わない。鬼が島になつておどかしたり、龍宮になつておびきよせたり、いろ〳〵な事をして船を惑わせ、大抵海え沈めてしまうのに、例の毒瓦斯を用いるのだ。しかし、この卯三丸に會つちやア、海月の王でもこの通り、蔓蒻程の力もないのだ。』

と、いゝながら足をゆるめたが、たゞブリ〳〵ふるえるばかりで、身動きさえも出來ないでいる。

船人共わたゞ不思議がつて、

『こんな奴に先刻まで、あんな目に會わされたと思うと、ほんとに馬鹿〳〵しい話だなア。』

と、中にわ悔しがつて覗きこむ者もある。

卯三丸わそれを制して、

『コレ〳〵、そう顏を出すと、又躍らされてしまうぞ。』

と、いつたが、

『今度躍つたらこんな奴、みんなでクチヤ〳〵に踏み潰してやります。』

と、力んでいる者も出た。

その中に海月の王わ、段々身體を圓くしはじめたが、やがて毬のようになつたと思うと、コロ〳〵と動き出すのである。

人々わ又氣味惡がつて、

『ヤア、何だか又はじめるぞ。』

と、思わず後しざりしたが、卯三丸わ笑いながら、

『イヤ、驚く事わない。こうして體を圓くするのわ、何かいいたい事があるのだ。聞いてやれ〳〵！』

という。その言葉の下から、海月の王わ口を利き出した。

『卯三丸さま！〳〵　あなたわ何というお強いお方でしよう。今までずいぶんこの海にやア、大きな船や強い船長が來ますが、大抵私の毒氣にあたつて、みんな底え沈んでしまいました。けれどもあなたのような方わ、一萬年の劫を經た私も、全くはじめてでございます。つきましてわあなたに、改めて獻上する物がございます。』

と、いう。

『ウン、何をくれるというのだな?』
『私わこのとうり、海に一萬年おりますから、何所にどんな物がある、どんな所があるという事わちやんと皆心得ております。ですからその中で一番の寶を、献上したいと存じますのです。』
『それわ有がたいな。してその寶というのわ一體どんな物だネ。』
『それわこの海の上が六萬里、水の中が一萬尺まで、すつと見透せる眼鏡でござります?』
『それわ重寶な物らしいな。』
『それさえお持ちになつておれば、御望みの寶物わ、その所在がよくわかつて、自在にお手に入るでございましよう。』
『それわその道理だな。でわ早く持つて來てくれ!』
『イヤ、それわ持つて參らずとも、すぐこゝにございます。』
『どこにだ?』
『こゝにございます。』
『ナニこゝに?』
と、さすがの卯三丸もこれわ見えないので、謎を解きかねていると、見る〳〵中に海月の體わ、クル〳〵クル〳〵まわりはじめた。
それがだん〳〵速くなるので、見ている者が目のまわる位。たゞアレ〳〵と叫んでいる。その中に海月の體わ、まわれば廻るほど小さくなつてゆくが、そのかわりその光りわ、ます〳〵つよく光つて來る。
そしてどこからか大聲に、
『ソレ、出來ました寶の眼鏡! 一萬年の海月で出來た、一萬里の望遠鏡、一萬尺の透水鏡、一萬圓でも買えない眼鏡。これがほんとの寶の眼鏡!』
と、いうかと思うと、海月の王わ、もう影も形も見えず、そのかわりにその場所にわ、直徑恰度三寸位の、見事なレンズが置いてある。
『オヽ、これがその眼鏡か。』
と、卯三丸わ取りあげて、試しに目にあてゝ見ると、たしかに一萬里の彼方の島まで、あり〳〵とうつゝて見えた。また改めて舷えよつて、ぢつと海の中を見ると、一萬尺の海の底が、手にとるように見えるでわないか。
『イヤ、こりや好い物が手に入つたぞ。もうこれで海の寶わ、みんな此方の物になつた。』
と、いう。それを聞いた他の船人も、われを忘れて手を拍ちながら、
『萬歳々々!』
と、はやし立てる。
それにつれて、大章魚、大龜、大鷲までが一所になつて、

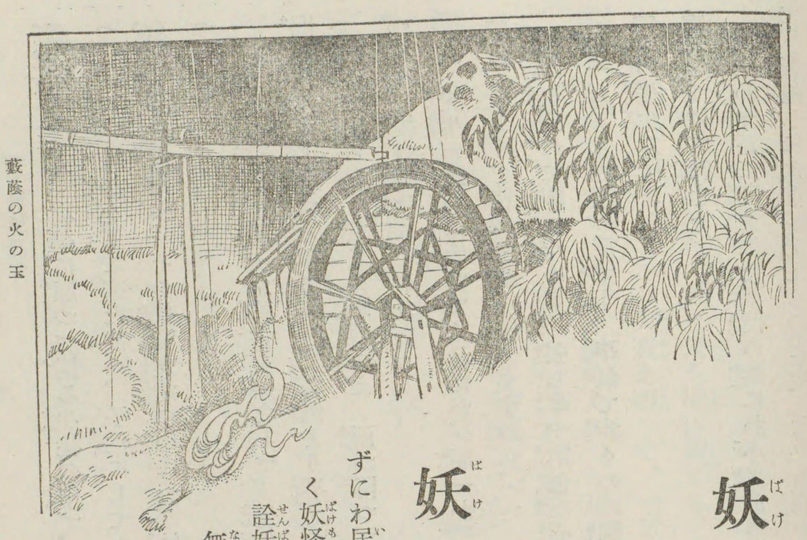
『おめでとう〳〵！』

と、賀びをいう。

さてそれからわ海の上も、何の障る事もなく、一萬里の先を見とうし、一萬里の底を見ぬいて、目に入るほどの海底の寳を、皆な手に入れてしまつたと思うと、この怪船卯三丸わ、やがてある國えと引あげ、その國玉に寳を献上すると、大層これをよろこばれて、すぐに卯三丸をその日から、國の大臣に取りたてた。また大章魚と大龜と大鷲とわ、やがて動物園の中え入れて、それ〴〵立派な棲所をたまわり、一生安樂にくらさせたが、ふしぎにも卯三丸はじめ、この三匹の動物が、それから一萬年生きのびたという。

妖怪歡迎會

一　藪蔭の火の玉



藪蔭の火の玉

妖怪なんてものわあるものぢやない。などゝ力んで見た所で實際妖怪が出て來れば、キアツと云つて逃げずにわ居られまい。また妖怪わこわい〳〵と思つた所で、全く妖怪が無いものならば、一生膽を潰さずに濟む話だ。所詮妖怪なんて奴を、恐ろしい物だと思えばこそ、有るの無いのと氣を揉むので、高が人間以外の生物、犬猫同様に心得て居れば、無ければ無いにして置くし、またあれば有るにして、ちと家にでも飼つてやるが可いとわ、秋澤先生のよく云われる所だつた。其秋

澤先生の所え、夜學に通つて居る生徒の中で、暮田明一と云う生徒があつた。叔父の家に厄介になつて、夙く苦勞をして來た故か、子供にしてわ落着いた質で、それによく勉強するから、先生にも氣に入つて居たが、その代り友達の中にわ、妙に煙たがつて別物にして、一所に遊ばない者も多かつた。

ある晩の事だ。明一わ稽古を濟まして、先生の家を出たが、恰度其晩わ雨が降り出して、怠け仲間わ休んでしまつたので、時刻わ例より早かつたのに、歸途わたつた一人になつてしまつた。戸外え出ると、只さえ暗の所え、雨が降つて居るのだから、鼻を摘まれるのも解らない。

『オイ、提灯貸そうか?』

と、先生わ親切に云つてくれたが、明一わ頭を振つて、

『なアにようございます。解りますから。』

と、無造作に斷つたのも、強ち傘や本包なぞで、持物が多い爲め許りでわない。

明一わどんな暗い所でも、平氣で歩くのに馴れて居るのだ。

『でわ先生左樣なら!』

『氣をつけて行きなよ!』

明一わやがて門を出た。門の外にわ小川があつて、それを左えついてまわると、大きな藪があつて、藪越しに水車が聞えるのだが、それも夜わ止んで居る。何しろ淋しい場末の夜道わ、あまり氣味の好いものでわない。

けれども明一わ、根が恐い事知らずの少年の上に、常から先生にも聞かされて居て、妖怪なんぞを屁とも思わないから、こう云う暗い所でも、平氣で家の方えと急いで行つた。

その家と云うのわ、この大藪を廻つて、一しきり畑道を通つて、鎭守の森を左に見て、それから又小さな橋を渡つて、漸く片側町え入つた所にある。

步數なら千五六百! 時間なら二十分も經たない中に、歸りついてしまうのが常だ。

明一わ、例の通り小川に沿うて大藪をまわつて來たが、秋の雨の力もなく、只ビショ〳〵と降る割にわ、路が悪くなつて居るので、又してもう下駄を地に吸われ、思いの外步みが手間取つた。それにしてももう畑道え出てる筈だと思うのに、まだ藪を離れないから、妙に思つて前をすかして見ると、いかにも暗くわなつて居るが、氣の故か其の正面に、うつすり燈火が見える樣だ。

さてわもう鎭守の燈明か? それにしてわ又早すぎる。それとも誰かの提灯か? と思いながら進んで行くと、その燈火わ次第に大きくなつたが、見ると鎭守の燈明でもなければ、道行く人の提灯でもなく、それわ圓い火の玉で、地から三尺ほどの所を、フワリ〳〵と飛んで居るのだつた。

雨の夜道に火玉! 大抵の者ならこれを見た許りで、直ぐに腰を拔かしてしまおう。

けれども明一わ驚かない。

『こりやア妙だ、先刻提灯を斷つたら、こんな物が飛び出して來て、提灯の代りに成つてくれらア。

こりやア有難い〳〵！』

と、云いながら、その火の玉を燈明にして行くと、火の玉わまるで案内する様に、明一の前を一間と離れず、好い工合にフワ〳〵飛んで行く。

『全體此奴わ何だろう？』

と、明一わ流石に氣になるから、その火の玉をぢつと見るのに、青味のある火焰の塊で、何の形とも解らないが、傘て聞いて居た人魂か知らん！　それとも只の燐の火か。よし、今に家の前まで來たら、一つ捉えて見てやろうと、こんな事まで考えて居た。

その中に、もう道も大分來た様だ。

『ハテナ、こんなに遠い筈わないのに……』

と、不思議そうに四邊を見まわすと、今まで火の玉を見詰めて居たので、眼が妙にまぶしくなつて、ろくに何も見えなくなつたが、漸く落着いた所で見ると、こわいかに、自分わまだ見た事もない、古い邸の門の前に居て、そして今迄の光物わ、その門の破れ目から、スツと中え入つてしまつた。

『何だ此所わ？』

思わず聲を出すと、恰度それを鸚鵡返しに、

『何だ貴様わ？』

と、云う聲がする。

明一わ驚きながら、それに答えようとする間に、自分より先に聲がして、

『藪の小路の火輪坊！』

と、云う。

すると又中の方で、

『そんなら奥え通らつしやい！』

『はア……』

と、云うと、其儘靜になつた。

明一にわ合點が行かない。

今の門の破れ目から、そつと中を覗いて見ると、先刻の火の玉わフワ〳〵と、獨りで奥え進んで行つたが、やがて玄關からスルリと入つて、其まゝ見えなくなつてしまつた。

『これわ變だぞ。……今の火輪坊と云つたのわ、あの火の玉の事なんだな。それぢやア彼奴も妖怪か。すると此所わ妖怪屋敷だナ。』

と、思うと明一わ急に怖氣立つよりわ、好奇心が募つて來た。

『面白い！　それぢアおれも飛び込んで、一つ妖怪に會つてやろう。』

と、いきなり門に手をかけたら、門が腐つて居たと見えて、譯無くギイと明いてしまつた。

『うまいぞ！』

と、獨りうなづいて入ろうとしたが、念の爲めに門番所を見ると、其所にわ又誰も見えない。
先刻の聲わたしかに此所だつた樣だが、然し咎められない丈、結局うるさく無くて可いと、其儘玄關まで進んだが、
『待てよ、こりやア正面から入るより、暫く樣子をうかゞつてやれ！』
と、我と我に號令して、今度わ庭口えと廻つて見た。と忽ち耳を掠めて來る聲、鼻を撲つ臭氣！

二　古家の歎待

明一わ一寸立止まつて、耳を澄まし乍ら前の方を透かして見た。すると恰度彼方に、窓の樣なものがあつて、それえ灯影がパツとさしてわ、また暗くなつたりして居る。
『よし、彼所から覗いてやれ！』
獨り點頭いて、忍び足で其側により、恰度有り合せた石を踏臺にして、その窓から覗こうとすると、中から妙に腥い臭氣がして來た。
我知らず鼻に袖をやると、中からも聲がして、
『臭いぞ〳〵！』
『ウン臭い〳〵！』
『人臭い〳〵！』
『而も男の子の臭氣の樣だ。』
と、思い〳〵に鼻をひこつかせて居る。
『ヤツ、もう嗅ぎつけたか？』
と、これにわ流石好い氣味わしなかつた。けれども明一わ好奇に、まづ障子の破目を見つけて、それえ目を寄せようとすると、忽ちまた燈火が消えた樣に、中が暗くなつてしまつて、何が何やらさつぱり解らない。
するとだしぬけに頸元が、濕手で撫でられる樣に冷りとした。
吃驚して振り向くと、其所に妙な小僧が立つて居る。……額に大きな目が一つ、獅子鼻にひよつとこ口、恐いと云うよりわ可笑しな面だ。
『何だ貴樣わ？』
と、叱る樣に云うと、小僧わ腦天から出る樣な聲で、
『私ア此所の御邸の者です。殿樣の御用でお迎いに來ました。』
『誰を？』
『お客樣を！』
『お客樣とわ誰の事だ？』
『お前さんの事です。』

『ナニ、おれをお客様だ？　そうして貴様がお迎いに來た？』

『ヘイ、そうです。何卒入らして下ださい！』

と、もう手を取つて行こうとすると、それを明一わ振り解いて、

『待て〳〵！　今貴様わ殿様の御用だと云つたが、一體その殿様わ何者だ？』

『殿様わ此所の御主人です。』

『その主人わ何者だと云うんだ？』

『古家の煤太夫と云う方です。』

『ナニ、古家の煤太夫か。それが又何だつて、おれをお客様にしようと云うんだ？』

『今夜わその妖怪の仲間で、大集會があるんですが、恰度よい機會ですから、貴君にも來ていたゞこうと云うんです。』

『だが、何うしておれの來るのが解つた？』

『そりやア火輪坊さんが連れだして來たんですもの。』

『ナニ火輪坊が連れて來た。ウン、それぢアやつぱり先刻の火の玉わ、おれを釣り込む手だつたんだな。』

『何んでもようござんすから、早く入らつしやい！　皆さん待つてらつしやいますよ。』

と、小僧わ又しても急き立てる。

明一わ考えた。まてよ、それでわ今夜わこの妖怪屋敷で、妖怪が集會をやるんだと見えるな、だがこれも面白い。妖怪に會つて話して行つたら、また好いお土産が出來るかも知れん。

『よしそれぢやア案内しろ！』

と、明一わ小僧を先立たせると、不思議にも暗い所が、よくあり〳〵と見える様に成つて、間もなく立派な座敷に通された。

その座敷にわ種々な異形な奴が、十五六匹も居列んで居たが、中で鼠色の大入道が、さも丁寧に出むかえして、これわ〳〵人間様！　よくお出で下ださいましたと申します。何卒あれえお通り下ださいましと、床の前の上座を指す。

なまじ遠慮してわ馬鹿にされると、明一わ直その上座に構えながら、一寸左右に會釋すると、主の目配で他の妖怪も、代る〳〵それえ出て、名乗りかけて挨拶に及んだ。

一番のわ梁間の板血丸、それわ鼬の劫を經た奴だ。次わ後架の無才坊、これわ銀蠅の化物だ。

三番わ風呂裏の赤名目小僧。これわ馬鹿に舌の長い奴。

四番わ溝尻の河童太郎、五番わいろは藏の大鼠、其他書にも見た事の無い様な、不思議な妖怪、變手古な魔物が、代る〳〵出て來てわ、仔細らしく辭儀をする。

その中で例の火輪坊だけわ、

『イヤ、先刻わ失禮しました。』

などと馴々しく言葉をかけて、席も近くに陣取つたが、此時見ると眞赤な坊主で、而も緋の袴を穿いた工合わ、まるで酸漿の化物の様だ。

挨拶が一通りすんだから、今度わ此方から口を切つた。

『今夜わ圖らずお邪魔をしたが、一體君達わ、此所で何をやつてたんだ?』

『今夜わ舊の三十日、闇の晩でございますから、それで私共妖怪わ、いつもの集會をしてるんでございます。』

『その集會わ解つてるが、僕を呼んだのわ何云う用があるんだネ?』

『それわ他でもございません。貴君わお年に似合わない、度胸の据つたお方ですから、それでわざ〳〵お迎え申して、一つお願い申し度い事があるのでございます。』

と云いながら主人を見かえると、

『夫わ私から申し上げましよう。』

と、煤太夫わやおら座を進ませた。

『付ましてわその前に、お約束願い度い事があるのです。どんな事がございましても、今晩のこの様子わ、何卒何方にもお話し下ださいません様に!』

『ハヽア、それぢやア祕密會議か。よしそれも承知した。』

と、明一わ快く頷いた。

三　肝と涙

太夫わ立ちあがると、更に一座の妖怪に向い、煤ぼけた様な聲を振り絞つて、

『諸君! それでわこの明一君が、聞いて下ださると云う事だから、私からお願申す事にするが、それで異存わあるまいネ。』

と云うと、妖怪共わ口々に、黄い聲や、尖つた聲や、澁い聲や、くすんだ聲で、

『異議無し〳〵!』

と、手を拍つ。

そこで煤太夫わ、改めて明一に向い、何と云い出すかと思うと、

『それでわ私から申しますが、御願と申すのわ他でも御座いません。何卒貴君の御力で、私共と人間と、仲よく出來る様にしていたゞき度いのです。』

と思い掛ない言葉だ。

明一わ少し膝を進めて、

『ナニ、人間と仲よくしたい。これわ又妙な願だな。』

『私共の様なものが、こんな事を申しましたら、定めて變にお思いでしようが、一體妖怪なぞと申しましても、決して惡い奴でもなければ、また恐ろしい者でも御座いません。實の所わ人間より、

ずつと弱虫の意氣地無し、その證據にわ御存じの通り、晝間わ何所えも出る事が出來ず、暗闇でなければ通れないと云う、肩身の狹い者なので御座います。』

『そうだなア。なるほど晝間出た妖怪と云うのわ、まだ見た事が無い樣だ。』

『所が人間の方わ、晝わ云うまでもありませんが、夜も勝手に出てあるき、暗黑にでも通つてまわりますのに、たま〳〵私共に出くわすと、ろくに正體も見ない中から、キヤツと云つて目を廻わしたり、ワアツと云つて逃げてしまつて、ちつとも側え寄せてくれません。だから折角親もうとしても、親みようが無いので御座います。』

『だつてお前達の樣な變テコな顏や、おかしな姿をして居ちやア、誰だつて逃げるのわ當然だ。』

『所がこの正體を御覽になりやア、ちつとも逃げるにやア當りません。まづ私から申しますれば、正體わ古い空屋で御座いますが、別に何も變つた事わ無いのに、長い間人が住まないと、ヤレ何かの祟があるの、幽靈が出るの、妖怪が居るのと、根も無い事を云い觸らして、人間の方でより付きません。空屋の身になつて見れば、こんな約らない話わ無いぢやアございませんか。』

『なるほど、それも道理だ。すると他の者も皆そうだネ。』

『左樣で御座いますとも。板血丸にしても、無才坊にしても、只の鼬や銀蠅ですが、それが天井で音を立てると、何か魔物の樣に思われ、後架で一寸尻でも舐めると、直ぐに妖怪の樣に思われてしまうのです。また赤名目小僧と云うのわ、古い風呂場の流板、河童太郎わ溝板の劫を經たのですが、風呂で洗うのを厭がる子や、やたらに溝え小便をする子が、自分達の氣が咎めるので、まるで妖怪の樣に思うのです。』

『ウン、段々聞いて見ると、お前の云うのも道理だ。僕もそれわ氣の毒に思うよ。』

『どうも難有う存じます。それで私共の正體が知れ、また本心がお解りになりましたら、何卒まことに恐れ入りますが、私共の御願い申した事わ、決して誰にも仰有らず、只貴君のお力によりまして、之からわ何卒、私共を、人間が決して恐がらない樣に、御執り成しなすつて下さいまし！　これがお願いで御座います。』

と、煤太夫が手をつくと、他の妖怪も一緒になつて、神妙にその頭を下げる。

明一わ點頭いたが、やがて其座に立上つて、

『段々譯を聞いて見ると、やはりこの世間にわ、眞の妖怪と云うものわ無い。その正體を糺して見ると、皆人間に馴染の物許りだが、まだ解らない連中もある。でわそれを今此所で、試しに正體をさして見ようか。第一先刻途中から、僕を此所まで案內したと云う、あの火輪坊君わ、見ると鬼灯の化物の樣だが、實わ古い木の根から出た、燐の火の玉なんだろう。』

と云うと、火輪坊わ赤い頭を掻いて、

『これわ全くあてられました。』

と云う。

『次に此所の一目小僧わ、空屋の精の家來だと云うから、門番小屋の精とでも云うの？』

と聞くと、一目小僧わ頭を振つて、

『いゝえ、裏の土藏の精です。土藏にわ窓が一つしかありませんから、それでこう云う一目小僧！』

『ハヽヽヽ、それわ氣が付かなかつた。』

と、今度わ明一が頭を掻いた。

すると煤太夫わまた小僧に、

『土藏と云えばお前の所に、兼てから納つてあるものを、お客様に御覽に入れろ！　今夜入らして下すつた御禮に、皆御土產にあげようぢやないか。』

と云うと、

『それが可い、〳〵！』

居並んだ妖怪どもゝ、一目小僧と一緒になつて、土藏の方えと急いで行つたが、暫くすると各自が、手に〳〵持つて運んで來た、ビスケットの函の樣なものと、サイダーの罎の樣なもの。

煤太夫わこの二種を、明一の前に並べさせ、

『舌切雀の御宿でわ御座いませんが、今晩御入來の御記念に、お土產としてさしあげましよう。何卒お納め下さいまし！』

と云う。明一わ考えて、

『それわ難有う。だが一體これわ何だネ？』

『何だか當てゝ御覽遊ばせ？』

『よく見なければ……』

と、まづ函の方をあけたら、中にわビスケットにも似つかない、茶色の玉の破片が入つて居り、また罐の方からわ、薄青い水が出た。そして試しに舐めて見ると、その玉の破片わ苦く、水わ變に酸ばいでわないか。

『何だ變なもんだなア。』

と、思わず顏を顰めると、煤太夫わ笑いながら、

『變な筈で御座います。その函のわ臆病者の肝、罎のわ弱虫の涙で御座います。』

四　化物屋敷が夜學校

函と罎との中身を聞いて、明一わ笑い出さずに居られなくなつた。

『ナニ、臆病者の肝に、弱虫の涙だつて？　そんな物を何だつてお前の方ぢやア大切にして置くんだ？』

と、聞くと、煤太夫わ頭を振つて、

『なにも大切にして居る譯でわ御座いませんが、これわみんな人間の中の、臆病な方や、弱虫の人

が、私共に出會わす度に、其場でキヤツと肝を潰したり、ワツと泣き出したりして、置いてその儘逃げておしまいなさるから、その後で私共わ拾い取つて、機會があつたら返してあげようと、今日まで納つておいたんで御座います。それで今夜わ恰度幸い、貴君がお出で下さいましたから、御土産にしてさしあげます。これからお宅えお歸りになつて、若し御友達の中に、肝が半分缺けてたり、涙が減つたりしてる方があつたら、何卒返してあげて下さい！』

と、云う。

これを聞くと明一わ、何だか急に極りが悪くなつた。それわこんな證據を出されて、人間仲間の氣の弱さを、それとなく冷評される樣にも思われたからだ。

けれども亦妖怪仲間が、先刻からの頼みと云う、今の話の樣子でわ、全く人間に近づき度いと云う、誠意も何うやら認められるので、遂に明一わ決心した。

『よろしい。それでわこのお土産わ、僕が難有く持つて歸つて、それ〳〵主に返してやろう。そして又改めて、もう一度此所え來る時にやア、その臆病者や弱虫も、平氣で一緒に來られるようにしよう。』

『でわ私共のお願を、お聞き遊ばして下さいまして？』

『無論僕が承知してる。』

『それわ難有う御座います。それで私共も安心致しました。コレ、諸君御禮を云いたまえ！』

『難有う！』

『ありがとう！』

『おありがとう御座います。』

妖怪共わ一齊に無格好な頭を下げた。

途端に何所でか鷄が鳴いた。煤太夫わキツと成つて、

『ヤ、もう夜が明けるな。それぢやアこうして居られんぞ。でわ明一樣よろしく御願い申します。』

と、云うかと思うと大入道の姿わ、そのまゝフツと消えてしまうと、他の大怪小怪も、そのまゝフィルムの切れた樣に、フツと一時に見えなくなつて、後わ欄間えさし込む日影に、パツと四邊が明るくなつた。

『オヽ、もう夜が明ける。ぢやア僕アこんな空屋で、とう〳〵一晩明かしちまつたんだナ。』

と、明一わ獨語を洩らしたが、

『それにしてもあの妖怪共わ、ほんとに出たのかそれとも夢か……。』

と、まだ半分疑いながら、そつと眉毛に唾を塗けても見た。

が、不圖前を見ると、先刻の函も罐もある。そしてその中身もある。

『ぢやア矢張り夢でも無かつたか。それぢやア約束した通り、これから直ぐに家え歸つて、皆に譯を話さなけりやならん。』

と、明一わ立ち上つて、玄關の方えと出かけた。

すると表の門の方で、何だかザワ〳〵人聲がする。

百姓共が野良え行くのか、それにしてわ騒がしすぎると、思いながら出ようとする所え、ドヤ〳〵入つて來たのを見ると、それわ皆自分の友達や、近所の者の誰彼であつたが、明一を見ると、

『ヤ、居た〳〵、無事に居た。』

と、一人が嬉しそうに叫べば、

『まて〳〵、化けて居るかも知れないぞ。』

と、又一人が注意する。

さてわ昨夜歸らないのを案じて、皆が探しに來たのだとわ、はやくも明一わ讀めたのである。

で、明一わ笑いながら、

『ぢやア君達わお迎いに來てくれたんだネ。それわどうも難有う。僕わ此通り無事なんだから、何卒安心してくれ給え！　それに好いお土産もあるよ。』

と、常に變らない元氣で云う。

迎いの者わ顏見合わせたが、

『ぢやア矢張り眞個の明一さんだろう。そう云やア手に變な物持つてるぜ。』

『あれがお土産なんだろうか。』

『そんなら早く貰い度いなア。』

などゝ慾張る奴も居る。明一わ又皆に、

『たゞ立つてちやア話も出來ない、どうぞ中え入りたまえな！　好いお座敷があるぜ。』

と、云いながら中え案内する。

これにわ一寸逡巡つたが、恐い物見たさの好奇と、多勢を恃む強味とで、皆わドヤ〳〵之に續いた。中わ薄暗くて煤臭い。

『何だか氣味が悪いぢやないか。』

『はやく戸を明けろ〳〵！　そうして空氣を流通させろ！』

『それに日光が入りさえすりやア、妖怪なんぞわ出て來られやしない。』

と、皆わ手配して戸をあけてしまつた。明けて中わ明るくなつたが、その代り汚さもよく見えるので、うつかり下にも居られない。

が、明一わ座敷の中央に立つて、皆の者に昨夜の話を、一と通り聞かせた上、

『さア誰だろうこの中で、肝を潰して逃げ出したり、泪を飜して泣いたりしたのわ？　その肝も涙も今僕が取り返して來たから、さア誰にでも返してあげるよ。』

と、云つたが、誰も名乘つて出る者わ無く、一座わ顏見合わす許り、妙にシンと鎭まつた。

忽ち次の室で、ド、、、と云う家鳴がした。

それが不意だから堪らない。一座わ等しく肝を潰して、ソレ出たぞと云うが早いか、我先にと爭つて、庭の方え逃ようとする。それと見ると明一わ、

『それ見たまえ！　君達わ直ぐそれだから困るんだ。』

『でもあの家鳴りが……』

『ありやア板血丸が暴れたんだよ。』

と、云いながら後の襖をあけると、何時の間に來て居たか、新澤先生がヌツと現われた。

『ヤ、先生！』

『ウン、明一！　感心々々！　おれも昨夜から此所に居て、よくお前の樣子を見て居たんだ。實にお前わ見あげた者だ。それに引かえて他の者わ何だ。おれが試に襖を叩いた丈で、あの通り肝を潰す。これぢやア妖怪に馬鹿にされるのも當然だ。ちと度胸を練るが可い。』

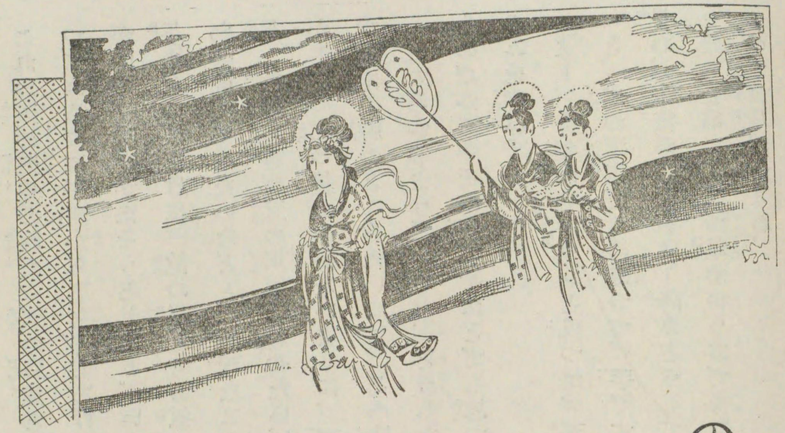
と、こう云われて皆の者わ、只頭を掻く許り。眞の妖怪に會つたより、やつぱり先生が恐ろしいと思つた。

さて明一わ、改めて友達に向い、妖怪の恐くない譯を話すと、初めて皆も腑に落ちたので、そこでいよ〳〵次の晩わ、此明一が發企人になり、空屋の廣間を會場にして、盛んな妖怪歡迎會を開いたが、新澤先生わまた其次の夜から、此所を夜學の教場にして了つた。

のろいの星

(一)

天を追われたすね星
満願の日に得た奇石



天を追われたすね星

天の川でわ、年に一度づゝ、牛飼星と、機織星の、二つの星が會つて、樂しく一夜をあそぶことになつている。それが七夕というものだ。

けれども、その時雨でも降ると、どつちの星も川がわたれないから、その年一年わ、會うことができない。だからこの晩ばかりわ、どうかしてお天氣を好くしたいものだと、星仲間で誰も祈らないものわない。

ところが、こゝにたゞ一つ、すね星という女星があつた。

これわ天の邪鬼の娘だ。天の邪鬼といえば、天上界での根性まがりで、日の神わ東からでるときまつているのに、西から車を押しあげようとしたり、風の神が南から吹こうとすると、北にたちふさがつて、吹きかえそうとしたり。いつも他の者の逆にでるので、皆に嫌われてばかりいたが、すね星もその娘だけに、他の星どもと氣があわず、常から、他の星わ夜でないとでないのに、自分だけわ晝間でてみたいなどゝ、無理なことばかり考えていたが、この七夕についても、他の者わ、牛飼星と機織星を、天の川であわせたいばかりに、皆好い天氣をいのつているのに、自分ばかりわどうかして、二つ星のあえないように、邪魔をしてやりたいものだと、毎年その間際になると、獨りそつと雨の神のところえいつて、その降りだすのを頼んでいた。

ところがちようど今年わ、どうしたものか雨の神が梅雨の間になまけていて、日の神に叱られたものだから、その腹いせにとでも思つたか、いつもいゝ加減に聞きながしていた、このすね星のたのみを幸い、

『よし、今年わ一番ウンと降つて、天の川に水を出して、二つ星を困らせてやろう。』

と、二つ返事でうけあつて、手ぐすねひいて、その日をまちかまえ、いよ〳〵七夕という七月七日わ、午後からザア〳〵降りとうして、とう〳〵夜通しあがらなかつた。

そのために、二つ星わいうまでもなく、星という星の仲間わ、皆眉をよせて悲しんだのに、たゞこのすね星ばかりわ、

『うまくいつた、うまくいつた。』

と、小躍りして面白がり、雨の神のところえも、

『ほんとうによく降つてくだすつて、ありがとう〳〵。』

と、うれしまぎれに禮にいつたが、あまり獨りはしやいだので、とう〳〵そのたくらみが知れて、ひどく天上界のうけを惡くし、果わ日の神の勘氣をうけて、星の仲間をおつぱらわれ、はるか下界えと落とされてしまつた。

それわ夜明方のことであつた。

天上界を追いおとされたすね星わ、途中で星の光を失い、たゞの黃色の石になつて、そのまゝ落ちてとまつたところわ、ちようどあるお宮の境内の、鳥居のそばの芝生の上であつた。

おりからの朝露に喉をぬらして、ようやく太息をついたすね星わ、ついに見なれない地上の景色に、小さい眼をキヨロつかせていると、やがて輕い足音がして、その側を急ぎ足に、お宮の方えと通るものがある。

見ると、それわ四十ばかりの女で、髮の形や身のまわりわ、決して卑しい者らしくないが、なぜか足にわ履物もなく、素足のまゝで土を踏んでいる。

すね星わさすが天上で育つたゞけ、こうした人間を見ると、すぐもうその何者かゞ解つた。

これわ祈願の筋があつて、このお宮え跣參をしているのであろう、と思うと急に好奇心もでゝ、

その理由がききたくなつたが、それにわこちらが石でいてわ、どうすることもできないので、はやくも一策を考えた。

ちようどこの時　彼方の森蔭から、この邊の村の者らしい、背に籠を負い、手に熊手をもつて來るのが見えた。

『よし、あすこにいゝ者がきた。あの體を借りてやろう。』

と、思うと、今までの黄色さに、一そう澤を見せて光つた。

と、はやくも見つけた少女わ、

『まア、きれいな石が……』

と、熊手の先でちよつとかきよせて、すぐその手にひろいあげた。

『まるで金の様……ほんとの金か知ら、何にしてもいゝ物ひろつた。』

と、そのまゝ掌でなでゝ、帶の中えおしこんだ。

こうなれば占めたもの、すね星わすぐその拍子に、この少女の體を借りてしまつた。いいかえればこの少女に、すつかり乘りうつゝてしまつたのだ。

ところえ以前の女わ、お宮の方からまた引かえしてきた。

少女わすぐその側えよつて、

『おばさん！　おはよう！』

と、なれ〳〵しく言葉をかけた。

すると女わ立ちどまつて、

『おはよう。お前も毎朝精がでるネ。』

『おばさんだつて、毎朝ずいぶんよくお詣りに來るのネ。もうこの間から幾日になつて？』

『ちようど今日で三七日なのだよ。もう明日わ來ないでもいゝんだが。』

『三七日、跣でおまいり……ぜんたい何のお願があるの？』

『そうだねえ……』

と、ちよつとためらつたが、少女の顔を見ているうちに、いつかそれにひきつけられるように、

『實わお姫さまの御病氣が、はやくお癒りになるようにと思つて……』

『お姫さまつて……どこの？』

『私の御奉公してるお邸のさ。』

『どんな御病氣なの？』

『それがふしぎな御病氣で、あんまり人にわいわれないのだが……いくらお醫者さまにおかけ申しても、一向効驗がないものだから、この上わ神さまの御力より、他に頼むものわないと思つて、それでこの間から、この權現様にこうしておまいりしているのさ。』

『そうなの……』

と、少女わうなづいたが、尚ぢつと相手を見ている。その眼わあやしく光つたと思うと、

『おばさん！　そんなら私好い物あげましようか。』

と、さも冴々した聲でいう。

『好い物つてなに？』

『この石なの。』

と、少女わ帶の間から、さつき拾つた石を出して、

『この石で撫でゝあげれば、どんなむづかしい病氣だつて、きつと癒つてしまいますよ。』

と、見せた。

女わ目を丸くして、

『まア一寸お見せ！　まるで金の様……』

『どこかに青いような所もあるでしよう。それがたゞの石でない證據よ。これ貴女にあげますから、持つてつて試してごらんなさい。』

『まアありがとう……』

と、まだ一心に石を見入つていたが、

『やつぱり滿願の日だけあつて、こんな好い物をさずかつたのか。あゝ、ありがたいありがたい！』

と、お宮の方をまた拜んで、

『それぢやア貸してもらえるの？』

『エゝ、ようござんすとも。』

と、少女わ快くうなづいたが、こうして石を女に渡すと、もう乘りうつゝたすね星も、その身をはなれたものと見えて、少女わそのまゝ物もいわず、彼方の森の中えと行つてしまつた。

一たいこの女わ、どこの何者であつたろう？

これわこの近くに住んで、名わ遠くまでひゞいている、ひとりの長者という者の、一人娘の乳母なのであつた。

長者の娘わ、玉子といつて、掌の中の一粒種。兩親わ眼にも入れたいほど可愛がつて、ようやく十三の年までわ、なんの障る事もなく育てあげたが、どうしたことか、この春の七艸の日の夜明ごろ、めづらしく厠におきて、用をすませて手を洗う時、ふと空を見あげたが、何をどこで見つけたのか、アツと一ト聲叫んだと思うと、そのまゝ氣絕してしまつたのである。

附添つていた乳母のかえでが、びつくりして抱きおこし、それから藥よ、醫者よと、いろ〳〵に介抱したので、漸く息わ吹きかえしたものゝ、それからわ物もいわず、眼を半ば開いたまゝ、たゞウト〳〵と眠つてのみいる。

その上、三度の食事さえ、ろくに口えわ入れないが、とより飲んでいるが、何の効驗もないのである。

兩親わいうに及ばず、一家一門の人々も、これわ何かの祟でわないか、それとも何者かにつかれたのかと、いろ〳〵に心配するが、さてどうすることもできないので、この上わ、神様のお力をお借り申す他わないと、忠義なかえでが思いたつて、こうして毎朝鎭守の社え、三七二十一日の間、跣參をするのであつた。

(二) 行者と乳母との爭論
奇石は飛んで娘の掌中

こ の長者の邸でわ、最愛の一人娘、玉子の病氣の癒りにくさに、今わ醫者も賴みにならずと、毎日祈禱の行者をむかえて、奥座敷に祭壇をつくり、そこで祈願をこめていたが、きようもこの大役をつとめるべく、木然という山伏が、弟子行者數人とともに、支度をしてつめかけてきた。

ところえちようど歸つてきたのわ、例の乳母のかえでであつた。

かえでわとりあえず、玉子の病室えきて、けさの樣子をうかゞうのに、あいかわらず玉子わ、眼を半ば閉ぢたまゝ、まるで刻まれた人形のように、毛筋一つ動かさないでいる。

側にわ母の柏葉が、いつもの浮かない顏つきで、絹團扇をかるくうごかして、病人の枕邊にうるさくくる、蠅をおいながら控えていたが、かえでを見ると氣の毒そうに、

『オヽ、今おもどりか、毎日御苦勞だねエ。』

という。かえでわ、ていねいにお辭儀をして、

『奥さまこそ、ひきつゞいての御看病で、よくお疲れもおでになりませんで……』

『疲れるどころかこの命を、いくら縮めても苦しくないから、どうかしてこの娘の身體を、元の通りにしてやりたいと、そればかりを思うています。』

『御道理でございますとも……それについて奥さま、きようわふしぎな御利益で、ふしぎな物が手に入りましてございます。』

と、はれ〴〵しく云いながら、

『さ、これを御覽あそばして下さいまし！』

と、さつきの石を懷からだして、うや〳〵しく柏葉にわたした。

柏葉わうけとつて、と見こう見、

『まア、きれいな石でわないか。なんという石だろう？』

『なんと申しますか存じませんが、その石でお孃さまの、お體をよくお撫で申せば、きつとお癒り遊ばしますそうで……』

『まア、そんな物……どこでどうして？』

『はい、今日お詣りにまいりまして、お宮の境内で手に入れました。』

と、これからさつきのことのあらましを、包まず話してきかせるのであつた。

すると柏葉わ、しばらく小首をかたむけたが、

『そうして、その草刈の娘わ、お前の知つている人なのか？』

『はい、おり〳〵見かける娘でございますが、どこの者だかそれまでわ……』

『おまちよ……』

と、また考えて、

『なにしろこの娘の病氣わ、そも〳〵の初まりからが、あの通りふしぎなことなのだから、なおすのにもきつとなにかの、不思議の力がいるに相違ない。けれども、またそのために、新規な不思議がおこらないとも限らないよ。ちようど木然さまがお出でのようだから、念のためにお尋ね申して、それからのことにしようでないか。』

と、さすがに母親わ思慮がふかい。

ところがかえつてわ平生から、木然坊の法力に、あまり重きをおいていない。そうしたお布施をあての祈禱より、我を忘れての一心の祈願が、たしかに靈驗があると信じている。しかもその靈驗の證據に、こうした奇石を授つたと、一圖に思いこんでいる身にわ、柏葉の言葉が、面白くわきこえない。

『でも奥さま、せつかく授かつてきたんでございますから、一つお試しくださいましてわ……』

『それもそうだが、もしひよツと扱いようでもまちがえて、かえつて取り返しのつかないようになつてわ。』

と、又しても大事をとる。

ところえ、行者の木然わ、いつもの通り祈禱前の　病人の様子をあらためにきた。

『木然御見舞にまいりました。今日わいかゞでございますな？』

それを見ると、柏葉も會釋してから、

『オヽ、木然さま、よいところえ……、實わ今、あなたにお尋ねしたいと思うことがございまして。』

『ハヽア、何事でございますな？』

と、木然わもつたいらしくそこにすわると、目を病人の方え配ばりながら、耳わ柏葉えとかたむけた。

『他のことでもございません。實わこの石でございますが、これで撫でると、この娘の病氣が、すぐになおると申すのでございます。一たい何の石でございましよう？』

と、柏葉わあの石を、木然に見せて、あくまで相手を信じきつた目に、ぢつとその顔を見込むのであつた。

木然わその石をとつて、

『ハテナ……』

と、しきりに眺めていたが、

『一たいこの石に、そんな奇特があるとわ、そりやどう云うわけでございます？』

『さアその譯わ……』

と、柏葉わかえでを見かえつて、

『お前から申上げておくれ！』

という。

けれどもかえでわ、なに思つたかその譯は語らず、むしろ相手を試すように、

『木然さまの事でございますから、私が譯を申上げませんでも、もうお解りでございましょう。』

こう出られると木然も、解つた顏をせざるを得ない。

『なるほど……これわ大方どこぞの行者が、法力を吹きこめて練りあげたものでしよう。イヤ、こういうものわ時々出ますが、そりや相手にこそよれで……鰯の頭も神佛と、信じきつた者にでなければ、なんの効驗もござらんのさ。』

と、果わさげすみ顏にいゝはなした。

かえでわキツとなつて、

『なんとおつしやいます。木然さま。そりやお眼鏡がちとちがいましよう。憚ながらその石わ、こ

のかえでが鎭守さまから、たしかに授つてまいつたのでございますよ。そんな世間にありふれた、行者や賣僧の手から出た、まやかし物でわございません。』

と、少わあてつけ氣味で答えた。

こうなると木然も、顏色をかえずにわいられない。

『ナニ、鎭守さまから授つた？　そりや何時、どこで、どうしたことで？』

『ホヽ、貴君も木然さまといわれる、りつぱな法力のあるお方なら、それくらいなことわ一ト目見て、お解りになつたと存じましたが。……佛さまにわちかづきがあつても、神さまの方わお宗旨ちがいで、ついお目が屆きませんでしたか。ホヽヽ。御不自由なものでございますネ。』

と、かえでわなか〳〵毒口をきく。

木然わいよ〳〵いらだち、

『どこの神さまのお授けか知らんが、石わやつぱり只の石、これにそんな靈驗があるなら、其邊に轉げている瓦の片にも、頭痛を癒やす力わござろう。なんのばか〳〵しい！』

と、憎さげに以前の石を、疊の上えと投げおとした。

するとその力の餘りで、疊の上で一つはずむと、石わまるで毬のように飛んで、玉子の寢ている上えと落ちた。

ハツと思つて柏葉とかえでが、我知らず膝をすりよせると、いつか玉子わその石を、その左の手

に握つたまゝ、ムツクリ床に起き上つている。

『モシ、お嬢さま、どうあそばしたのでございます?』

と、おどろいてたづねるかえで、

『ヤ、その石わ、玉子さんのお手に?』

と、目を圓くする木然。

そのあいだに母の柏葉わ、

『コレ、そんな物持つてよいのか。』

と、案じながら手をのばした。

けれども玉子わそれ等にかまわず、あらためてその石を高くさゝげると、

『アハヽヽ! オホヽヽ! アハヽヽ! オホヽヽ!』

と、他愛もなく笑いだすではないか。

こちらの三人わ顔を見合わせて、言葉もなくたゞ呆れている。

玉子わそのあいだに、その石をまた懐に入れたと思うと、さながら何者かの離れたように、グツタリと元の床の上に、倒れてまたぢつと眼をつぶつてしまつた。

『モシ、お嬢さま、どう遊ばしましたのでございます?』

と、かえでわすりよつてその手をとると、こわいかにその手首わ、まるで石のように冷くなつて

いる。

『ヤヽ、お嬢さまが……。』

『エツ、どうかしたの?。』

と、叫ぶかえでに、とりつく柏葉。木然わキツとなつて、すぐに用意の珠數をとりなおした。

(三)

奇石の奇特に姫の全快
魔力を見破る行者の退却

行者の木然わ、ここぞとばかり、殊勝らしく珠數おし揉んで、なにやら高らかに念じはじめた。

柏葉とかえでわ、それに耳を貸すまでもなく、一心に姫を見つめて、自分たちも石のようになつている。

と、その念力の効果であつたか、一たん冷えきつた姫の手わ、また少しづゝ温もりはじめた。

それに力を得た母の柏葉わ、

『コレ、玉子! しつかりしておくれ!』

つゞいてかえでも、

『お嬢さま! どうぞ氣をたしかにお持ち遊ばして!』

と、その耳に口をよせた。

玉子わまだ身動きもしなかつたが、さつき懐中に入れた石わ、またいつの間にかコロ〳〵と、ひとりで床の上にあらわれた。

それと見ると木然わ、

『オ、この曲者め！』

と、いゝながら、珠數をふるつてその石をたゝいたが、カチリと高く響いた弾みに、珠數わちぎれてその玉わ、四方えバラ〳〵と飛んでしまつた。

木然わいよ〳〵いらつて、腰の戒刀に手をかけた。思うにこの行者にわ、この石の正體が見えたか、それとも何か怪しい姿が、その眼にうつゝたに違いない。

で、今にも戒刀をぬきはなそうとする時、その石からサツとばかりに、鋭い光がほどばしると、それにどこを打たれたか、木然わアツといつたまゝ、その場に氣を失つてしまつた。

この騒ぎに、柏葉もかえでも、たゞウロ〳〵と氣を奪われるばかり。ところが、一たんたあいなく見えた玉子わ、この時再び元氣づいて、床の上に起きなおり、今度わさもおちついた様子で、

『お母さま、どうもすみません。かえでにも心配かけたねエ。けれども私わこのとうり、もうすつかり癒つたから、どうか安心しておくれ！　それにしてもそこにいる、變な人わどうしたの？』

と、眉をひそめて木然を指す。

柏葉わはじめて安堵した體で、

『まア、もうそんなに快くなつておくれか、ありがたい〳〵。』

と、いゝながら木然を見かえり、

『このお方わ木然さまといつて、この間からお前のために、御祈禱をしてくだすつた、えらい行者さまなのだよ。』

『といえば木然さまわ、あんまり氣をお入れになつて、とう〳〵氣絶しておしまいなすつた。』

と、かえでわ氣の毒そうに、側えいつてその介抱をしようとした。

が、玉子わ手をふつて、

『まア、どんなえらい方か知らないが、私にわなんだか野良犬が、路端に臥ているようにしか見えない。いやらしいからはやく退けとくれ！』

と、はてわ袖で顔を掩う。

せつかく病氣が癒つたというのに、また機嫌を損じてわと、かえでわ急いで次の者をよんで、倒れた木然をひきわたすと、そのまゝ姫の目障りわ、その場を取りはらわれてしまつたが、それでも切れた珠數の珠わ、まだその邊にちらかつている。

『こんな物で私をうつて、ほんとにいやな行者だよ。はやくみんなすてゝおくれ！』

『畏まりましてございます。』

かえでわまた珠數の始末にかゝる。

その間にまた柏葉わ、不思議の石をつく〳〵見ながら、

『お前、この石知つておいでか？』

『知つてますとも〳〵。これわ乳母やが神さまから、さづかつてきた大切な石ですワ。これわ私のお守りですから、お母さま！　はやくお袋をこしらえてください。』

『オヽ、そうだネ。乳母にそういつてこしらえてあげよう。』

『いゝえ、私、自分でこしらえます。なにか好い巾をください。』

『さア、なにがよかろうねエ。お藏えいつてさがしたら、ちようど好い錦があろうから。』

『そんな物より、いゝ物があるワ。私のお宮まいりの時、着せてもらつた產衣があるでしよう。あれを出してくださいよ、私わ自分で好いようにこしらえますから。』

と、いううちも、掌にのせて、さも嬉しそうになでゝいる。

兎も角もあれほどの病氣が、こうしてりつぱに全快してみれば、それがなんのためであろうと、母としての喜びわ、これにますものわないのである。

で柏葉わ、玉子のいうまゝに、

『アヽ、よいとも〳〵。あの產衣ならちようど好かろう。ぢきに出してあげますよ。』

と、いうとき、女中の一人がきて、柏葉の耳ちかく、

『あの木然さまが、ちよつと奥さまに……』
と、なぜか小聲でいう。
『オヽ、でわもう正氣になられたか。』
『ハイ……彼方でお待ち申しております。』
と、いかにも仔細ありげである。
『でわ、お目にかゝつてきましよう。』
と、立とうとすると、玉子わまた、
『お母さま！』
と、鋭くいう。
『エツ？』
と、ふりむくと、
『あんな野良犬にわ、會わなくてもようござんす。』
と、また機嫌を惡くする。
柏葉わ餘儀なく、
『でわ、もう會いますまい。』
いゝながら女中にわ、後で會うというように、目配やら手眞似で知らせた。

が、はやくも見てとつた玉子わ、さらに眉を逆立てゝ、
『あんな奴、なぜおいとくの？　はやく何所かえ追いだしておしまい。』
と、顔に似合わず口汚い。
かえでわ氣をもんで、
『よろしうございます。私がいつて聞いてまいります。』
と、立とうとすると、また睨めつけて、
『ばアやも行かなくてもよござんす。』
と、叱つた。
迎いにきた女中わ、手持無沙汰にいすくまると、また一人がやつてきて、
『木然さまも只今わ、もうすつかり御恢復あそばしましたから、改めてお嬢さま、御全快のおよろこびに、これえまいりたいとおつしやいます。よろしうございましようか。』
という使だ。
柏葉わかえでと顔見合わせて、まだなんとも答えかねていると、いきなり玉子わたちあがつて、
『いゝワ〳〵。あんな野良犬がくるなら、私、どつかえ行つてしまうワ。』
と、そのまゝ縁え走りでた。
驚いて立ちあがる母親、あわてゝ袂をひかえる乳母、二人とも氣が氣でない。ところえもう木然わ、返事をまちかねてやつてきた。
それと見る玉子わ、手に持つていた例の石を、いきなり木然に投げつけた。
石わ空を飛んで、木然の胸のあたりを打つたとおもうと、木然も體をかわして、手にもつ中啓ではらつたが、それがたしかに石に當つたのに、石わ落ちずに宙をかえつて、玉子の手に又もどつた。
そのかわり、木然の中啓わ、骨を折られ、紙を破られ、バラ〳〵になつておちている。
もうこれまでと思つたか、木然わ聲高らかに、
『お嬢さまのそのお手に、その怪しい石のある間わ、お體わよし健かになるとも、お心わかならず魔がさして、忌わしいものになりまするぞ。はやくその石をお取りあげあそばせ！』
と、叫んだが、そのまゝ自分わ踵をかえして、急いでこの家を立ち去つてしまつた。
木然わやつと立ちさつたが、その立際にのこした言葉わ、母にも乳母にも聞きずてわならない。
といつて、あとを追つて聞きに行こうとすれば、もとより玉子わ承知しまいと、氣をかねてその顔を見ると、思いのほか機嫌もよく、その手の上の例の石を、嬉しそうに見て餘念もない。
こちらの二人わ顔見あわせて、たゞ太息をつくばかりだ。
おりから、どこからともなく、
『ホ、、、』

という女らしい聲で笑うのがきこえた。

(四) 降魔の一矢に妖魔の退散
影をひそめた呪いの星

何者とも知れない、どこからとも知れない女らしい笑い聲。それわあまり高くわなかつたが、それでもその涼しい聲わ、妙にこの邸中にひゞいた。

すると不思議にも、柏葉やかえでの顔をおうつていた、さつきからの不安の雲わ、朝日の前の霜のように、もうすつかり消されてしまつた。

娘の得意わいうまでもない。あいかわらず石を抱いたまゝ、

『ばアや！　私もうこんな物いらないから、はやくかたづけてしまつとくれ！』

と、今まで自分の横わつていた寢床を、足で蹴飛ばすようにする。

『ハイ〳〵、かしこまりました。もうこんな物にわ用わござりませんね。』

と、急いで寢床をあげようとすると、それと見て他の女中どもゝ、走りよつてきて、皆片づけてしまつた。

母の柏葉わ、玉子の手をとつて、

『さ、もうこんなに快くなつたのなら、あつちのお座敷えゆきましよう。そうしてお風呂をたてさせるから、はやくはいつてさつぱりおし！』

といいながら、連れてゆこうとすると、

『いゝわよ。お母さん！　私手なんぞもつてもらわなくつても、一人でどこえでも行けますわ。』

と、母の手をふりはなし、シヤン〳〵歩いて緣に出たとおもうと、すぐに庭下駄をつゝかけて、築山の方えとでゝ行つた。

『アレ、お前そんなことしてよいのかね。急に風にあたつたら、また惡くなりますよ。』

と、後から追いながらいつても、それにわ耳もかさない。

乳母のかえでも心配して、

『モシ〳〵、お嬢さま、どちらえいらつしやるんでございます？』

と、おなじく庭え下りてきた。

すると玉子わ、急に立ちどまつて、キツと見かえり、

『お前わ誰だイ？』

と聞く。それがいかにも他人あつかいだ。

『アラ、お嬢さま！　私でございますよ。ばアやでございます。まだおわかりになりませんか？』

『ナニ。ばアや！　私そんな人知らないよ用がないからあつちえいつとくれ！』

叱りつけるようにいつて、また行きかける。

ところえ、チヨコ〳〵と出てきたのわ、一匹の白猫であつた。これわ常から姫の氣にいりで、いつもその手に撫でられたり、膝にだかれたりしていたが、この間からの病氣のために、しばらく側えもよせられなかつたのに、今この姫の機嫌の好さをみて、自分も嬉しいとおもつたか、さもよろこびをいうように、喉をならしながら寄つてきた。

『アレお嬢さま！　お氣に入りのシロがまいりましたよ。』

と、かえでわまたとりなし顔にいう。

けれども玉子わ、手に抱えた例の石を、猫のかわりに頬にすりながら、足元えきたシロも見かえらず、はてわ裾にまつわるのを、

『エイ、うるさい！』

と荒々しく、下駄のまゝで蹴はなすのである。

『まア、お嬢さま！』

と、あきれて立ちすくむかえでに、柏葉わまたよつてきて、

『どうしたもんだろう、まアあの子わ！』

と、更に新らしい不安の色をみせた。

一たい、これわどうしたのだろう！

二人わなんとも判斷をつけかね、またしても玉子の樣子をみると、玉子わ尙足ばやにあるいて、

もう築山の上までいつてしまつた。

と、やがて天を見あげて、手にもつたあの石をさゝげ、なんだか口を動かしている。

『どうも變だよ。なにをいつてるんだろう？』

『さアなんでございますか。私行つて伺つてさいりましよう。』

かえでわ急いで、築山えと近よつた。

山の上でわ玉子が、石をさゝげたり、また抱きしめたり、或わ頭にいたゞいたり、どうやら正氣の沙汰とわ見えない。

その中にどこからか、ヒユーと宙に音をたてゝ、一本の白羽の矢が、庭を横切つたと思うと、今しも高くさゝげた姫の手の、石にハツシと射あてると、石わたちまち微塵になつて、黃色の粉をまいたように、その場に散りとんでしまつた。

と同時に玉子わ、アツとばかりに打倒れたが、とたんにまた女の聲で、ワアツと泣き叫ぶ聲がきこえた。こちらの二人わ驚くまいことか！　色をかえて走りよろうとすると、後から聲をかけて、

『イヤ、御心配にわおよびません。お嬢さまわこんどこそ、まことの御全快でございます。』

と、いゝながら現われたのわ、いつの間にきていたのか、さつき歸つてしまつたはずの、あの行者木然であつた。

見るとその手にわ、白木の半弓に、白羽をつがえた青竹の矢を、まだ一本もつていたが、

『奥さまも、かえでどのも、もう御安心なすつてよろしい。』

と、いう。

『でも、玉子が只今の様子わ……』

『あれわ降魔の矢の力で、魔が落ちたものですから、その拍子にお倒れになつたばかりです。しばらくあのまゝにしておゝきになれば、必ず正氣におかえりです。』

『でも、もしやお怪我でも……』

と、かえでわまだ案じている。

『イヤ、矢わあの石をうちくだいたばかり。お嬢さまわお倒れになつても、その石の粉ですから、決してお怪我わございません。』

と、木然わおちついている。

『でわ、あの石わ破れてしまつたのですか？』

と、柏葉。

『ようやく退治てやりました。』

と、木然。

かえでにわまだ解らない。

『一たい、あの石わなんでござりましよう？』

『あれわ呪いの星なのです。石と見えたわ天上から、下界におちた星の碎片でしたが、あの星わ天上でも、天の邪鬼の手にあつたのですから、あんな者につかれていてわ、お嬢さまの御氣質が、すつかり悪くお變りになつて、一生御出世わできませんでしたからわ、再び祟りも呪もできません。これ御覽遊ばせ！』

と、いゝながら木然わ、築山の上までいつて、そこにまだ落ちていた、石の碎片の少し大きいのを、指につまんで檢めながら、

『まだこの中にわ少しばかり、呪いの毒氣が殘つております。試しにお目にかけましようか。』

と、いゝながら、あたりを見廻わし、そこにあつた若松の、青々とした枝の上え、その石を投げつけた。

するとその松の葉わ、見る〳〵うちに色をうしない、まるで刻んだ煙草のようになつて、バラバラと下え散りこぼれてしまつた。

『それこのとうりこの星わ、白いものを黒くさせ、生あるものを殺してしまい、正しいものをねぢけさせ、またおとなしいお嬢さまでも、氣の荒い、意地の悪い、慈悲もなさけもまるでない、毒婦のようにしてしまうのです。恐ろしいでわございませんか。』

という中に、俄に空が曇つたと思うと、すつかり黒くなつてくる。そしてその黒い空に、まるで金砂子をまいたように、無數の星があらわれたが、それがまた火花のように、右え左え上え下えと、

さかんに亂れ散るかとおもうと、たちまちドン〳〵と雷の音がして、なんともしれない凄い景色になつた。

柏葉とかえでわ手を取りあつたまゝ、只ブル〳〵とふるえている。

木然わすこしも騒がず、また珠數をとりなおして、天に向つて五六度、サラリ〳〵と押しもんで、やがてサツと宙をはらうと、今までの黒い空わ、見る〳〵元の青空となつて、星わどこかえ消えてしまつた。

二人わホツと息をついて、

『まアほんとに恐しいことだつた。』

と、太息をつくばかりである。

この時、ちようど玉子わ、まるで夢からさめたように、ムク〳〵とおきあがつたが、

『マアお母さま！』

『オ、玉子！』

『ばアや！』

『お嬢さま！』

と、兩の手に二人の手をとつた。

『しつかりしておくれ！』

『もう大丈夫ですよ。』

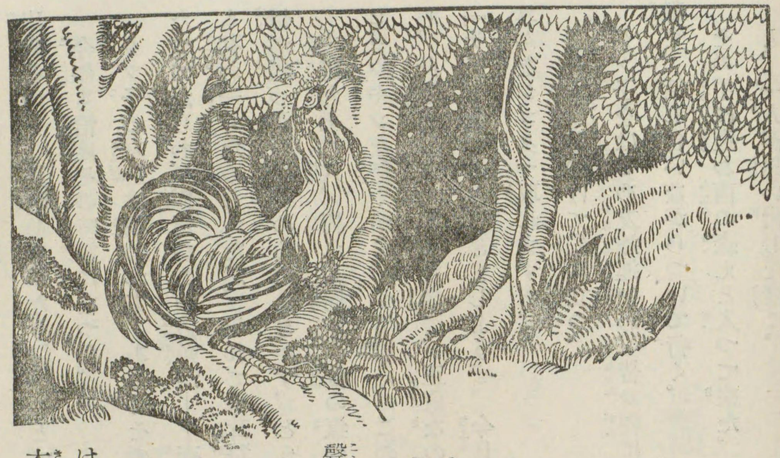
『およろしいのでございますか？』

『ばアやも安心しておくれ！』

と、ニツコリ笑つたその顔わ、まるで花のようにうるわしく、そしてその瞳わ、宵の明星のようにかゞやいたが、その清らかな光の前にわ、いかなるおそろしい呪いの星も、影をひそませずにわいられまいと思えた。

夜鳴鶏

一　黄金の鶏



黄金の鶏

南の森でわ、此頃毎晩鶏の聲がする。それが而も眞夜半の二時頃、たしかに雄鶏の聲で、時をつくるのが聞えるのである。

鶏の夜鳴！　それわよくない事の前兆であると、むかしから云い聞かされて居たタツ子の一家わ、その聲の聞える、一番近い所に住んで居る丈に、一番氣にかけずにわ居られなかつた。

けれどもこの南の森と云うのわ、山の麓にある雜木林だが、それから後の松山わ、毎年松茸が澤山

出來るのと、見晴しもかなり好いのとで、秋になると大層な人出であるのだ。

今年も恰度その時節になつた。

タツ子わ友達に誘われて、ある日その山え茸狩りに行く事になつた。尤も鶏の夜鳴が聞える様になつてからわ、何だかこの方角が——森でも山でも、氣味の悪い物の様に感じられたので、タツ子も初わ一寸ためらつたが、それでも茸狩わ自分にとつて、大好きな年中行事の一つでもあつたから、母が氣づかつて止めるのもきかず、とう〳〵出かける事にしたのである。

友達わ七八人、何れも同年位の氣の合う小娘達許りであつたが、中に只一人六兵衛と云つて、ヒヨウキンな爺やがまじつて居た。この爺やわタツ子の赤兒の時分から、實わ母が嫁に來た時分から、此家え出入して居た者で、正直なのと、話上手なのとで、皆に好かれて居たのであつた。

『サアそろつたら行きましようぜ。今日わ幸いの上天氣だ。一昨日の雨にウンと出てる筈だから、みんなシコタマ取れますぞ。』

と、勢をつけて先に立つ。

タツ子をはじめ友達連中わ、皆身輕に出で立つて、手に手に籠をさげながら、さも嬉しそうな高聲で、話し合いながらついて行く。

その中に道わ南の森えと入つて來た。

と、一人が思い出した様に、

『誰か聞いて、あの夜鳴鶏ツて云うの？』

と、口を切ると、

『ハア、聞いたわ。私ン所なんぞ毎晩聞えるのよ。氣味が悪くツていやになつちまう。』

と、タツ子わ云う。

と、又一人が、

『私も聞き度いと思つてるんだけども、まだ一度も聞かないのよ。一體何時頃？』

『そうねエ……恰度二時頃！』

『まア、それぢやア聞えない筈だワ。よく寢てる時分ですもの……』

『それにしても、タツ子さん何うして聞いたの？』

『はじめわ何の氣無しに聞いたのよ。そうしたら癖になつちまつて、毎晩その時分になるときつと目が覺めて、聞かずに居られなくなつちまうんですもの。』

と、タツ子わつぶやく様に云う。

すると六兵衛爺やわふりむいて、

『タツ子さん所わ聞えるだろうな。一番森に近いんだから、それにしても毎晩とわ御精が出るネ。』

『精出すつもりぢやないんだけども、ひとりでに聞えてしまうんだもの……』

『いやそりやア結構だ。』

『なにが結構な事があるものですか。』

『イヤけつこうだ。こけツこうだ。』

『アラいやだ、また爺やがはじめたよ。』

と、タツ子わ叱る様に云う。

と、また六兵衛わ眞顔になつて、

『全く結構な事なんだよ。實わあの森で鶏が夜鳴するツて事わ、私等子供の時から聞いた事だが、實わだれもたしかに聞いた者わ無いぞ。もつとも私なんざア、久しい間に二度や三度わ聞いたが、それもたしかに鶏だか、それとも時鳥だか梟だか、よく聞分けられない位のもんだつた。所がそれを鶏の聲に、ちやんと聞き分けられるところを見ると、全く結構な事ぢやないか。何でもありやア昔から、由來因緣のある話で……あの鶏の聲を聞きわける者わ、運が好いツて事になつてるんだ。』

と、老人らしい事を云い出した。

こうなると誰も聞流す事わ出來ない。

『そりやア何うしてなの、爺やさん！』

と、四方から話を促がした。

六兵衛わ一寸頭を振つて、

『まア途中ぢやア勿體ない。晝休の時にゆつくり話そう。』

『そんな事云わないで、話してよウ！』

『歩きながら恰度好いぢやないの。』

小娘達わ尙聞き度がる。

六兵衛わまた立止つて、森の方を見込んで居たが、その中大きな槇の木のある邊を、指でさして見せながら、

『恰度あの邊だ。』

『何がよ！』

と、皆も立ち止つて覗き込む。

『ぢやア話してしまうかな。』

『話してよ！ 〳〵！』

と、皆四方から取りまく様に寄つた。

『むかし此邊に長者が住んで居たんだ。』

『長者ツて何？』

一人が口を出すと、

『解つてるぢやないの。大金持の事よ。』

と一人が制した。さも話を待ちかねる様に、

『そうだ。まづ大金持さ。所が、その家に娘が一人あつた。恰度お前さん方の様に、容貌わよし。氣質わ好し、……お嫁にもらい手が山ほどあつたゞ。』

『アラいやだ。』

『いやな事アない。結構でないか。所がその娘が何う云うものかあれもいやだ、これもいやだと、何う云つても聞かない。所えある國のお大名の若殿が、この話を聞きつけて、そんなら私にと云い込んで來たが、それも娘わなか〳〵聞かない。するとお大名の若殿わ、その家の一番大切な寶物の、黄金の鶏をあげるから、是非來てくれと申込んだが、此方だつて大金持、金の鶏なんぞに目をくれない。それでもいやだと云い張つて居た。所がその黄金の鶏と云うのが、實わ只の鶏ぢやないんだ。何でも其家におめで度い事か、また凶い事があれば、ひとりでに鳴き出して、時をつくツて知らせると云う、不思議な寶物なのだ。そう聞くと娘よりわ、親の長者が欲しくなつた。そこで娘に云い聞かせて、得心させようと思つたが、相變らず強情はつて、ウンと云わない。それどころか娘の身にすりやア、そんな寶物で釣ろうとされるんで、なおいやになつたんだろう。所が長者わ慾を張つて、何でもその鶏が欲しい。そこでとう〳〵娘にわ内證で、先方にわ承諾の返事をしてしまつて、その結納として不思議の黄金の鶏を、とう〳〵貰つてしまつたんだネ。』

『いやなお父さんネ。』

『まア聞きなさい、これからだ。……すると若殿わ好い氣になつて、ある日立派な乘物をさしむけて、その娘をむかいに來た。娘わ不意だから驚いた。そんな所えわ行かないとだゞける。阿父さんわはじめて譯をはなして、何でも行けと娘をせめる。若殿わまた何でもよこせと云う……イヤえらい騒ぎになつたもんだ。』

と、此所まで話すと六兵衛わ、ニヤリと皆の顔を見まわしながら、

『どうだネ……お前さん方なら何うするネ、』

娘達わ默つて顔を見合わせた。タツ子わ口を切つて、

『私なら死んぢまうワ。』

と、無造作に云い放した。

六兵衛わつよくうなづいて、

『そうだ、娘わとう〳〵死んぢまつたよ。』

『まア……』

と、他の娘達わ一時に眉をひそめた。

『何所で、何うして?』

と、タツ子わ好奇心を高めた。

『それがよ、恰度あの槇の木の下なんだ。其時分この邊わみんな長者の庭で、あすこに大きな池が

あつたんだが、娘わ皆のとめるのも聞かずに、その池え飛込んで死んでしまつたんだ。するとお前さん不思議ぢやないか。前に結納にもらつた黄金の鶏が、急に時をつくつたゞ。驚いてその箱をあけて見た時わ、もう中わ空ツぽで、それツきり行方が知れなくなつちまつたと云うのん。』

『まア……』

と、皆わ目を見張つた。

『所がお大名の方でわ承知しない。長者が嘘をついて、寶物を騙つたと云うので、忽ちきびしく責め立てたから、可哀そうにさすがの長者も、それツきり家を滅されてしまつたと云うんだが、考えて見りやア自業自得さネ。』

と、此所で話が終ると、六兵衛わまた氣をかえて、

『イヤ、ついみんな話しちまつた。おそくなつた〳〵。』

と、急ぎ足であるきはじめ出した。

けれどもタツ子わ何となく、心の引かれる想がして、まだ先刻の槇の木から、目を放すことが出來ない。

『タツ子さんいきましようよ。』

と、友達が、うながすので、しぶ〳〵連れだつてわ來たが、又してもタツ子わ氣にして、後をふりかえるのである。

二 小人の案内

その中にもう茸山え來てしまつた。ずいぶん早く來たつもりであつたが、それよりはやく來た連中わ、其所此所にもう三人五人、連れだつてしきりにあさつて居る。負けてわならぬと此方の連中も、直ぐ支度をして狩りにかゝつた。

襷がけの結付け草履、頭にわ手拭をかぶつて、手に手に小さな籠をさげて、形だけわあつぱれ武者振りである。

『アラあつた！』

と、はやくも一人わ嬉しそうに叫んだ。

『私だつてもう取つたワ。』

と、次の一人もまけない氣で吹聽する。

『ヨウ。みんなえらいね。』

と、六兵衛爺わ勢をつけて居る。

けれどもタツ子わ、まだ何の獲物もない。いや、獲物をもとめようともしない。

松の下、小篠の間と、かきわけ〳〵歩いて居るものゝ、心わまだ南の森の、あの槇の木の邊に通つて居る。

『アラ、タツ子さん、こゝにあるぢやないの。もう少して踏んぢまうとこだつたわ。』

と、後から來た友わたしなめる樣に云うが、タツ子わ只ふりかえつた許りで、

『アラ、そうだつたの。』

と、一向氣が乘らない。

友達も張合が無いと見えて、皆自分達の獲物をあさりながら、ずん〳〵進んでしまつた。おかげてタツ子わ、一人おいてきぼりにされてしまつた。

けれどもタツ子わ結句それを仕合にして、しばらく其所の松の根に腰をもたせながら、又しても空想にふけつて居た。

空想と云うのわ、例の槇の木の邊に殘つた、あの金の鷄の傳說、長者の姫の物語を、今目のあたりに描くのである。

その中に又我に復つて、自分も折角此所え來た以上、獲物をもとめずにわ居られないと思つた。そして再び足を運ばせて、先の友達の行つたのとわ、全くちがつた方えと辿つた。そうすればまだ誰の目にもつかない、好い獲物があろうと思つたからだ。

やゝもすれば草履をすべらせる、木の根、岩の角を、草をつかみ、笹にすがりながら、目を足のさきにのみ注いで居るので、何樣な所をどう來たとも知れず、何時か一つの洞穴の前え出た。

その洞わさして深くもないが、前にわ態笹や齒朶の樣なものが、一きわ高く生ひ茂つて居るので、中わよく見透かせない。

こんな所に茸わあるまいと、タツ子わ歩を移そうとしたが、尙念のために洞の中をのぞくと、其所に何やら赤い物が見えた。

まさかにまだ紅葉でもあるまい。それとも木の實か草の花かと、思ひながら尙見直すと、今度わその赤い物が動き出した。

さてわ何か生物かと更に目を圓くすると、初めてはつきり見えた。それわ鷄のとさかによく似た赤い頭巾を頭にかぶり、白い髯を顎に生やした、一尺にも足らない小人の老爺でわないか。

タツ子わびつくりして飛び退こうとして、思わず側の松の木につき當つた。

『おあぶのう御座います。』

と、小人の老爺わ走りよつて、

と、裾をひかえた。

タツ子わ氣味惡くなつて、

『アレ、誰か來て！』

と、叫ぼうとすると、小人わ急いでそれを制して、

『決して恐いものぢや御座いません。』

と、やさしげに笑いかけた。

その顔を見ると、タツ子わもう騒がない。却つて好奇に、

『お前、何なの？』

と、問いかけた。

小人の老爺わ一寸えしやくして、

『夜鳴鶏で御座います。』

と、云う。

夜鳴鶏！　此名を聞くともうタツ子わ、急に引きつけられる様な心地になつて、

『まア、それぢや　鶏なの！』

『ハイ。』

『そうして此間から夜半に鳴いてたのわ、お前だつたの？』

『ハイ。』

『まア……ほんとに？』

『ハイ。』

何を聞いてもうなづいて居る。

『ぢやアやつぱり此所で鳴いてたの？』

こう聞くと、はじめて頭を横に振つて、

『こんな所ぢやア鳴けません。』

『ぢやア何うして此所に居るの？』

『貴女のお迎えに参つたんです。』

『私のおむかいに？』

タツ子わまだ解しかねて居ると、小人の老爺わさこそと云わぬばかりに、

『その御不審わ御道理です。然し貴女わ此間から、よく私の聲を聞いて下さいました。それで今日わその御禮に、これえ参つたので御座います。長い事わお止め申しませんから、何卒　私と御一緒に、夜鳴の森え御出で下ださいまし。お姫様も御待ちで御座います。』

と、云う。

そのお姫様と云う言葉が、タツ子の耳にわつよくひゞいた。そして先刻からの空想が、又ありありと目の前に描かれた。と同時にまたその空想を、實際に見たい氣がつのつて來た。

『そう、そんならどうか連れてつて！』

と、快くそれに應じた。

『でわどうぞ此方え！』

と、小人の老爺わ以前の洞の中え入る。タツ子もつゞいてそれえと齒朶をわけた。

こうして洞の中え入ると、初めさほど深くないと見えたのが、ずつと奥が見えないほど暗い。

けれどもその暗い所を、小人わずん〳〵進んでゆくのに、その赤い頭巾許りわ、はつきりタツ子の目に見え、それが恰度目標になる。

こうして三十分許り行つたと思うと、まるでトンネルの出口に近づく様に、段々前が明るくなつて來た。

そして小人の老爺の體が、皆よく見える様になつたと思つたら、前わ全く明るくなつて、自分わ一本の木の下に來て居た。——而もこの木わ、先刻途中で教えられた、南の森の槇の木に、幹も枝振りも變りわないが、あたりの景色わ全くちがつた、廣々としたきれいな庭で、彼方に立派な御殿も見えて居る。

はやくも悟つたタツ子わ、自分の空想に描いて居たのと、殆んど五分の差異の無いのを、不思議に思うと云うよりわ、むしろ誇り度い心地になつた。

こうなると一時もはやく、そのお姫様に會つて見たい。

で、そのお姫様わ、何所から何うして出て來るかと、思ひながら見まわすと、案内の小人の老爺わ、タツ子を槇の木の下に立たせて、自分だけ御殿の方えと急いだ。

三　長者の娘

驚いたタツ子わ、おの〳〵きながらもう一度水の面を見た。そしてそれに寫つた我が姿を、我が眼を疑う様にまた見直した。見直してもやはり前の通りである。

『まア……』

と、おぼえず吐息をもらしたタツ子わ、一體どんな姿を見たのであろう？

それわ驚くのも無理わない。今この水の鏡に寫つたのわ、自分に相違無いのであるが、その自分わ顔ばかりで、姿わついに見た事もない、否、古の繪艸紙の他に見た事の無い、きれいなお姫様そのまゝでわないか。

しかもそのお姫様わ、今の今まで自分の頭に、おぼろげながら描いて居た。長者の娘の何某と云う、あのお姫様そのまゝである。

タツ子わさながら石像の様に、その身の堅くなつたのを感じながら、ぢつと無言で水鏡ばかり見つめたが、漸くにして氣がついて、あらためて自分の衣服や帶を見ると、これもまた初めからの通り、先刻からの自分のに、寸分變りわないのである。

が、只それが水に寫ると、顔ばかりを自分にして、姿わお姫様になつてしまうのだから、さてわこの池の水まで、不思議な力があるのだなと、今更急に氣味悪くなつて、二歩三歩身をしさつた。

とたんに其所の木の根につまづくと、ヨロ〳〵とよろけたので、急いで槇の木に取りついた。

すると今度わ身體中が、急にしびれてしまつた様に、何のおぼえも無くなつて、ウツトリ立ちす

くむ許りである。

所え以前の老爺が立ちもどつて來た。

『お待たせ致しました。何卒こちらえ！』

と、丁寧に案内しはじめる。

タツ子わまだ夢心地ながら、その後からついて行くと、池をまわつて、橋を渡つて、やがて見事な御殿の緣ぢかく來た。

見るとその緣の端にわ、又しても先刻の水鏡の中の姿が、アリ〳〵と現われて居るでわないか。それが長者の娘なのであつた。

タツ子わ我知らず立ちどまつて、只そのお姫樣を見つめて居ると、お姫樣わニツコリ笑つて、

『ほんとによく來て下だすつたのねえ。わたし此間から待つてましたのよ。』

と、なつかしそうに聲をかける。

タツ子わ無言で禮をすると、

『そんな所ぢや話が出來ません。さ、此方え〳〵！』

と、さしまねく。小人の老爺も手をとらない許りにして、

『さ、どうぞ入らしつて！』

と、促がす。

今わタツ子も遠慮する事わないと、招かれるまゝに側えよつて行つた。

するとお姫樣わ、やさしい手でタツ子の手を、ぢつと取つたと思うと、又あらためて顏を見つめながら、

『あなた此間から鷄の聲を、よく聞いて下だすつたのね。』

『えゝ……』

と、輕くうなづくと、

『それから私の話を聞いて、よく私の加勢して下だすつたのねエ。』

『えゝ……』

と、これもおぼつかない返事だ。

『そうしてまた今日わ、よく來る氣になつて下だすつたのねエ。』

と、聲わ段々力をこめて來る。タツ子の答わ只うなづく許りになつた。

『私それが嬉しかつたから、それでわざ〳〵おめにかゝつたの。そうしてあなたにお禮をあげ度いと思うの。』

と、云うとふりむいて、其所について居た侍女に、何か云いつけたと思うと、侍女わその手から、綺麗な袱紗包を渡した。

お姫樣わその袱紗包を、またタツ子の前え出して、

『これが私のお禮なの。何卒持つて行つてちようだい！』

と、云う。

『わたくし……お禮なんぞいたゞく譯わございませんワ。』

まだ手を出しかねて居ると、

『いゝえ、これわあなたが持たなけりやならないものなの。さアどうぞ！』

と、無理に手に持たされてしまつた。

で、手にうけて見ると、包みわさして大きくないのに、ドツシリと持ち重りのするもので、中身の何であるかわ、大方察しがつかないでもない。

『ま、これが黄金の鷄ぢや無いかしら？』

こう思うと急に勿體無くも感じて、

『イエ、わたくしこんな物わ……』

と、また返えそうと思うのに、お姫様わ手を振つて、

『もうあなたに渡したから、私わうけとる事わ出來ないの。そうしてあなたわもう私になつたのに、私わもう私ぢやないの。』

と、云いながら一寸身を返したと思うと、こわ如何にお姫様わ、今までのタツ子にそつくりの姿になつてしまつた。

『アラ……』

と、云つて更に自分を見直すと、これわまた先刻水鏡に寫つた通りの、否、現在目の前で見た通りの、長者の娘のお姫様になつて居る。

とたんに手に持つて居た包みの中で、時を告げる聲がした。果してそれわ鷄であつたが、その聲がしたと思うと、包んで居た袱紗わ何所えか消えて、目も眩む許りの金色の鷄が、ちやんと手の上に持たれて居た。

こゝまで來るとタツ子も、今わ心からお姫様になつた氣で、何のおくれる所もなく、その鷄をもつたまゝ、ズツと御殿え入つて行つた。

此時見ると、タツ子になつたお姫様わ、遙か庭の方え出て行つたが、やがて姿わ見えなくなつて、只例の槇の木許りが、妙に目につくのであつた。

『私わもう長者の娘だ。』

こう云う氣が出て來ると、タツ子わまづ兎も角も、その父なる長者に會い度い。で、かまわず呼んで見た。

『お父様ゝ！』

と、さも甘える様に。すると直ぐに返事があつて、

『オ、何か用かえ。』

と、云いながら出て來たのわ、品の好い老人と思いの外、それわまた何とした事か　まるで木彫の羅漢様の様な、おそろしい男が現われた。

『まアお父様！』

と、此方わ驚いて叫ぶ。

『オヽ、娘！』

と、先方でわいとしそうに寄つて來る。

タツ子のお姫様わ眉をひそめながら、

『あなた私のお父様？』

『何を云うのだ。自分の親を忘れたのか。』

『まア……』

と、また呆れて居たが、これでわまだ眞のお姫様になりきつて居ないのかと、我ながら不安を感じたので、無理に度胸をすえて、

『それぢやアやつぱりお父様なのネ。』

と、はじめて笑顔をつくつて、又甘える様に側え行くと、急に父わ眼をいからして、

『馬鹿めが！』

と、一ト聲叱つて、そのまゝフツと消えてしまつた。

狐につまゝれたとわこんな事か。タツ子わぼんやり呆れてしまつた。所を後から聲をかけて、

『ハヽヽ。お前さん、駄目だ〳〵。』

と、云うのわ以前の老爺であつた。

四　鶏の行方

小人の老爺に笑われたタツ子わ、はじめて氣がついて見ると、先刻たしかにもらつた筈の、あの黄金の鶏が、いつか手の中から消えてしまつて居る。

『まア何うしたろう？』

と、あたりを見まわすと、老爺わ後えまわした手から、その鶏を前え出して、

『駄目だなアお前さんわ！　折角これをさづかつたのに……」

と、見せびらかす様にする。

『アラ、それ返して……』

と、手を出すと、直ぐ又後えかくしてしまつて、

『駄目だと云うに……もう一遍やり直しだ。』

と、云う。

『何うして……何をやり直すの？』

『お前さんわ、折角お父様が入らしたのに、失禮な事をしなすつたから。』

『……でも……私、知らないんですもの。』

『それを知らないから駄目だと云うんだ。さ、もう一度先刻の所え行きましよう。』

と、云いながらタツ子を連れて來たのわ、以前の槇の木の下であつた。

『もう一度そこを見なさい！』

老爺に云われるので、また池の面をのぞくと、今度わ別に變りわなく、自分の通りの姿が寫つて居る。

それで安心して身を退こうとすると、水の中の影が浮き上つて、眞のタツ子の手をとりに來た。

その時見ると、それわやはり自分に代つた、先刻のお姫様なのでわないか。

タツ子も今度わ度胸をすえて、

『先刻わ失禮致しました。』

と、愛想よく聲をかけると、先方でも馴々しく、

『ほんとに惜しい所でした。折角鶏をさしあげたのに……』

『又取り返されてしまいまして、まことにすみません事致しました。』

『でわもう一度あげますから、今度わどうか放さない様に……』

と、云つて何やら合圖すると、以前の老爺わ其所え出て、タツ子にうや〳〵しく以前の鶏を渡した。

此時わもうタツ子の姿わ、又すつかりお姫様になりきつて居る。

『でわまた父にお會い下ださい！』

と、云うかと思うと姫のタツ子わ、又消えてしまつたので、タツ子の姫わ前の様に、

『お父様！　お父様！』

と、もう一度呼んで見た。

『オ、。何か用か。』

と、今度わまた前よりも、一層恐ろしい聲がしたと思うと、目の前に現われたのわ、閻魔の様な形相をした、雲つく様な大男なのに、タツ子わ思わず顔を伏せたが、ここぞとまた思い返して、

『オ、、お父様！』

と、より付こうとすると、又しても大喝一聲、

『馬鹿めッ！』

と、叱り飛ばされて、その大男わ見えなくなつた。そしてまたそれと同時に、黄金の鶏も何所えか行つてしまつた。

そして例の小人の老爺わ、例の通りまた側え來て云う。

『駄目だなア、お前さんわ！』

こう云われても仕方がない。全くタツ子わあんな恐ろしい相手を、直ぐにわお父様と親しみかねるのであつた。

『ほんとに私、駄目ですワ。……とても柄にないんですから、もうそんな寶物わいたゞけません。それより何卒元の私にして、此のまゝ歸していたゞき度うございます』

と、果わ心細い事を云い出した。

すると老爺わまた頭をふつて、

『イヤ〳〵、もう一度やり直すがいゝ。』

と、又しても例の槇の木の下の、池の岸えと連れて行く。

けれどもタツ子わ、こうなると只氣味悪さに、歸り度い氣が先に立つて、もう水の上を見る元氣わない。

老爺わまた促がして、

『何をして居なさる。はやく其所を見なさらんか！』

と、水の上を指すので、餘儀なくちよつと覗いて見たら、こわ如何に、其處にわ自分の影もうつらず、お姫様の姿も見えず、その代りあり〳〵と目に入るのわ、自分の家に居る筈の、眞の自分の父親でわないか。

『アレお父さん！』

思わず聲をあげて走りよろうとすると、その彈みに岸を踏みはづして、ザブンと池え落ちてしまつた。

途端に氣が遠くなつてしまつたが、しばらくして我に復つた時わ、側に居るのわ小人の老爺の代りに、はじめからの六兵衛爺やと、それからお姫様でわなくて、友達の誰彼許りであつた。

『タツ子さん何うしたの？』

と、大聲で聞かれたので、更に正氣づいた時見ると、自分わ先刻の洞の口の所に、身體中泥だらけになつて、皆に介抱されて居るが、手にわ先刻から目に入つて居た、見事な黄金の鶏を、ぢつと握つて居るのであつた。

『まア私、何うしたんでしよう！』

『それより何うしてそんな物持つてるの？』

と、友達わ手にある鶏を、不思議がつてのぞき込む。

タツ子わそれを話す前に、

『私、今まで何所に居て？』

皆わそれに答えて、

『あなたちつとも見えないから、ずいぶん方々さがしたのよ。そうしたらこの洞の中で、助けてよ助けてよと云う聲がしたから、やつとみんなで出してあげたのだワ。』

と、云う。

『ア、、それぢやア先刻の池え落ちた時……』

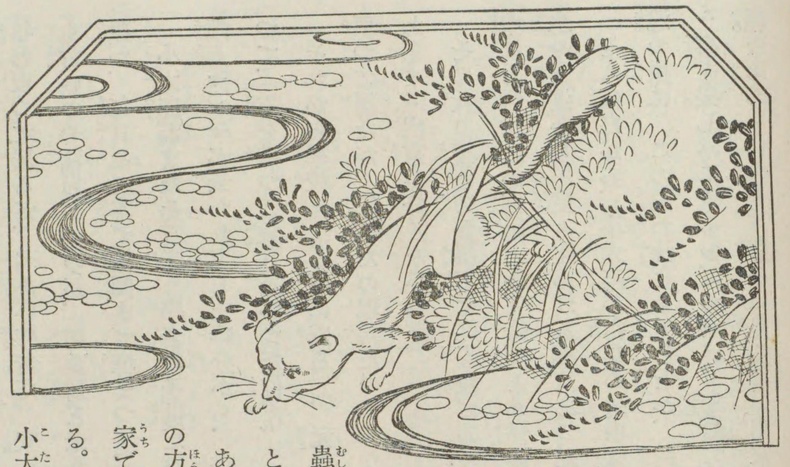
と、思い合せて中を見込む時、六兵衛爺さんわうなづいて、

『なるほどそれで解つた。こゝわむかし長者の時分に、邸からの抜穴になつてたと云う事だが、やつぱりほんとうだつたのだな。それにしてもタツ子さん、うまい事をしなすつた。ドレよく私にも見せておくれ！』

と、云いながら手を出して、その鶏を取ろうとすると、忽ち高い羽音を立てゝ、パツと何所えか飛んで行つてしまつた。

居合わす者わ顔見合わせて、只口を開けたまゝである。

それ以來あの森にわ、夜わ元より晝も朝も、もう鶏の音が聞えなくなつたが、タツ子わ間もなく良縁を得て、立派な家え縁付いて行き、一生幸福に送る事になつた。

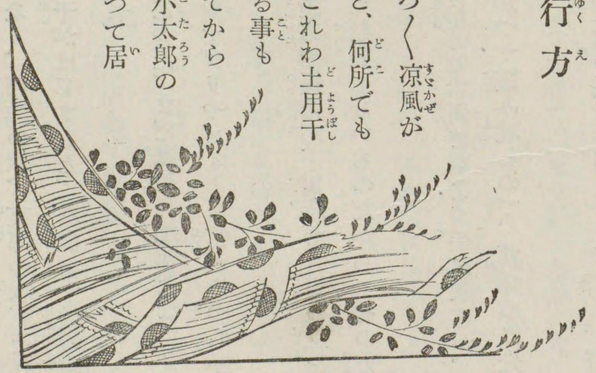


コックリ御殿

一　鼬の行方

土用が過ぎて、そろ〳〵涼風が立ちそめて來ると、何所でも蟲干と云う事がはじまる。これわ土用干とも云つて、土用の間にやる事もあるが、眞實わ土用が明けてから家でわ、此頃その蟲干が初まつて居る。

小太郎の父わ十齋と云つて、



年わ取つて居るが、名高い學者だ。家にわ日本の本わ云うまでもなく、西洋の本、支那の本、それも古いのや珍らしいのが、何萬册と云う程あるのだから、その蟲干がはじまると、八疊と十疊の座敷わ、毎日その本で緣側まで埋まつて、それが十日も十五日も續く。

小太郎わまたそう云う學者の子供だけに、幼い時から本が好きだつた。まだ誕生が過ぎたばかり、漸くマンマが云われ出した時分から、畫本を見せると喜んで、オシヤブリやピイ〳〵笛わうつちやつて、本を持つと放さなかつた位だ。

それから學校え上る樣に成ると、元より本好きの子供だけに、讀方や綴方わ、何時でも甲の上を取つて居たが、算術だの理科だのと云う方の物わ、一向身に染みて勉強しないものだから、その方わあまり出來が好くなかつた。

その代り讀む方わ得意で、學校での教科書の外に、雜誌でも、書籍でも、何でもよく手に取るが、中にも神話とか傳說とか、奇聞とか怪談とか云う物わ、殊に面白がつて讀み耽るので、其爲めに先生や親達から、度々叱られる事もあつた。

それ位だから、小太郎わ毎年の暑中休暇を、何より樂しみに思つて居た。と云うのも、他の子供達の樣に、この間わ泳ぎをやるとか、釣に出るとか、山登りをするとか、野遊をするとか、そう云う事を樂しみにするのでわない。却つてその休暇の間わ、實わ自家で蟲干が初まるので、その時種種な珍らしい本を、勝手に見る事が出來るからであつた。

で、小太郎わ蟲干が初まると、喜んでその手傳をし、そしてその序に、本の間に潰かつた樣に成つて、彼是と拾い讀をするのが、此上も無い樂みなので、その爲めに正午御飯をつい食べずにしまう事さえある。

今年も相變らず蟲干が初まつた。相變らず小太郎わ喜んだ。そして毎日本漬りになつて居たが、その中不圖目についたのわ、一册の古い畫本であつた。表題わ蟲が食つて居て、もう好くわ見えなかつたが、その中にある畫に、コックリ樣と云う物があつた。

これわ竹の棒を三本組んで、その上から圓い盆をかぶせるのだが、これに大勢が手の尖を載せていろ〳〵の事を尋ねると、三本の脚がいろ〳〵に動いて、その問に答えるのに、不思議に物が中ると云う事だ。

コックリ樣！　名からして面白い。而もそれが造作もなく、こんな仕掛で出來るなら、一つ試しにやつて見ようと、根が怪談好きの小太郎わ、固有の好奇心を增長させて、居ても立つても居られなくなつた。

で、早速呼んで來たのわ、隣の義郎と云う少年であつた。この義郎わ小太郎とわ、同じ學校の同じ級で、大の仲好しであつたから、こう云う時にわ何事でも、その相手に成らずにわ居ない。

『ねエ君！　面白いからやつて見ようぢやないか！』

『ウンよし、やろう〳〵。』

と、忽ちの中に話が極まつて、小太郎が棒で脚を作えれば、義郎わ盆を持ち出して來て、型の如く作りあげた。

『さア、何を聞いて見よう?』

『まア君聞いて見たまえ!』

『僕わ何も聞く事わない。』

『何も聞く事が無けりやア、第一このコックリ様と云うのわ、何様な物だか聞いて見ようぢやないか。』

『そうだ、それが一番だ。』

と、二人わまづ咳拂をして、

『エヘン、コックリ様伺います。貴君わ一體何で居らつしやいます?』

と、義郎がまづ聞いて見たが、盆も動かなければ、脚もぢつとして居る。

『君、そんな聞き方したつて駄目だ。コックリ様にやアロが無いんだから、返事したくても出來ないよ。』

と、小太郎わ引取つて、

『ネ、聞きたまえ! こうして尋ねるんだ。コックリ様〳〵! 貴君わ神様で居らつしやいますか?』

と、云つてぢつと見て居たが、まだ盆が頷かない。

『それでわ鬼ですか、魔物ですか?』

まだ動かずに居る。

『でわ人間ですか?』

『……』

『狐ですか?』

『狸ですか?』

『……』

『それとも犬ですか?』

と、いくら聞いても返事が無いので、義郎わ手を放して、

『駄目だよ! 君こんな物が的になるものか。』

『まア待ちたまえ? そう急いたつて仕様が無いさ。もう一つ聞いて見るから、手を元の様に掛けてくれたまえ!』

『いくら聞いたつて返事をするもんか。馬鹿々々しい!』

と、云いながらも、義郎わ澁々手をかけた。所で小太郎わまた言葉を改め、

『それでわもう一度伺います。狐でも犬でも無けりや、若しや魎で居らつしやいますか?』

と、云つて覗き込んだらば、三本脚の一本が、キリ〳〵と鳴つて動き出し、そして上に載せた盆

が、コトンと云つて頷いた。

『やツ、鼬だとさ。』

『フウン、妙な奴だネ。』

『だが何所の鼬だか、それがまだ解らないぜ。』

『待ちたまえ、聞いて見るから。』

と、もう一度手をかけて、

『それでわ伺います。その鼬さんわ何所に居らつしやいます？　天井ですか？』

『縁の下ですか？』

『……』

云つても動かないので、

『それでわ庭の方ですか？』

と、云うと、脚が強くトンと響いたが、その彈みでバタリと倒れ、上の盆がコロ〳〵と、縁側から庭え落ちた。

で、それを拾おうとして、二人わ庭の方え出ようとする途端、その盆よりもまづ目に入つた物がある。それわ一匹の鼬であつた。

鼬わ庭の隅の垣根の側の、萩の咲き亂れた下に、茶色の尻尾をタラリと垂らして、頭をクルリと

向けて、此方を覗めて居るでわないか。

『や、コツクリ様の正體が！』

『オヽ、鼬だ〳〵！』

と、二人わ其所え走りよると、鼬わ早くもチヨロ〳〵と逃げたが、また立止まつてわ此方を見る。それわ鼬の癖なのだが、此場合二人の少年にわ、何だかそれに引きつけられて、どうでも側え呼ばれる様な氣がする。

で、其所まで追つて行くと、また逃げ伸びてわ又ふり向く。

ふり向いてわ逃げ、逃げてわ振り向く。其度に氣わ焦つて、小太郎も義郎も、今わ夢中に成つて追いかけたが、鹿を追う獵師わ山を見ない通り、鼬を追う二少年にわ、庭ももう目に入らない。

で、暫時追いまわす中に、何時か鼬を見失つてしまつた。

『何所え行つたろう？』

『何うしたろう。』

二人わはじめて顔を見合わせて、さて四邊を見まわすと、何時の間に何うして來たか、二人わついに見た事も無い、否昔の畫でわよく見た事のある、大きな古い、物凄い、荒れ果てた、御殿の様な所え來て居た。

『君變だね。』

『どうも不思議だ。』

『夢ぢや無いか知ら?』

と、二人わ眼を擦つたり、股を摘つたりしたが、どうやら夢でもない様だ。

『何しろ一つ入つて見よう。』

と、小太郎わ進みよつて、縁側に足をかけようとすると、義郎わ後から袖を引いて、

『止したまえ〳〵! 化物屋敷だといけないぜ。』

『化物屋敷なら尚面白いや。』

と、もう足を縁端えかけると、ミシ〳〵と云う音がして、思わず足を踏みはづした。

『それ見たまえ! だから危険だつて云うんだ。』

『大丈夫だよ。こりやア木が腐つてるんだ。ぢやア待ちたまえ! 誰か居るか聞いて見るから。』

と、伸び上つて奥の方に向い、

『お頼もう〳〵!』

と、聲をかけると、奥の方から妙な聲で、

『コックリ!』

と、云う返事があつた。小太郎わ義郎を振りかえつて、言葉も無く目を圓くした。

二 古家の主

小太郎わもう一度、奥の方を覗いて一寸考えたが、前よりも一層聲高く。

『お頼もう!』

と、云つて見ると、奥でも前よりも判然と、

『コックリ!』

と、答えるのである。

『君! あれを聞いたか?』

と、義郎を又ふりかえると、義郎わもう尻込をして、

『何だイ、あれわ?』

と、云うのさえ、咽喉で抑る様にして居る。

『誰か居るんだよ。』

『何が居るんだろう?』

と、二人わ顔をよせて囁き合つたが、その間わ奥の方でも、シンと靜まり返つて居て、誰も出て來る様子わない。

『何うする、君!?』

と、義郎わ氣味悪そうに云つたが、小太郎わ無造作に、

『關わないから行つて見ようぢやないか。』

『ナニ、行く？　大丈夫か？』

『何がまた恐いんだ。はじめツからコックリの正體を見に來たんだ。その棲所に來た以上わ、何も遠慮する事わ無い。行つて正體を見屆けてやろう。さア、來たまえ！』

と、云つたが、義郎わまだ緣えも上らず、

『まア僕わ待つて居ようよ。』

『何だなア君わ！　平常わえらそうな事云つてながら、今に成つて急に二の足を踏むのか。卑怯ぢやないか。』

『卑怯でも五經でも仕方か無い。君子わ危きに近よらずだ。僕わ此所に待つてるよ。その代り、若しか化物が庭の方から來たら、僕が此所で捉えよう。』

『ぢやア仕方が無い。僕ア一人で行つてやる。だが正體を見屆けたら、僕が呼ぶから來たまえよ。』

『ウン、行つても好い時分が來たら、僕だつて出かけるさ。』

『よし、それぢやア待つてたまえ！』

と、小太郎わ勇を鼓して、只一人奥えと志した。

床わミシ〳〵ゆれる、壁わバラ〳〵落ちる。荒れに荒れた御殿の中を、小太郎わ大手を振つて、

二室三室と踏み込んだが、奥え行く程闇くなつて、足元もよく見えない位……それに空氣の流通が悪いので、何だか濕つぽい變な臭氣がする。

それでも構わず踏み込んだが、何しろ廣い御殿だから、容易に見當が解らない。

そこで又呼んで見た。

『コックリ御殿の主わ何處だ？』

するとすぐ鼻の先で、

『コックリ御殿の主わ此所だ。』

と、云う者がある。

その聲が人間の様でもあるが、また然うでも無いらしい。

が、兎に角鼻の先で聞えたから、其邊に誰か居る筈と、目を見張つて見まわしたが、誰も人らしい者わ見えない。

が、何所からともなく、まるで燈明でも點ける様に、さつと指し込んで來た光に、よく見ると、つい前の大きな床の間の所に、何時誰が運んだか、先刻自分の家でやつて見た、あのコックリの臺が、其儘ちやんと据えてあるでわないか。

意外の事に小太郎わ、一寸胸を轟かせたが、

『ヤ、誰がこんな所え！』

と、我知らず口走ると、

『おれがこんな所え！』

と、云う聲だけわはつきり聞えて、その主わ何所にも見えない。

小太郎わ四邊を見まわしながら、

『先刻から返事をしながら、誰も出て來ないのわ何うしたんだい？』

と、云うと、

『先刻から出て居るのに、まだ見付けないのわ何うしたんだい？』

と、反對にやり込められる。

『ナニ先刻から出て居るツて？』

と、一心に目を見張つても、さて何も見つからない。

『ほんとに何所に居るのだよ？』

『ほんとに此所に居るのだよ！』

と、又しても鸚鵡返しに云うが、一向姿を見せてくれない。

小太郎わ齒痒いやら極りが悪いやら、一人業を煮やしたが、見れば前にわコツクリ臺がある。こう云う時にこの臺に聞けば、すぐ解るのだがと思つたが、それにわまた相手が要る。

よし、今こそあの義郎を呼んでやれと、聲をあげて今來た方を向き、

『君々！　義郎君！　一寸來てくれたまえ！』

と、呼んだが　その聲わ御殿中の、其所此所に谺しながら、肝腎の義郎の返事わ聞えない。

『恐かア無いから、すぐに來たまえ！』

と、云つてもそれに答えるのわ、賴みもしない天井や壁の、只ワン〳〵と云う響ばかりで、義郎わまだ默つて居る。

耐えかねて取つてかえし、先刻の緣端え來て見たが、其所に待つて居る筈の義郎わ、何處え行つたか姿も見せず、只床板をぬく芒の花が、嘲り顏に招いて居る。

『あれほど云うのに逃げちまつた。何てエ意氣地無しだろう？』

と、此時許りわ小太郎も、心から友達を恨めしく思つたが、さて今更何うも出來ない。

まゝよ、此上わ一人でやつて見るぞと、覺悟をきめて又奥え來ると、今度わ其所にあつた筈の、コツクリ臺も見えなく成つた。

重ね〳〵の手ちがいに、小太郎わ少し自棄に成つて、其場にコロリと倒れると、このまゝ今夜わこの御殿に、泊まり込んでしまう事にした。——こうしたら夜の間に、正體を見屆ける機會もあろうと、こう考えたからである。

三　王鼬の歡待

大膽な小太郎わ、床框を枕にして、夜の更けるのを待つて居た。が、眼わ容易に閉ぢられない。否、眼わ無理に閉ぢても、頭がちやんと覺めて居るから、耳わよく聞えるのである。

やがて天井の上で、ドシインと一つ響が聞えると、續いてカタ〳〵〳〵と云う音がした。

やツ！　何か出たぞと、又眼を見張つて上を向くと、何かわ知らず欄干の所に、動いて居る者がある。

小太郎わ起き上つて又見詰めた。

元より灯の氣の無い古御殿、初わ暗くて解らなかつたが、その中に其隅が少し明るくなつて來たと思うと、まるで月の昇る樣に、段々光がつよくなつて來て、果わピカリと目を射る物がある。眩しいのを我慢して、その光る物をよく見たら、これわ金の冠で、しかもそれを被つて居るのわ、大きな鼬の王であつたが、そのまた光でよく見ると、前後に何十匹となく、家來と見える中鼬や、小鼬共が列を作つて、ゾロ〳〵歩いて來るでわないか。

小太郎わギヨツとした。けれども騒いでわ惡かろうと、息を殺して又横になり、薄目をあけて見て居ると、鼬共わそれを知つてか、それともまだ氣が付かないのか、欄間から長押を傳い、それから柱を下りて來て、襖の破れ目から、次の座敷えと通つてゆく。小太郎わ又身を起し、そつと這いよつて襖の穴から、隣の座敷を覗いて見ると、その中央に鼬共わ、圓くなつて陣取つたが、云うまでもなく王鼬わ、その正面に座を構えて、そして自分の冠の光で、四邊を隈無く照らして居る。

『面白いぞ、これから鼬の懇親會でも初めるのだナ。』

と、小太郎わ一心に覗き出した。

すると、中鼬の中から、頭の少し白くなつた、老年らしいのが進み出て、

『恐れながら大王樣！　今晩お召しになりましたのわ、何の御用で御座りますか？　仰せ聞けられ度う御座ります。』

と、云うと、王鼬わ頷いて、

『イヤ、他の用でもない。今晩わこの殿中に、めづらしい客人が來て居る。あれを何うして歡待したらよいか、それで皆の者を呼びあつめ、相談しようと思うたのぢや。』

珍らしい客人？　ハテナ、何所に客が居るだろうと、小太郎わよく見たが誰も見えない。

と、また中の鼬共わ、互いに顔を見合わせながら、

『左樣で御座りますすな。あの客人わまだ子供で御座りますから、何ぞ面白い事をして遊ばせてやりましよう。』

と、一匹が云い出すと、

『イヤ、子供わ子供だが、平生から本が好きで、種々な事を知つてるから、馬鹿々々しい子供だましてわ、とても氣にわ入りますまい。』

と、他のが云う。

客人わまだ子供？　子供わ子供だが本好きだと？　全體誰の事だか知らないが、自分の事にも似て居る様だと、思うと妙に身體中が、むづ痒い様な、くすぐつたい様な、變な氣持に成つて來た。途端に壁の隙間から、風がスウーツと入つて來て、床にたまつて居た埃を、鼻の穴え吹き込んだから、小太郎わ我知らず、

『ハシクシヨウー』

と、嚔をしたので、慌てゝ袂を口に當てたが、もう追付かない。鼬共わはやくも聞きつけて、

『ソレ客人が目を覺ました。』

『風邪でも引いたんぢや御座いませんか。』

と、云うと王鼬の聲で、

『イヤ、風邪を引いたのぢやあるまい。此所で噂をしたものだから、それが通じて嚔が出たんだろう。はやく誰か見舞に行つて來い！』

と、云うのが聞える。

さてわ矢張り乃公の事だろうか。でわこんな所を見付かつちや悪いと、小太郎わ大急ぎで、また元の床間の側え來て、框を枕にして横に成り、わざと作り鼾をかいて居た。

所えコト〳〵と足音がして、鼬が一匹やつて來たらしい。

けれどもまだ寢た風をして居ると、何だか足の裏がヒヤリとした。吃驚して一寸見ると、それわ

鼬が舐めたのであつた。

で、目が覺めたと思うと、鼬わ直ぐに頭の方え來て、自分の前足を一寸あげて、犬がチン〳〵をする様な眞似をして、

『これわ〳〵小太郎さま！　そんな所で轉寢をなすつて、御風邪を召してわなりません。お目覺めならば直ぐに入らつしやいまし！　王様がお待ちで御座います。』

と、云う。

小太郎わ起き直つて、

『オヽ、それわ有難う。だが一體この御殿わ、誰の御殿で、何と云う所だ？』

『コックリ御殿と申しまして、コックリ様の御殿で御座ります。』

『で、そのコックリ様と云うのわ、一體何様な方なのだ？』

と、聞くと、鼬わニヤリと笑いながら、

『それわ今にお解りになります。何卒此方え入らつしやいまし！』

と、はや先に立つので、小太郎も仕方無く、その太い尻尾について、案内される通りに行くと、鼬わやはり襖の穴から、スツと彼方え入つて行つたが、自分も亦不思議にも、その穴を通されたものか、襖の明いた様子もないのに、はや次の座敷に來て居る。

と、見ると王鼬わ、急いで自分の席を讓つて、

『さア何卒これえ！』

と云う。

小太郎わ遠慮もせずに、今まで王馳の構えて居た、その座に自分が坐つて見た。所が何と不思議でわないか、その座に自分が坐るがはやいか、下がクリ〳〵と動き出して、身體がムク〳〵と押し揚げられる。

『ヤ、ヤ、こりや何うだ？』

と、思わず又退こうとした時わ、自分わ大きなコックリ臺の上に、まるで銅像の様に立つて居る。そして馳共わと見ると、只の一匹も影を見せない。

四　焚火の灰

小太郎わ一寸面食つた。何だか今まで大勢いたちが、一匹もいないちになつたばかりか、自分わコックリの臺の上に乗つて居る。

『ドツコイ、此奴わあぶないぞ。』

て、何うしようと思つて居ると、やがてその臺が動き出した。

と、小太郎わ落ちない用心に、體の中心を取ろうとするのに、臺の方でわ彌々動きがはげしくなり、はてわグル〳〵廻り出したからたまらない。忽ちの中に小太郎わ、ドスンと床の上え投り出されてしまつた。

その勢いで腐つた床板わ、グシヤリと下え抜けてしまつたが、此方の尻も随分痛かつた。

『ア、痛た、た！　酷い目にあわしやがつたな。』

と、立とうとしてまたよろけると、何處かで馳が一時に、

『キツキ、キ、、、、！　カツカ、カ、、！』

と、大聲あげて笑うでわないか。

小太郎わ腹が立つてたまらない。

『おのれツ失敬な馳奴等！』

と、睨めつけたが姿も見えない。只例のコックリ臺ばかりが、まるで自分を笑う様に、三本脚を代る〳〵あげて、面白そうに踊りはねて居る。

癪にさわつてたまらない。

『畜生！　何うするか見ろ！』

と、云いながら飛び掛つて、その臺を踏み潰そうとすると、スルリと脱けて彼方え行つて、又しても跳ねて見せる。何うしても此方を馬鹿にして居る形だ。

小太郎わいよ〳〵怒つて、今度わ又蹴飛ばそうとすると、蹴られない中に臺わ飛んで、はや庭に降りてしまつた。

『おのれツ！』

と追いすがろうとすると、臺わ又三本脚で、サツサと逃げて行くでわないか。

こうなるといよ〳〵追つかける。先方もしきりに逃げてまわる。逃げる、追かける、追う、逃げる……。

何でも此臺を踏み潰してやろう。此臺さえ踏み潰せば、コックリの正體が知れるに相違ない。そして先刻の馳走も、序に退治る事が出來ると、こう思うから一生懸命だ。

するとまた臺の方でも、まるで性のある物の様に、一心になつて逃げまわるが、その間に石でもあれば、ヒラリと上を飛び越えるし、また木でも茂つて居ると、スルリと下を脫けて行くのが、まるで獵師に追かけられて、野山を逃げる兎の様な工合だ。

その中に小太郎も、段々息が切れて來る。苦しいので少し足が鈍ぶると、臺の方でも休む様に、一寸立ち止つたりして見せる。

それがまた小太郎にわ、馬鹿にされる様でならないから、また猛然と勇を鼓して、勢いよく躍かつて行くと、臺の方でも亦元氣付いて、ヒヨコリ〳〵と劇しく駈け出す。

こんな風で半時間許りわ、夢中になつて走りまわつたが、やがて小石に跪いて、バタリ前え倒れた拍子に、コックリ臺わ微塵になつて、何處えか吹き飛んでしまつたから、いよ〳〵不思議に思いながら、不圖氣づいて何處だろうと、一寸立ち止まつて四邊を見まわすと、これわしたり、まるで霧の様な物に取りまかれて、その濛々とした中に、ぼんやり目に映るのわ、恰度蛤の貝から立つと云う、屋氣樓の景色の様な、先刻のコックリ御殿である。

さてわ餘程遠く來たかと、思いながら尚見て居る中に、その御殿わ段々と、判然見える様になつたが、その判然した處で見ると、こわ如何に、コックリ御殿だと思つた家わ、何時か自分の家になつて居る。

『オヤ、何うして歸つて來たろう！』

と、まるで狐につまゝれた様に思つて、試しに眉毛に唾をつけて見たが、家わ正しく自分の家で、而もその家の方から、段々近く寄つて來たと思うと、やがて自分わその家え、まるで呑まれる様に入れられてしまい、そしてちやんと自分の室に、自分わちやんと坐つてしまつた。

『なアんの事だ？　僕わ今まで何うしてたんだろう？』

と、思わず獨語を漏らすと、それを聞いて庭の方から。

『オイ君！　オイ君！　何を先刻から呻つてたんだ？』

と、云いながら入つて來たのわ、先刻コックリ御殿から、獨り先え歸つてしまつた、友人のあの義郎であつた。

『オヤ、君こそ先え歸つて何してたんだ？』

『何してるもんか。僕ア何所えも行きやアしないぜ。』

『なアに、先刻僕と一緒に行つたぢやないか。』

『馬鹿云いたまえ！　何所え一緒に行くもんか。今初めて遊びに來たんだよ。』

と、まるで話がトンチンカンだ。

小太郎わいよ〳〵譯が解らない。けれどもよく考えて見ると、今まで自分の行つて來たことわ、如何にも馬鹿々々しくて、恥かしくて、まるで話にもならないから、只溜息を吐いて居る。

『何うしたんだよ君！　何をぼんやり考えてるんだ？　しつかりしたまえな！』

と、果わ背を一つ打たれた。

打たれたその途端に、はじめて正氣が付いた様に、

『ア、そうだ、全く僕が惡かつたんだ。』

と、云いながら前を見たら、此間から熱心に見て居た、例の畫本が置いてある。

『これだ、此奴が惡いんだ。イヤ、此奴が惡いんぢやない。こんな奴にだまされたのが惡いんだ。よし、もうこれから大丈夫だ。こんな奴にだまされるもんか。』

と、云いながら立ち上つて、その本を手につかむと、直ぐ庭え下りて出た。

『オイ、君何するんだ？』

『何でもいゝから見てくれたまえ！』

云いながら庭の隅から、落葉や枯枝をかきあつめ、それにマツチで火をつけて、サツと焚火をはじめたが、

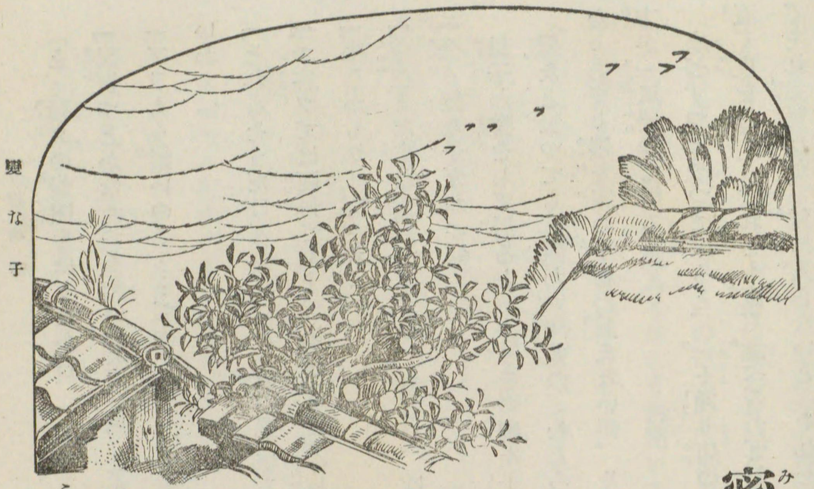
『これで斯うしてしまやア可いんだ。』

と、云いながらその火の中え、本を投り込んだと思うと、すぐベラ〳〵と燃え上つた。義郎わ手を拍つて、

『ウン、君えらい事やるね、それぢやアもう僕わ云うまい。實わその事で來たんだが、君がもうそう云う氣になつたら、餘計な忠告わしまいねエ。』

と、更に小太郎の手を取つた。

先刻わ不實な義郎だと思つたのが、やつぱり頼もしい友達であつた。



蜜柑地獄

一變な子

『何て寒いんだろう。また雪になるんぢやないかねエ。』

母わ空を見あげながら、心配そうにつぶやいて居る。

お露わ一山づゝに積んだ蜜柑に、精出して値札を立てながら、

『いやだねエ。せつかく店を出した許りなのに、今夜も早じまいぢやア、ほんとに仕ようがないぢやないの。』

『そんな事云つたつて仕方がないやネ。まア降るまで居ようよ。オ、寒い。』